

人口増強・主張の基

人 口 問 題 研 究

第 三 卷 第 九 號

昭和十九年九月刊行

北方圈の民族構成

調査研究

小山榮三

彙報

人口問題研究所兩部長の異動——人口問題研究所特別懇談會

結核對策要綱の閣議決定——中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短縮に関する閣議決定——國民優生法施行規則中改正の件公布——勤勞顯功章令並に同令施行規則の公布——勞務調整令施行規則中改正の件公布——國民職業能力申告令中改正の件公布——食糧管理法の一部施行期日の件等公布——農地開發事業補助規則中改正の件公布——滿洲開拓團編成助成規則の公布——厚生省人口局の健民特別指導地區設定要綱の決定——昭和十七年度地方衛生技術官事務打合會の開催——厚生省勞働局の重要な事業場特別鍛成實施要綱の決定——内閣統計局調査昭和十七年七月分全國及都市別生計費指數の發表——商工省の昭和十七年七月都市小賣物價概況の發表——財團法人人口問題研究會主催第十五回人口問題同好者會合の開催——學校修業年限短縮に關する翼政會の施策進言——昭和十七年七月未現在關東州人口の發表

文獻

邦文人口問題關係文獻(二八)

厚 生 省 人 口 問 題 研 究 所

人 口 問 題 研 究

第三卷 第九號

調査研究

北方圏の民族構成

小 山 榮 三

第一章 ロシア人の北方民族研究

南方に於ける赫々たる皇軍の戦果は、日本の嚴然たる北方の護りに負つてゐることは云ふまでもない。

民族複合國家たるにも拘らずソ聯は獨ソ開戦の當初に於て一部に豫想されたが如き民族的内部軋轢によつては崩壊せず、長期戦に轉化すると共に益々熾烈な抗戦意識と頑強な抵抗を示してゐる。

ソ聯は如何にして、多數の異民族をかくの如く強固に統一し、同化したのであらうか。

歴史の初めより歐亞一大陸の中間に介在するロシアはその民族的發展に際しアジア民族とヨーロッパ民族との諸勢力と絶えざる争鬭を行はなければならなかつた。アジア民族としての匈奴、カザール、アヴァール、成吉思汗、ヨーロッパ民族としてのスウェーデン王チャールズ十二世、ナポレオン、一九一四年の獨壟軍、現在の権輿軍に至るまでロシアは國土侵寇の強敵と死闘を繰返すことによつてその國土を維持して來たのである。

ロシア人が民族認識と民族政策に於て特に卓越した能力を持つてゐるのばかり外來民族侵入者との絶えざる鬪争と征服の深刻な民族體験にその基礎を持つてゐるからでもあらうが、又民族工作を實施する爲めに該地方住民の民族性、習慣、風俗及び宗教社會組織等に關する大規模な科學的調査を行ひ、それを基礎として微妙且つ周到なる關係を設置したにも基づいてゐるのである。

一三八〇年クリコヴィに金帳汗國を破つて以來、蒙古人によるロシア統治の瓦解はモスクワ帝國をしてスラヴ民族を結成して有力な國家たらしめる最大原因をなした。そしてスペイン、ポルトガルが西方及び南方に於て海賊商船隊を以て廣大なる新世界の發見に從事してゐた時、ロシアは東方に於てコザック部隊を前衛として同様の工作を遂行し約一世紀にして太平洋岸にまで達したのである。

本來から云へばロシア民族のシベリア征服の第一歩はシビル汗國。(カ)

ナート)を攻略した時に始まる。現にシベリアの名稱も夫れに由來するのである。

註 シベリア Siberia と云ふ名稱が如何にして起つたかに關しては異論がある。ロヴァチフ Golovacheff はシベリアの語は現在のトボルスク政府のある中部イルチシ河畔に定住し、起源的に蒙古から來た古代部族名 Syry 又は Sybir から由來したものであると考へてゐる。

この部族はロシアのシベリア 征服の前永い間韃靼汗に臣事し、その殘存者もこの部族名をなのり、この名稱は又クチュム汗國の首府—Sibyr 又は Isker の名でもあつた。然し Sibyr の語はロシア人が古代都市イスケルを呼んだ名だと考へる時にはチリシコウスキ Chilickowski の意見が眞に近いやうに思はれる。彼の説によると東部スラヴ人は全北方地域を Sievier と云ふ言葉を以て呼ぶのを常としてゐた。従つて北方アジアの國竇にそな首府イスケルは Sievier, Sivir, Sybir と名付けられたのである。*

* Czaplicka, M. A. Aboriginal Siberia. p. 1

シビル汗國の攻略は露西亞東漸の第一歩たる曠原民族征服に導いたのであつた。ロシア民族は先づ毛皮狩、毛皮賣買及採金者を次にコザツクを先遣隊として漸次東北に向つて進み其の地方に蟠居した先住民族を驅逐し又是吸收して遂にシベリアを歐露と聯結せしめたのである。*

* 花岡止郎著「ロシアの民族政策」三〇頁

十六世紀迄ウラル山脈から太平洋岸に及ぶ所謂北方圏に屬する廣大な地域に關する正確な事情は歐洲人には知られてゐなかつた。最初に此の地方を發見した者は征服慾と貪慾に満ちた冒險者達であつて、彼等は原住民に對し飽くなき迫害と掠取とを加へた。前者はコザツクであり後者は毛皮商

人(プロミシゴレニキ)である。そして彼等の手記が北方圏諸民族の生活事情に關する最初の民族學的報告となつたものであつて、ベーリング Bering が到着する百年以前すでにベーリング海を發見してゐたコザツクのデズネフ Dezhnev はトメリカ・エスキモまでも記述をしてゐたのである。更にボヤルコフ Poyarkov、カーベロフ Khabarov、アトラソフ Atlassov、スター ドキン Stadukhin、チヒルノフ Chernov の如き冒險者はエカギール、カムチャダール、チュクチ、コリヤーク等に關する貴重な資料を殘した。此の中で特に中央政府の注意を惹き、太平洋岸に民族學的調査隊を派遣する機縁を與へたものはカムチャツカ發見の報告であつた。ピーターダ帝は之によつて第一回ベーリング探險隊を派遣して、北アメリカとアジアが陸つべきであるか否かの問題を解決させようとした。一般にロシアの民族學の進歩は一七三三—一七四三年の所謂カムチャツカ遠征に負つてゐる。ヨーロッパの歴史に於て學士院がかかる探險隊の企畫に參加したのは之が最初であり、亦民族學的調査が獨立の科學的部門として含まれたのも之が最初である。著名な學士院會員であつて地歴の教授であるミューラーが此の探險に於ける民族學的研究を指導した。學士院は之で満足せず、更に有能な多數の學者を此の探險の幹部として送つた。クラシコニコフ Krasheninnikov やステーラー Steller の如き人々は此の中についた。此の探險は約十年續いた。そして民族學的調査の歴史に於て現在最も合理的なものと考へられてゐる調査様式であるところの最初の滯在調査を行つたのであつた。此の探險の結果は科學に於ける一時代を劃するものである。探險隊の指導者であるミューラー G. Müller 自身はカムチャツカに行くことが出來ずイルクツクに留まつてゐたけれども、彼はコザツクや毛皮商人の古文書をシベリアの資料室に發見して非常な貢獻をした。此の記録は百五十年に

涉る太平洋沿岸の諸部族の歴史及び地理的分布を明らかにするものであつて、千六百四十八年のデズネフ *Dezhnev* の有名な報告書は此の中につるものである。ニホーラーは之等の記録を彼のロシア史集成 *Sammlung russischer Geschichte* に於て使用し、亦フィッシャー *Fischer* は彼のシベリア史 *History of Siberia* に於て利用してゐる。此の探險の最も詳しき收穫はステーラーと、クラシヨニコフの研究である。クラシヨニコフのカムチャツカ地方の記述 *Description of the land of Kamchatka* の第一巻は五〇〇頁から成り、單にカムチャツカの標準的民族學研究論文であるばかりではなく極北の太平洋部族の全圖——カムチャダール、コリヤーク、千島居民、チユクチ、アメリカの近隣部族に關する代表的な著述と看做されるであらう。ステーラー、クラシヨニコフは既にアメリカの住民は何處から來たかと云ふ問題をさへ取り扱ひ、地理的、民族學的資料の比較からアメリカ人はアジアより移住したものであるといふ結論をさへ導き出してゐる。クラシヨニコフは百八十年以前、カムチャダール語とコリヤーク語及びコリヤーク語とチユクチ語の親緣性を明らかにした。彼はチユクチ語はコロシア學者に依つて今世紀の始めになされた。まことに之等の早期の探險者が言語學的資料に大なる力點を置いたといふことは驚嘆すべきことである。彼等は各種族の語彙を編纂し、その上方言研究の資料をさへ蒐集した。之等の研究は出版されるやいなや數ヶ國語に翻譯され、北東アジア、北西アメリカの民族學に關する唯一の權威あるものと考へられてゐた。クラシヨニコフ、ステーラーの著書は現在に至るまでその科學的價値を維持してゐる。カムチャダールの民族誌に關しては之等の研究者が之を取り

サパスカン族——と接觸する様になつた。ロシアの毛皮貿易のための地域の此の擴張は二つの重要な結果を齎した。第一は毛皮企業を會社組織に結合する様にしたことである。此の傾向の結果は十世紀の初期に成立した露米商會の組織である。營業を合理的基礎の上に確立し商品の供給を増加するため此の會社は調査隊を派遣したのであるが、之は亦民族學的報告をも蒐集した。他方、中央政府も新しい占領地の要求に應ずるために科學的な新航路調査隊を組織しなければならなかつた。此の航路調査隊はビリングス Billings 及びサリチエフ Sarychev(一七八五—一七九三年)の航海に依つて開れたものであるが、之は學士院がヨーロッパ・ロシアとアジア・ロシアの總括的調査をなさんとして組織した有名な一聯の探險の一部に過ぎない。此の探險は民族學的研究の歴史に於て重要な役割を演じた。學士院は此の探險の指導方針に於て特に慣習、言語、傳説、古物に關するあらゆる物を蒐集すべき指令を與へた。此の航路調査隊は主に海洋學的、自然科學的研究を成したが、同時に廣汎な民族學的調査も實施した。ビーリングス及びサリチエフの探險はチュクチの生活及び詳細なユカギール、オホーク地方のツングース及びアメリカの諸部族(チュガチース、テナイス、アレウト)に關する資料を蒐集した。ローベック Robeck 博士は十二の土語の語彙を編輯した。リジアンスキイ Lisienski はクナイ及びウナラスカ諸島のアレウト、カジヤツク島のエスキモの記述を與へた。ラングスドルフ Langsdorff はカジヤツク及びプリンギットを記述し、更に北海道のアイヌ、カリフオルニア土人をたづね、カムチャダールに行はれる犬飼養に關する非常に貴重な手記を残し、更に各地方のアイヌ方言に關し比較言語學的資料を我々に與へた最初の人であつた。ほど同じ頃、セント・ピータースブルグのアジア博物館に勤務してゐたクラプロート Klaproth は今迄探險した

人々の資料を比較する事に依つて極北の民族はアメリカから來たといふ說を出した。コリマからベーリング海峡に及ぶウランゲル Wrangel の旅行は先づチユクチ及びユカギール、北方ツングースの全地域を横断した最初のものであつて、彼は之等の民族の心理學的特異性に關し銳利な觀察を加へた。そしてチユクチの馴鹿飼養は比較的最近のものであることを結論した。

この探險隊には全然加はらなかつたけれども北太平洋の民族學に非常に貢獻したのは、ザコスキン Zaloskin 大尉と動物學者ボツネセンスキイ Voznesenski の二人である。ほど同じ頃この二人は北太平洋を訪問した。主に地形學的業績を殘したザコスキンは、ユーロン河及びブスコクヴィム河の沿岸に居住してゐる部落のノルトンサウント・エスキモ並びにアサパスカンの統計及び民族學に關する貴重な資料を蒐集し、それを故國に持ち歸つた。彼は單に海岸地方を調査した以前の旅行者とは異り、奥地に迄深く踏査したのである。彼が最初に注意をした有名な「ボトラッヂ制度 Potlatch」の記述は特に注意すべきである。ボツネセンスキイは各種自然科學部門の問題に關し學士院より多數の調査委託を受けたにもかゝはらず、餘暇をさしてチユクチ、コリヤーク、アジア及びアメリカ・エスキモ、アレウト、アサパスカン、トリニギット、カナダ及びカリフオルニアのインディアン等多數の部族の民族學的資料を蒐集した。此の蒐集物は學士院の人類學、民族學博物館に陳列され、現在に於ても最大の科學的價値を持つてゐるものである。更に宣教師ミヤミヘフ Veniaminov は在來の研究者達と異り——之等の人々は短時間現住民と接觸し、通譯を通じて彼等と話した結果、その言語學的收穫は少數の語彙を記録するに過ぎなかつた。之に反しミヤミノフは彼が記述した民族の間に數年間住み、現住民の言語

を完全に話し、所謂定住的調査方法を採用したのである。彼は北太平洋の原住民の間に總計十六年過した。アレウトの間に十年、トリンギットの間に六年居た。彼の布教義務は原住民の物質的、精神的文化の各方面の知識を得る充分なる機會を與へた。有能な鋭い觀察者であつた上に、更に彼は民族學者に於て特に重要である所の如何にして原住民の信頼と同情をかち得るかと云ふことを知つてゐる人であつた。當時既に其の古い個有の文化を失ひかゝつてゐたアレウトの廣汎な彼の記述は、心理學的分析を加へてゐる。之等の民族は其の民族的特性を全く失つてしまつたので、この民族の消失した文化の研究を可能ならしめる唯一の、そして最後の資料はベニヤミノフの研究業績である。現在に於ても尙ほアレウトに關するベニヤミノフの業績に關してはヘンリー・エリオット H. Elliot やアラスカに關するその著述 (An Arctic Province: Alaska and the Seal Islands. L. 1880.) に於てベニヤミノフの著作は獨特のものであつて、それ無くしては彼等が此の地域の支配者であつた全時代間にロシア人がなしたことは全く不明の中に迷はなければならなかつたであらうと述べてゐる。トリンギットに對するベニヤミノフの業績に關しては、その著 Die Thlinkit Indianer. L. 1891. に於て彼は原住民の性格、態度、習慣の理解に於ては誰よりも優れて居り、私はトリンギットの神話の最も完全な蒐集を彼に負つてゐるのである。ロシア人が十九世紀の前半に於て極北太平洋に於て行つた一聯の探險は有名なオホーツク海の南部に於て行はれたミッデンドルフ Middendorff の有名な旅行で終末を告げた。彼はツグール灘に住むギリヤークの最北境地に到達した。更に彼はアムール河の左支流に轉じ、一、二、三のツングース部族と接觸し最初の興味ある報告を齎した。此の部族の中には彼が詳細に記述した氏族組織、及び言語のマネギール及びネギダールがあつた。かくして十

七世紀にロシアのコザツクに依つて發見された同じ民族にロシアの一科學者が會つた最初である。最後にコリヤークとチュクチの生活を記述し、カムチャツカの最初の民族學的地圖を書き上げたディットマール Dittmar の探險は十九世紀の五十年代に行はれた。ミッデンドルフに依つて進められたアムール地方の民族の研究は、アムール河の下流域及び樺太に住んでゐて來たことで、之はネベルスコイ Nevelskoi が樺太島とロシア本土の間の海峽を發見した後に行はれた。アムール河の下流域及び樺太に住んでゐる民族の非常に正確な記録を與へた最初の者は、露米商會の使用人であつた。此の報告の主なるものは、ネベルスコイのアムール探險隊に加つた有能な人々に負つてゐる。ロシアの學士院は凡ゆる角度からアムール地方を研究すべく綜合的探險隊を組織した。その中の民族學部門はアムール地方に二年半過したショレンク Schrenck に委任された。彼のアムール地方の諸部族に關する専門論文は、歴史及び民族學を含む三卷と、言語を取り扱つた二附錄から成つてゐる。ショレンクこそアムール地方の民族學のコロンブスと云ふことが出来る、とレオ・スターインベルグ L. Sternberg が述べる。廣汎な歴史的探求と直接觀察の後に無數のアムール部族の科學的分類を彼は始めて確立し、之等の部族に對し現在尙ほ一般に承認されてゐる所の最初の民族的名稱を與へ、各部族の歴史的、民族學的記述を残した。以前殆んど知られてゐなかつた部族の數、部族の名前が明らかにされ、その生活が具體的に知られる様になつた。彼の著作の大部分はギリヤークの民族誌を取り扱つたものであつて、彼の著述は完全なものとして研究的分析のモデルと考へられてゐる。更にショレンクの材料に依つて東洋學者のブルーベ grub は「カルドの言語を明らかにした。亦ショレンクはアムール地方の頭蓋學に對する先驅的業績を殘した。彼は單なる記述のみ

では満足せず、更に民族と文化の間の相關關係を發見しようと努力した。あらゆる民族、あらゆる文化は彼にとつては歴史及び比較民族學の新しい問題であつた。彼の之等の問題の取扱い方はアムール地方に於ける犬飼養、はギリヤーク起原であり、定住ツングース部族は其の家畜を失つた所の以前の馴鹿遊牧民であつた、といふ様な多數の重要な問題を明らかにし、更にアイヌと朝鮮人の關係に對する新學說を提出した。彼はウラル・アルタイ民族の代りに、ハレ・アジアチツクといふ現今一般に承認されてゐる語彙を與へた最初の人である。シュレンク以後アムール地方の科學的研究は漸次盛んとなり、ハバロフスク及びチタの地理學協會の支部としてウラヂオストツクにアムール研究學會の如き學術團體が建設され、亦ウラヂオストツク、ハバロフスク、チタ、アレクサンドロフスクに博物館が建設された。尙ほ太平洋岸の民族に關しロシアの學者に依る多數の價値ある研究が發表されてゐる。先づツングース部落の研究から始めるならば、マーク Maack (一八五五年) はアムール及びウスリーに住む全ゴルド部族を記述し、ブリルキン Brylkin はゴルドの言語辭典と文法を編纂した。特に注意すべきはゴルドのシャマーン教及び民俗に關する研究を發表したシムケウイツチ Shimkevich 及びロパチンの歴史的調査を含んだ廣汎なゴルドの著作であらう。一九一〇年にはスターインベルグがゴルドの宗教及び社會組織の研究を發表し、プロトディヤコノフ Protodiakonov はゴルドの辭典、歌謡、福音書の翻譯を出版した。之等の資料に基いて滿洲研究者のツアハロフ Zakharov はゴルド語は滿洲語と密接な關係があると云ふ結論に達した。ズンガリ・ゴルドの言語に關する資料は一九〇三年にロブローブスキ耶 Dobrolovski に依つて蒐集された。他の重要なツングース部族の一つはオロチーである。彼等を最初に記述した學者はマルガリトフ Margaritov

であつて、彼等の人體計測をも行つた。一八九六年にレオントヴィツチ Leontovich はオロチー語のツムニン方言の辭典を發行した。同じ年にスターインベルグはオロチーの社會組織及び宗教を研究した。彼は定住ツングース—ゴルド、オロチー、オロツクーの間ではナンニーと自稱してゐる事を明らかにし、親族階級組織の殘存物を發見した。南部オロチーを最初に詳細に研究したのはブライロブスキ耶 Brajovski であつた。亦、アムール地方の有名な旅行者アルセニエフ Arseniev は約二十五年間彼等の部族を研究した。ネギダールの社會文化及び宗教に關してはスターインベルグが資料を集め、シュミニット P. Schmidt は彼等の辭典を出版した。トランスバイカリヤ地方のオロチーの民族學はシロコゴロフ Shirokogorov が研究し、特にシャマニズムに關して優れた報告を發表してゐる。彼は一九二四年に英文の滿洲族の社會組織に關する詳細な卓越した研究を發表した。九〇年代にはイワノフスキイ Ivanovski がソロン及びダウルに關し著述をあらはした。現在、學士院の探險隊はアムール盆地に住むサモギール、ネギダールを調查中である。ツングース部族の研究に於て種族的親緣性とその起原の問題に關しては主に支那及び滿洲の歴史的證據に依存しなければならなかつた。この點に關して民族學はロシアの支那學者ワシリエフ Vasilev、ヒヤチニスク Hyacinth、ゴルスキイ Gorski、バラデウス Palladius の研究のお蔭を蒙らなければならなかつた。バラデウスはウスリーランドの歴史に關し支那の資料を使用して、七世紀に於て尙ほ支那の影響を受けた文化的滿洲國家渤海が存在してゐたことを明らかにした。チルの支那墓銘翻譯に依つて支那學者ボボフ Popov はアムール地方流域に於ける十五世紀時代の民族分布を明らかにした。考古學は近代及び史的民族誌の補助科學として役立つ。多くの學者が此の分野に活躍した、ブツセ

Busse 及びナグロフ Nadarov が南部ウスリーランドに於て、マルカリトフがアムール灣沿岸に於て、ロパチンが樺太に於て、ボリヤコフ Poliakov が南北樺太に於て、スプルネンコ Suprunenko が南樺太に於て、スターンベルグが北樺太、アムグン、アムール下流に於て、ピルズドスキ Pilsudski が樺太に於て考古學的研究をした。彼等の業績に依つて南部ウスリーランドに於て考古學的研究をした。オホーツク地方及びカムチャツカに住む北方の駒鹿飼養ツングースに關しては十八世紀末及び十九世紀の始めに多數の旅行者が記録を残してゐた。此の資料とパスキー Spaski (一八二〇年) のノートはヒフナー Schifner の著述の基礎として役立つた。一八九三年—一九四年にゴボラス Bogoras はラムート語の資料を集め、ユカギール、チュクチ、コリヤーク、アジア・エスキモ、ギリヤークの如き太平洋岸に住む古アジア民族群は日本のアイヌを除き殆んど獨占的にロシアの學者に依つて研究された。ロシア人が最初にアイヌと遭遇したのは千島に於てであった。クラショニコフ Krasheninikov は彼等とその言語を記録してゐる。ロシアの旅行者ボッネセンスキ Voznesenski は四〇年代に彼等の土俗品を蒐集した。それは現在學士院の人類學、民族學博物館に陳列されである。ラドリンスキ Radlinski は千島語の辭典を残し、ポロンスキ Polonski は一八七一年に千島に關する學述論文を發表した。樺太アイヌの研究は樺太にロシア人が居留地を設けると直ちに開始された。アムール地方へのシユミツトの探險隊の一員であつたブリリキン Byulin はアイヌ語の大辭典を編纂した。アイヌに關し特に注意すべきは一八七五年にドブロトボルスキ Dobrotvorski がアイヌ語、ロシア語の對譯辭典を出版したことである。ほど同じ頃、アヌツチク Anuchin はアイヌ部族に關する人

類學的論文を發表しアイヌはコーカサス人種に屬すると云ふ學說を反駁した最初の人になつた。一九〇三年—一〇五年アイヌはピルズドスキ Pilsudski に依つて熱心に研究された。シエロシヨブスキ Sieroshevski は北海道のアイヌを研究し、更にギリヤークの民族學的資料を蒐集した。ギリヤークに關する最初の詳細な論文はシユレンクに依つて書かれた。スターンベルグはギリヤークの各方面的資料を集め、特に言語學、社會組織にて卓越した業績を擧げ、ギリヤーク語はアメリカノイド群に屬すると云ふ重要な結論を導いた。彼のギリヤークに於ける親族階級組織、一方的從兄弟姉妹結婚及び團體結婚の殘存は太平洋の研究に對してのみならず、亦一般民族學にも重要な影響を與へた。此の發見は同様の社會組織が樺太及びロシア本土のギリヤークのみならず、多少變形されても居るが、ゴルド、オロチ、オルチ、ネギダール、オロツコのツングース部族にまで存在してゐることを明らかにした。その結果殘存物から判斷すると此の組織はウラル・アルタイ民族の大部分に存在し、そしてすべての之等の民族が少くとも家族組織に關する限りに於ては、一方アメリカのインディアン、他方印度のドラヴィダ人に關係があることを推測せしめた。ギリヤークに關する彼の研究はジェヴツップ探險隊の報告として出版されて居る。ギリヤークの體質人類學はマニゼル Maniser に依つて取り扱はれた。民族學上に於ける太平洋問題の解決に最も寄與した優れた學者はヨヘルソン Jochelson とボゴラスである。北西アメリカと北東アジアの民族の關係を調査すべく行はれたジェヴツップ探險隊に於て、チュクチ及びアジア・エスキモの調査はボゴラスに依つて、コリヤークの調査はヨヘルソンに依つて行はれた。未だ調査されない古アジア部族はカムチャダールとアレウトのみである。ヨヘルソンは老年にもかゝらず、此の仕事を受け一九〇八年に

ロシア 地理學會が組織したシベリア探險隊の民族學部長ユーリイ年現地に
駐在した。極く少數のトコトが生存してゐたせむるの大部份は既
にアメリカ化せられた。が、彼はその特殊な傳説を蒐集して其を記入し
前の社會的、宗教的生活狀況を復原した。更に考古學的發掘は過去に存
するたゞ、ノウト文化を明らかにした。同様に、カムチャダールの研究に於
ても彼は同様の成功を示したのである。彼等の研究に依つて古トシヤ人の
祖語的、文化的親緣性はウラル・トルタイヤのアメニカハイドである
ことが明かにされた。ロシアに於ける民族博物館の施設の充備は民族學的
研究の發達に伴つてその先覺者の意志を顯すゝもの如クレセス者等更
に國策と結びつけ新しく民族學的分野を開拓する努力がなされたが現
在の歴史書籍に見ゆ。

* Academy of Sciences of USSR. the Pacific. Russian scientific investigation. p. 161 にて の著者が北方民族の研究に於て如何なる新進歩
を示すかと題する Czaplicka, M. A. Aboriginal Siberia. Q
Bibliography に據る參考書等に記述する。

(参考書目)

1. 露文著作(ツアブリカの英譯との互訳)

- Adelung, F. Review of travel through Russia. Petersburg, 1810.—
- Adrianoff, A. V. Travels to the Altai and beyond the Sayan Mountains in 1881. Petersburg, 1883.—
- Agapitoff, N. Contribution to the study of the beliefs of the aborigines of Siberia. E. S. S. I. R. G. S., 1884.—
- Agapitoff and Khangaloff. Materials for the study of Shamanism in Siberia. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1883.—

Album of a traveller through Siberia and Asiatic Russia. Tomsk, 1911.—

Anuchin, D. N. Contributions to the history of relations with Siberia until Yermak. Moscow, 1890.—

— Among the ice and in the darkness of the polar night. 1897.—

Anuchin, D. Sledges and boats as accessories at the burial ceremony. Moscow, 1890.—

Argentoff, A. Notes of a travelling missionary in the Polar region. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1857.—

— A description of the St. Nicholas Chaun Parish. S. S. I. R. G. S. 1861.—

Aristoff, N. A. Notes on the Ethnic Composition of the Turkic Tribes. L. A. T. Moscow, 1897.—

Banzaroff, D. The Black Faith, or Shamanism among the Mongols. Petersburg, 1891.—

Barteneff, Burial customs of the Ostyak of Oboorsk. L. A. T. Petersburg, 1905.—

Barteneff, V. In Far North-West Siberia. Bielankin and Zograff. The nations of Russia. 1892.—

Bielayewski. A journey to the Glacial Sea. Moscow, 1883.—

Bieliowski, K. A. Women among the aborigines of Siberia. Petersburg, 1894.—

Bogayewski, P. M. A sketch of the mode of life of the Votyak of Sarapul. Moscow, 1888.—

Bogdanowich, S. I. Sketches of the Chukchee Peninsula. Petersburg, 1901.—

Bogdanowski, A. I. The Siberian community and its rôle from the politico-economical aspect. Tobolsk 1898.—

Bogoras, W. Brief report on the investigation of the Chukchee of the Kolyma district. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1899.—

— Materials for the study of the Chukchee Language and Folk-Lore, collected in the Kolyma district. I. R. A. S. Petersburg, 1900.—

— Sketch of the material life of the Reindeer Chukchee based on the Con-

- datti Collection deposited in the Ethnogr. Museum of the In. Russ. Ac. of Sc. Petersburg, 1901.—
- Bogorodski. A nomico-topographical description of the Gijiginsk district. Petersburg, 1853.—
- Buryat traditions recorded by various collectors. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1890.—
- Czekanowski, A. L. Diary of the expedition along the rivers Lower Tunguska, Olenek, and Lena in 1873—5. I. R. G. S. Petersburg 1869.—
- Dmitrieff-Mamonoff and Golodnikoff. Note-book of the Tobolsk Government. Tobolsk, 1884.—
- Dobrotvorski. Ann Russian Dictionary. Kazan, 1875.—
- Dyachkoff, G. T. The Country of the Anadyr. S. S. A. C. Vladivostok, 1898.—
- Dyedloff, V. L. Through Siberia, 1900.—
- Falk. Full collection of scientific travels in Russia. 6 vols. Petersburg, 1824.
- Ganoff, I. Sketches of Far Siberia. Khomel, 1894.—
- Gedenstrom. Sketches of Siberia. Petersburg, 1830.—
- Getchinson. Extinct monsters. 1901.—
- Golovacheff, P. M. Siberia: its nature, people and life. Moscow, 1902.—
- Far-Eastern Russia. Petersburg, 1904.—
- Gondatti, N. Traces of Paganism among the aborigines of North-Western Siberia. Moscow, 1888.—
- Trip from Markova Village on the Anadyr River to Providence Bay on Bering Strait. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1898.—
- The bear-cult among the aborigines of North-Western Siberia. I. S. F. S. A. E.—
- Gorokhoff, N. Yurung-Uolan. A Yakut story. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1864—5.—
- 'Kinitti.' E. S. S. I. R. G. S. 1867.—
- The Pagan Ideas of the Ostyak. Tomsk, 1890.—
- Gruzdneff, F. The Amur: nature and people of the Amur country.—
- Hagemeister, I. A. A statistical survey of Siberia. Petersburg, 1854.—
- Hekker, N. A. Materials for a description of the physical characteristics of the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1896.—
- Istavrin, V. The Samoyed, their home and social life. Petersburg, 1847.—
- Ivanowski, A. A. A Directory of Ethnographical Essays and Notes published in the Siberian newspapers from the beginning. Moscow, 1890.—
- The Mongol-Torgout. I. S. F. S. A. E. Moscow, 1893.—
- Anthropological constituents of the population of Russia. Moscow, 1904.—
- Ivanowski, I. I. Bibliographical index to books and articles concerning the Chukchee, E. R. Moscow, 1891.—
- Jochelson, W. I. On the rivers Yassachna and Korkodon. I. R. G. S. Petersburg, 1898.—
- Sketch of hunting pursuits and the peltry trade in the Kolyma country. Petersburg, 1898.—
- Materials for the study of the Yukaghir Language and Folk-Lore, collected in the Kolyma district. I. R. A. S. Petersburg, 1900.—
- Wandering Tribes of the Tundra between the Indighirka and Kolyma Rivers. L. A. T. Petersburg, 1900.—
- Past and present subterranean dwellings of the tribes of North-Eastern Asia and North-Western America. Congr. Amer. Quebec, 1906.—
- Ethnological problems along the North Pacific coasts. Petersburg, 1908.—
- Notes on the phonetic and structural basis of the Aleut language. I. R. A. S. 1912.—
- Jochelson-Brodská, D. L. Contribution to the anthropology of the women of the North-Eastern Siberian tribes. R. A. I. 1907. Moscow, 1908.—
- Jytecki. Sketch of the mode of life of the Kalmuk of Astrakhan.—
- Katanoff, N. F. A journey to Karagas in 1890. I. R. G. S. 1891.—
- Ethnographical survey of the Turco-Tartar tribes. Kasan, 1894.—
- Report on an Expedition from May 15th to Sept. 1st, 1896, in the Minusinsk district of the Yeniseisk Government. Kasan, 1897.—
- Kaufman, A. A. Sketches of the peasant household in Siberia. Tomsk,

- 1894.—
 — Peasant communities in Siberia according to local investigations in
 1886—92. Petersburg, 1897.—
 — Siberian migrations at the end of the nineteenth century. Petersburg,
 1901.—
- Khangaloff, M. N. New materials respecting Shamanism among the Buryat.
 E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1890.—
 — Customary law among the Buryat. E. R. Moscow, 1894.—
 — Cannibal-spirits among the Buryat. E. R. Moscow, 1896.—
 — The marriage ceremony among the Buryat of Unginsk. E. R. Moscow,
 1898.—
 — Some data concerning the mode of life of the northern Buryat. E. R.
 Moscow.—
 Khangaloff and Satoplačff. Tales and beliefs of the Buryats. E. S. S. I.
 R. G. S. Irkutsk, 1889.—
 Kharuzin, A. N. The Kirgis of the Bukeyeff Orda. Moscow, 1889.—
 Kharuzin, N. The Noyda among the ancient and the modern Lapps. E. R.
 Moscow, 1889.—
 — Russian Lapps. Moscow, 1890.—
 — A sketch of the history of the development of Finnic dwellings. Moscow,
 1895.—
 — History of the development of the dwellings of the Turkic and Mongolic
 nomads of Russia. Moscow, 1896.—
 — Ethnography. Petersburg, 1901—1905.—
 Khudyakoff, I. A. Verkhoyansk anthology. Yakut tales, songs, and pro-
 verbs. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1891.—
 Klementz, D. The Archives of the Yeniseisk Museum. Tomsk, 1886.—
 — Types of drums of the Minusinsk natives. E. S. S. I. R. G. S. 1890.—
 — Archaeological diary of a journey to Middle Mongolia in 1891—1895.—
 — Archaeological collections of the Minusinsk Museum.—
 Kohn, A. Y. Physiological and biological data concerning the Yakut. Minu-
 sink, 1899.—
 Koscharoff, P. Artistic-ethnographic sketches of Siberia. Tomsk, 1890.—
- Kostroff, N. A. Customary law of the Yakut. I. R. G. S. Petersburg,
 1878.—
 — A survey of ethnographic information concerning the Samoyed of
 Siberia. Petersburg, 1879.—
 Kostroff, N. K. Concerning some remains of torture and the Ordal in
 Siberia. Kleff, 1880.—
 Krasheninnikoff, S. P. Description of the country of Kamchatka. Petersburg,
 1st ed. 1755, 2nd ed. 1786. 3rd ed. 1818.—
 Kroll, M. A. Preliminary report on investigations among the Trans-Baikal
 Buryat. E. S. S. I. R. G. S. 1896.—
 Kulakoff. The Buryat of the Irkutsk Government. E. S. S. I. R. G. S.
 1896.—
 Kuznetzoff, W. The Aurora Borealis observed at Pavlovsk in 1897.—
 Kyber, Dr. Extract from a letter of October 1, 1822, from Nishne Kolymsk
 to the 'Siberian Messenger'. 1823.—
 — Extract from the diary. 'Siberian Messenger', 1824.—
 Langans. The Buryat. ... 1824.—
 — The Yakut. 1824.—
 Lepekhin, I. I. Diary of a journey in 1768—72; vols. 1—3. Petersburg,
 1771—1805.—
 — Full collection of scientific travels in Russia; vols. 3—5. I. R. A. S.
 Petersburg, 1818.—
 Lüdtke, T. Journey round the world. Petersburg, 1834—36.—
 Maak, R. A journey to the Amur in 1855. Petersburg, 1859.—
 — A journey in the valley of the Ussuri River. Petersburg, 1861.—
 — The Viluysk district of the Yakutsk territory. Petersburg, 1883—87.—
 Magnicki. Ancient ceremonies of the Yakut.—
 Mainoff, I. I. Some data concerning the Tungus of the Yakut country.
 Irkutsk, 1898.—
 Maksimoff, V. N. Sketch of the customary law of the Mordva. I. R. G. S.
 Petersburg, 1885.—
 — In the East; A journey to the Amur in 1860—1. Petersburg,
 1864.—

- Maksimoff, A. Contribution to the history of the family among the aborigines of Russia. E. R. Moscow, 1902.—
- Gropu-Marriage. Moscow. E. R. 1908.—
- Limitation of relations between husband or wife and the relatives of wife or husband respectively. E. R. Moscow, 1908.—
- A marriage ceremony. Moscow. E. R. vol. 1909.—
- The change of sex. R. A. J. Petersburg, 1912.—
- Malieff, N. Report of the expedition to the Vogul. Kasan, 1873.—
- Manicayeff, S. N. Materials for a Siberian Bibliography. Tobolsk, 1892.—
- Margaritoff, V. Kamchatka and its inhabitants. A. S. I. R. G. S. Kharovsk, 1899.—
- Martos, A. Letters concerning Western Siberia. Krasnoyarsk, 1891.—
- Maydell, G. v. The answers of the Chukchee Expedition to the questions of Mr. Baer of the Russian Academy of Science. E. S. S. I. R. G. S. 1871.—
- Travels in the North-Eastern part of the Yakutsk territory in 1868–70. Petersburg, 1893–96.—
- Within the Arctic Polar Circle. Sketches of the Kolyma country. 'Orthodox Messenger', 1894–95.—
- Mejoff, W. I. A Siberian Bibliography. Petersburg, 1891.—
- Melikoff, D. I. Report of the Senior Counsellor of the Yakutsk Territory Regency, D. I. Melikoff, on his inspection of the Kolyma District in 1893.—
- Mikhailowski, W. M. Shamanism. S. F. S. A. E. Moscow, 1892.—
- Miller, F. A. A description of Siberia with a complete history of events there, especially since the Russian occupation. Petersburg, 1750.—
- Mirolyuboff, I. P. 8 years in Sakhalin. Petersburg, 1901.—
- Mordvinoff, A. The natives of the Turukhansk county. I. R. G. S. 1860.—
- Müller. Sammlung Russischer Geschichte. Petersburg, 1782–64.—
- Neimann, K. K. An historical review of the work of the Chukchee Expedition. E. S. S. I. R. G. S. 1871.—
- A few words on trade and industries in the northern districts of the Yakutsk territory. E. S. S. I. R. G. S. 1872.—

- Nil. Buddhism regarded in relation to the Buddhists living in Siberia. Petersburg, 1858.—
- Nordquist, O. Numbers and present condition of the Chukchee living on the Arctic shore. E. S. S. I. R. G. S. 1880.—
- Novicki, G. A short description of the Ostyak nation.—
- Olsuyeff, A. V. A general sketch of the Anadyr district. A. S. I. R. G. S. Petersburg, 1896.—
- Orloff. The wandering Tungus of Baunovsk and East Angarsk. I. R. G. S. 1857.—
- Osiopoff, N. Ritual of marriage in Siberia. Petersburg, 1893.—
- Ostromnoff, N. A Tartar-Russian Dictionary. Kazan, 1892.—
- Ovchinnikoff, M. Selection from the materials for the ethnography of the Yakut. Moscow, E. R. 1897.—
- Pallas. Travels through various provinces of the Russian empire. Petersburg, 1773–88.—
- Patkanoff, S. Traces of paganism among the aborigines of North-Western Siberia. Moscow, 1888.—
- Materials for the study of the economic position of Russian peasants and the aborigines of Western Siberia. Petersburg, 1888–93.—
- The ancient life of the Ostyak and their heroes, gathered from their poems and tales. L. A. T. Petersburg, 1891.—
- Important data for the statistics of the population of Far-Eastern Siberia. Petersburg, 1903.—
- Essay on the geography and statistics of the Tungusic tribes of Siberia. I. R. G. S. Petersburg, 1906.—
- Short sketch of the colonisation of Siberia. Russian Annual, 1907.—
- Concerning the increase of the aboriginal population of Siberia. I. R. A. S. Petersburg, 1911.—
- Statistical data for the racial composition of the population of Siberia, its language and tribes. Petersburg, 1912.—
- Pavlinoff, D. Marriage law of the Yakut. Note-book on the Yakutsk territory. Yakutsk, 1871.—
- Materials for a Siberian bibliography from 1750 to 1864.—

- Pavlinoff, N. M. Note-book of the Irkutsk Government. Irkutsk, 1895.—
- Pawlowski, B. The Vogul. Kasan, 1906.—
- Perwukhin. Materials for the archaeology of the eastern provinces of Russia. Moscow, 1896.—
- Picturesque Russia. Vol. XI, Western Siberia; Vol. XII, Eastern Siberia.—
- Piekarski, E. K. Yakut Dictionary. E. S. S. I. R. G. S. Yakutsk, 1899.—
- Pilsudski, B. Results of a journey to the Ainu and Oroke of Sakhalin in 1903—5. I. R. A. S. Petersburg, 1906.—
- The Ainu. Brockhaus Encyclopaedia.
- Pipin, A. N. History of Russian ethnography to 1888. Petersburg, 1890.—
- Fodgorbunski, L. A. Ideas of the Buryat Shamans about the Soul... E. S. I. R. G. S. 1892.—
- A Russo-Mongolo-Buryat Dictionary. Irkutsk, 1909.—
- Polonski, A. The Kuril. I. R. G. S.—
- Polyakoff, I. Letters and report on a journey to the Ob Valley. Petersburg, 1877.—
- The Ostyak and the Ob Valley fisheries. Petersburg, 1878.—
- Popoff, V. A Mongol anthology for beginners in the Mongol language. Kazan, 1836.—
- Potanin, G. N. Sketches of North-Western Mongolia. I. R. G. S. Petersburg, 1881—85.—
- Queries concerning the study of the beliefs, proverbs, superstitions, customs and ceremonies of the Siberian aborigines. Petersburg, 1888—1884—86. I. R. G. S. Petersburg, 1893.—
- A sketch of a journey to Szechuan and the Eastern Tibetan frontier in 1892—93. I. R. G. S. Petersburg.—
- Greek Epos and the folk-lore of Ordynsk. S. F. S. A. E. Moscow, 1894.—
- Eastern motives in the Mediaeval European Epos. S. F. S. A. E. Moscow, 1899.—
- Potanina, A. V. Notes on journeys through Eastern Siberia, Mongolia, Tibet and China. Moscow, 1895.—
- Prikłonski, V. L. Three years in the Yakutsk territory. L. A. T. Petersburg, 1892.—
- Przervalski, N. M. The native population of the southern district of the Amur country. Petersburg, 1869.—
- Pripuzoff, N. P. Notes on the folk-medicine of the Yakut. E. R. Moscow, 1898.—
- Resin, A. A. Sketch of the natives of the Russian Pacific coast. I. R. G. S. Petersburg, 1888.—
- Rojdestvenski, A. G. Materials collected by Olsufyeff concerning the physical type of the Chukchee and the Tungus. A. S. I. R. G. S. 1896.—
- Samokvasoff, D. V. A code of customary law among the aborigines of Siberia. Warsaw, 1876.—
- Sarytchew, G. The voyage of Sarytchew's fleet along the North-East coast of Siberia, through the Polar Sea and the Pacific in 1785—93. Petersburg, 1802.—
- Capt. Billings' journey through the Chukchee country, from Bering Strait to Middle Kolymsk. Petersburg, 1811.—
- Schrenck, L. The natives of the Amur country. I. A. S. Petersburg, 1863—1903.—
- Seeland, Dr. The Gilyak. I. S. F. S. A. E. Moscow, 1887.—
- Sigibniief, A. The Tungus of the sea-coast territory, 1859.—
- Shashkoff. Shamanism in Siberia. W. S. S. I. R. G. S. 1864.—
- Folk-tales of the Buryat. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1889.—
- Slavroff, V. Concerning the Ostyak Shamans. 'Moscvitian,' Moscow, 1844.—
- Siechukin, N. S. The Yakut. 1854.—
- Slimkevich, P. P. Materials for the study of Shamanism among the Goldi. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1896.—
- Moments of Goldi life. E. R. Moscow.—
- Skłowski, I. Sketches of the extreme North-East. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1892.—
- burg, 1890—91.—
- A bibliography of the Yakut country.—
- Fripuzoff, N. Materials for the study of Shamanism among the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. 1884.—
- Pripuzoff, N. P. Notes on the folk-medicine of the Yakut. E. R. Moscow, 1898.—
- Mongolia and the Tangut country. Petersburg, 1875.—
- Resin, A. A. Sketch of the natives of the Russian Pacific coast. I. R. G. S. Petersburg, 1888.—
- Amur country. Petersburg, 1869.—
- Mongolia and the Tangut country. Petersburg, 1875.—
- Resin, A. A. Sketch of the natives of the Russian Pacific coast. I. R. G. S. Petersburg, 1888.—
- Rojdestvenski, A. G. Materials collected by Olsufyeff concerning the physical type of the Chukchee and the Tungus. A. S. I. R. G. S. 1896.—
- Samokvasoff, D. V. A code of customary law among the aborigines of Siberia. Warsaw, 1876.—
- Sarytchew, G. The voyage of Sarytchew's fleet along the North-East coast of Siberia, through the Polar Sea and the Pacific in 1785—93. Petersburg, 1802.—
- Capt. Billings' journey through the Chukchee country, from Bering Strait to Middle Kolymsk. Petersburg, 1811.—
- Schrenck, L. The natives of the Amur country. I. A. S. Petersburg, 1863—1903.—
- Seeland, Dr. The Gilyak. I. S. F. S. A. E. Moscow, 1887.—
- Sigibniief, A. The Tungus of the sea-coast territory, 1859.—
- Shashkoff. Shamanism in Siberia. W. S. S. I. R. G. S. 1864.—
- Folk-tales of the Buryat. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1889.—
- Slavroff, V. Concerning the Ostyak Shamans. 'Moscvitian,' Moscow, 1844.—
- Siechukin, N. S. The Yakut. 1854.—
- Slimkevich, P. P. Materials for the study of Shamanism among the Goldi. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1896.—
- Moments of Goldi life. E. R. Moscow.—
- Skłowski, I. Sketches of the extreme North-East. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1892.—

- Shvetzoff, T. The Kelmukis of the Altai. W. S. S. I. R. G. S. XXIII.—
- Ideas of the Altaians and Kirgis on custom and law. W. S. S. I. R. G. S. XXV.—
- Sieroszewski, W. The Yakut. I. R. G. S. Petersburg, 1896.—
- Slovtzoff, P. Historical survey of Siberia. Petersburg, 1886.—
- Slanin, N. V. The country of Okhotsk and Kamchatka. Petersburg, 1900.—
- Smirnoff, I. N. The Chereniss. Kazan. 1889.—
- The Votyak. Kazan, 1890.—
- Solovieff. Remains of Paganism among the Yakut. 'Siberia' (Annual).—
- Sternberg, I. The Gilyak. E. F. Moscow, 1893.—
- Specimens of the material for the study of the language and folklore of the Gilyak. I. R. A. S. Petersburg, 1900.—
- Unterberger, P. T. The Amur country. I. R. G. S. Petersburg, 1912.—
- Usoltseff, Report of the work of the Siberian section of the Imperial Russian Geographical Society for the year 1869. Petersburg, 1870.—
- Talko-Hyncewicz, I. D. Contributions to the Anthropology of the Trans-Baikal country and Mongolia. Russ. Anthr. Journ., 1902.—
- Tereschenko, A. The Ulus of Khoshotsk. ... 1854.—
- Ternovskij, A. A. Materials for a bibliography of Siberia. Tobolsk, 1893.—
- Tretyakov, P. I. The country of Turukhansk; its nature and inhabitants. Petersburg, 1871.—
- Proshchanski, V. F. The evolution of the 'Black Faith' (Shamanism) of the Yakut. Kazan, 1902.—
- Uvaroff, A., Count. Archaeology of Russia. Moscow, 1881.—
- Venjamin. The Samoyed of Mesen. I. R. G. S. Petersburg, 1855.—
- Voyeikoff. Climates of the earth; especially of Russia. 1884.—
- Vritzevich, M. S. Culture and life of the people of the Yakutsk territory. I. R. G. S. Petersburg, 1891.—
- V. S. E. The clan among the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. 1898.—
- Wereschagin, G. The Votyak of the Sarapul district of the Viatka Government. Petersburg, 1889.—
- Wierbicki. The Natives of the Altai, 1893.—
- Wierbicki, V. L. A dictionary of the Altaian and Aladansk dialects of the Turkic language.—

2. 語文著述

- Adler, Bruno. Die Bogen Nord-Asiens. Int. Archiv für Ethnogr., Band XV., H. 2, 1902.
- Der nordasiatische Pfeil. Int. Archiv für Ethnogr., Band XV., H. 1, 1901.
- Ahlqvist, A. Unter Wogulen und Ostjaken. Acta Societatis Scientiarum Fennicae, XIV. Helsingfors.
- Allen, J. A. Report on the Mammals collected in north-eastern Siberia by the Yesup N. P. Ex. Bull. of Amer. Mus. Nat. Hist., Vol. XIX. New York, 1903.
- Almqvist, E. Studier öfver Tschuktschernas färgsinne, Vol. I. de Armand, C. A. The New Era in Russia. London, 1890.
- Atkinson, T. W. Oriental and Western Siberia. London, 1858.
- Baelz, E. Zur Vor-und Urgeschichte Japans. Zeitschr. für Ethnologie, S. 281-310. Berlin, 1907.
- A grammar of the Altaian language.—
- Wrangell, F. P. Journey to the north coast of Siberia and to the Polar Sea. Petersburg, 1841.—
- Kadrinzeff, N. M. The Tartars and Altaians of Chern. I. R. G. S. Petersburg, 1881.—
- The cult of the bear among the northern aborigines. E. R. Moscow, 1890.—
- The Siberian aborigines; their mode of life and present condition. Petersburg, 1891.—
- Yakobü, A. I. Extinction of the native tribes of the East. Petersburg, 1898.—
- Yakushkin, E. I. Customary law among the aborigines of Russia. Moscow, 1899.—
- Yakutsk. Note-book on the Yakutsk territory. Yakutsk, 1896.—
- Velistratoff and Ushakoff. West coast of Kamchatka, 1742-87.—
- Zakharoff, I. I. Complete Manchu-Russian Dictionary. Petersburg, 1875.—

- Bancroft, H. H. Native races of the Pacific States of North America. New York, 1883.
- Barnum, F. Grammatical Fundamentals of the Inuit language as spoken by the Eskimo of the western coast of Alaska. Washington, 1906.
- Bachelor, J. The Ainu of Japan. London, 1892.
- Afnu-Eng-Jap. Dictionary. Tokio, 1905.
- Ainu. Enc. of Rel. and Eth., J. Hastings, Vol. I. London, 1908.
- Berg. Ueber den Jassak, oder den Fell-Tribut der nomadisirenden Volksstämmen Siberiens. Lodz, 1868.
- Bird, Isabella. I. Unbeaten Tracks in Japan. 2. Korea and her Neighbours. London and Edinburgh, 1885.
- Boas, F. The Central Eskimo. 6th Annual Report of the Bureau of Ethnology (1884-5). Washington, 1888.
- Zur Anthropologie der nordamerikanischen Indianer. Verhandlungen der Berliner anthrop. Gesellschaft, 1895.
- Physical Types of the Indians of Canada. Toronto, 1905.
- Report on the North-western Tribes of Canada. British Association for the Advancement of Science. London, 1891.
- The Eskimo of Baffin Land and Hudson Bay. Bulletin Amer. Mus. Nat. History, Vol. V, p. 369. Washington, 1901.
- A. J. Stone's measurements of Natives of the North-west Territories, 1901. Bulletin of the Amer. Mus. of Nat. Hist., Vol. XXI. New York.
- Tribes of N. Pacific Coast. Ann. Arch. Rep. Toronto, 1905.
- Facial Paintings of the Indians of Northern British Columbia. J. N. P. E.
- The Mythology of the Bella Coola Indians. J. N. P. E., Vol. II.
- Kwakiutl Texts. J. N. P. E., Vol. III.
- The Kwakiutl of Vancouver Island. J. N. P. E., Vol. V.
- Ueber die ehemalige Verbreitung der Eskimos im Arktisch-Amerikanischen Archipel. Berlin, 1883.
- The Decorative Art of the Indians of the North Pacific Coast. Washington, 1897.
- Bogoras, W. The Folk-lore of north-eastern Asia as compared with that of north-western America. Amer. Anthropol., Vol. IV. New York,
- October-December. 1902.
- The Chukchee. Publications of J. N. P. E., Vol. VII (Memoirs of the American Museum of Natural History). New York, 1904-10.
- The Eskimo of Siberia. Yesup North Pac. Exp., Vol. VIII. New York, 1910.
- Boulingier, E. Notes d'un Voyage en Sibérie. Paris, 1891.
- Brown, R. Countries of the World. London, 1875.
- Buck, Max. Die Wotjäken. Acta Societatis Scientiarum Fennicac. Helsingfors, 1883.
- Buckle, H. T. History of Civilization. London, 1857-61.
- Buryat. traditions of the recorded by different collectors. East. Sib. Sec. of the I. Russian Geogr. Soc. Irkutsk, 1890.
- Buschau, G. Studien und Forschungen zur Menschen- und Völkerkunde unter G. Buschau. Stuttgart, 1907, &c.
- von Buschen, M. Bevölkerung des Russischen Kaiserreichs. Gotba, 1862.
- Byhan, A. Die Polarvölker. Wissenschaft und Bildung, Bd. LXVIII. Leipzig, 1909.
- Nord-Asien.
- Castrén, M. Alexander. Reiseerinnerungen aus den Jahren 1838-44. Vol. I of Nordische Reisen und Forschungen. Petersburg, 1853.
- Versuch einer burjäischen Sprachlehre. Nordische Reisen und Forschungen, Vol. X. Petersburg, 1857.
- Chamberlain, Alex. F. Aleuts. Enc. of Rel. and Eth., J. Hastings. Vol. I. London, 1908.
- Chamberlain, B. H. The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan viewed in the light of Aino Studies... London, 1895.
- Chappe d'Auteroche, J. Voyage en Sibérie fait en 1761, contenant les mœurs, usages, etc. Paris, 1768.
- Chyliński. Syberia pod względem etnograficznym, administracyjnym i politycznym i gospodarczym. Włocławek, 1898.
- Collins, P. McD. A Land Journey through Siberia. London, 1860.
- Cook, James. Voyage to the Pacific O. undertaken... for making discoveries in the N. Hemisphere. London, 1784.
- Cotteau, E. A travers la Sibérie. Paris, 1888.

- Cottrell, C. H. Recollections of Siberia in 1840-41. London, 1852.
- Dall, W. H. Alaska and its Resources. Boston, 1870.
- Tribes of the extreme North-west. Contributions to N. Amer. Ethnology, Vol. I. Geographical and Geological Survey of the Rocky Mountain Region. Washington, 1877.
- Remains of later prehistoric man ... of the Aleutian Islands. Smithsonian Contributions to Knowledge, Vol. XXII. Washington, 1878.
- On masks, tabrets, &c. Third Annual Report B. E. 1881-2.
- Deniker. Les Géographes (extr. from Rev. d'Ethnogr.). Paris, 1884.
- 'Turks' and 'Tatars' (Dict. Univ. de Géogr. of Vivien de St. Martin and Rousselet). Paris, 1894.
- Ditmars, C. von. Ueber die Koriaken und die ihnen sehr nahe verwandten Ischuktischen. Acad. Scient. Imp. Sain-Pétersburg, Beiträge zur Kenntnis des Russischen Reiches (1839-1900) 1856.
- Dundas, L. J. L. (Earl of Ronaldsay). On the outskirts of Empire in Asia. Edinburgh and London, 1904.
- Ehrenberg, C. G. Reise nach dem Ural ... ausgeführt von A. von Humboldt, G. Ehrenberg und G. Rose. Berlin, 1837-42.
- Elliott, H. W. An Arctic Province. London, 1886.
- Erman, Adolph. Travels in Siberia. London, 1848.
- Erman, G. A. Positions géographiques de l'Oby depuis Tobolsk jusqu'à la mer glaciale. Berlin, 1831.
- Reise um die Erde durch Nord-Asien und die beiden Oceane in den Jahren 1828-30. Berlin, 1838.
- Farrand, L. Basketry designs of the Salish Indians. J. N. P. E., Vol. V.
- Traditions of the Chilcotin Indians. J. N. P. E., Vol. II.
- Traditions of the Quinault Indians. J. N. P. E., Vol. II.
- Finsch, O. Reise nach West-Sibirien im Jahre 1876. Berlin, 1879.
- Fischer, J. E. Sibirische Geschichte von der Entdeckung Sibiriens bis auf die Eroberung dieses Landes durch die russischen Waffen. Petersburg, 1768.
- Fraser, J. F. The Real Siberia. London, 1902.
- Gatschet. Klamath Indians of South-western Oregon. Washington, 1890.
- Gennep, A. v. De l'emploi du mot 'chauuanisme.' Rev. de l'Histoire des Religions, 1903.
- Georgi, J. G. Beuerkungen einer Reise im Russischen Reich in den Jahren 1773 und 1774. Petersburg, 1775.
- Gerrare, W. Greater Russia. London, 1903.
- Gilder, W. H. Ice-Pack and Tundra. New York, 1883.
- Gmelin, J. G. Reise durch Sibirien, von dem Jahr 1733 bis 1743. Göttingen, 1751-2.
- Golder, F. A. Aleutian Tales. J. A. F. L. 1905.
- Gowing, L. F. Five thousand miles in a Sledge. London, 1889.
- de Guignes. Recherches sur la navigation des Chinois du eôte de l'Amérique et sur quelques peuples situés à l'extrême orientale de l'Asie. Paris, 1761.
- Hartez, Ch. de. La religion nationale des Tartares orientaux: mandchous et mongols, comparée à la religion des anciens Chinois. Bruxelles, 1887.
- Henry, V. Esquisse d'une grammaire raisonnée de la langue Aléoute (translated from Veniaminoff's work). Paris, 1879.
- Hiekkisch, C. Die Tungusen. Petersburg, 1879.
- Hill, S. S. Travels in Siberia. London, 1854.
- Hitchcock, Rony. The Ainos of Yezo. Report of the U. S. National Museum for 1890. Washington, 1892.
- The ancient pit-dwellers of Yezo. Report of the U. S. National Museum for 1890. Washington, 1892.
- Hoffmann, W. Shamanistic Practices. Univers. Med. Mag. 1890.
- Hoffmann, W. J. The Graphic Art of the Eskimo. Report of the U. S. National Museum, p. 764. Washington, 1897.
- Howard, B. Douglas. Life with Trans-Siberian Savages. London, 1893.
- Humboldt, A. Im Ural und Altai. Briefwechsel zwischen A. von Humboldt und Graf S. von Canerin aus den Jahren 1827-32. Leipzig, 1869. (Eng. trans. by Macgillivray.)
- Fragmente einer Geologie und Klimatologie Asiens. Berlin, 1832.
- Reise nach dem Ural, dem Altai, und dem Kaspiischen Meere. ... im Jahre 1829 ausgeführt von A. von Humboldt. G. Ehrenberg und G.

- Rose. Berlin, 1837-92.
- Jackson, F. G. Notes on the Samoyads of the Great Tundra, collected from the journals of F. G. Jackson, F. R. G. S. ... by A. Montefiore. Journal of the Anthrop. Inst., Vol. XXIV, Aug. 1894-May, 1895.
- Jochelson, W. The Mythology of the Koryak. American Anthropologist, July-September, 1904.
- Essay on the Grammar of the Yukaghirs Language. Annals N. Y. Ac. Sc. New York, 1905.
- The Koryak, J. N. P. E., Vol. VI. New York, 1905-8.
- Kuniss Festivals of the Yakut. Boas Anniversary Volume. New York, 1906.
- Past and present Subterranean Dwellings of the tribes of North-Eastern Asia and North-western America. Int. Congr. Amer. Quebec, 1906.
- The Yukaghirs and the Yukaghirized Tungus. J. N. P. E., Vol. IX. New York, 1910.
- Johnson, R. 'Certaine Notes unperfectly written by Richard Johnson' in 1556. Hakluyt's Collection (a new ed). London, 1599.
- Kaarle, Krohn: Birth : Finns and Lapps. Enc. Rel. and Eth., Vol. II. London, 1910.
- Karjalainen, K. F. Zur ostjakischen Lautgeschichte. Mémoires de la Société Finno-ougrienne, XXIII. Helsingfors, 1905.
- Kennan, G. Tent-life in Siberia and adventures among the Koriak and other tribes in Kamtschatka and Northern Asia. London, 1870.
- Siberia. London and New York, 1891.
- Kjellman, F. R. Om Tschuktschernas hushållväxter. Vega-expeditionens veteenskapliga iakttagelser, &c. Vol. I. 1882, &c.
- Bidrag till kännedomen om Tschuktscherna. Vega-expeditionens veteenskapliga iakttagelser, &c. Vol. II. 1882, &c.
- Klaproth. Recherches sur le pays de Fousang, mentionné dans les livres chinois et pris mal à propos pour une partie de l'Amérique. 1831.
- Kleinschmidt, S. Grammatik der grönlandischen Sprache mit thilweisem Einschluss der Labrador sprache. Berlin, 1851.
- Klementz, D. Burials. Enc. Rel. and Eth., Vol. III, J. Hastings. London, 1910.
- Koganei. Die Urbewohner Japans. Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens in Tokio. Band IX, Teil 3. 1903.
- Kohn, A. und Andreæ, R. Sibirien und das Amurgebiet, Bd. I u. II. Leipzig, 1876.
- Kotzebue, Otto. Entdeckungsreise in die Südsee und nach der Beringstrasse. Weimar, 1821.
- Krause, A. Die Bevölkerungsverhältnisse der Tschuktschen Halbinsel. Deut. geogr. Blätter, Vol. VI. Bremen, 1883.
- und Aurel. Die wissenschaftliche Expedition der Bremer geographischen Gesellschaft nach den Küstengebieten an der Beringstrasse. Deutsche geographische Blätter, Vol. IV, V. Bremen, 1881.
- — Die Expedition der Bremer geographischen Gesellschaft nach der Tschuktschen Halbinsel. Deutsche geogr. Blätter, Vol. V. Bremen, 1882.
- Kuznetzoff. Age de la pierre au Japon. Matér. hist. homme, p. 31. Toulouse-Paris, 1879.
- Landor, A. H. Savage. Alone with the Hairy Ainus. London, 1893.
- Langsdorf. Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803-7. Frankfurt.
- Lansdell, Dr. H. Through Central Asia. London, 1887.
- Through Siberia. London, 1882.
- Iatham, R. G. Native Races of the Russian Empire. 1853, 1854.
- Lauffer, Berthold. The Decorative Art of the Amur Tribes. Yesup U. P. Ex., Vol. IV, part I. New York, 1902.
- Legras, Jules. En Sibérie. Paris, 1889.
- Leroy-Beaulier. L'Empire des Tsars. 1898.
- Lesseps. Reise durch Kamtschatka und Sibirien. Berlin, 1791.
- Mainoff, V. N. Les Restes de la mythologie nordvine, 1869. Academy, Helsingfors.
- Marfin, G. R. Sibirica. Stockholm (Gustav Ehelius), 1897.
- Markham, R. On the Origin and Migrations of the Greenland Esquimaux.

- Journ. of the Royal Geographical Society, Vol. XXXV, p. 87. London, 1865.
- Matthews, W. Navaho Myths, Prayers, and Songs. Univ. of California, 1907.
- Maydell, G. V. Reisen und Forschungen im jakutskischen Gebiete Ost-sibiriens in den Jahren 1861-71. Petersburg, 1893, 1896.
- Michie, H. The Siberian Overland Route. London, 1861.
- Middendorff, A. Th. Sibirische Reise. Petersburg, 1848-75.
- Müller, Friedrich. Allgemeine Ethnographie. Vienna, 1873.
- Grundriss der Sprachwissenschaft. Vienna, 1876-88.
- Müller, R. Hon. Friedrich Max. The Science of Language. London, 1891.
- Müller, J. B. Leben und Gewohnheiten der ostjaken. Berlin, 1720.
- Müller, T. Unter Tungusen und Jakuten. Leipzig, 1882 (F. A. Brockhaus).
- Munkacsy, B. Ältere Berichte über das Heidentum der Wogulen und Ostjakken. Kelti Szemle, III. Budapest, 1902.
- Die Weltgotttheiten der wogulischen Mythologie. Kelti Szemle, VII-X. Budapest, 1906-9.
- Götzonbider und Götzengeister im Volksgläuben der Wogulen. Ibid. VI. Budapest, 1906.
- Seelenglaub- und Totenkult der Wogulen. Ibid. VI. Budapest, 1905.
- Murdoch, John. On the Siberian Origin of some customs of the Western Eskimo. Amer. Anthropologist. Washington, 1888.
- Ethnological Results of the Point Barrow Expedition. General Report of the Bureau of Ethnology. Washington, 1892.
- Nelson, E. W. The Eskimos about Bering Strait. Eighteenth Annual Report of the Bureau of Ethnology. Washington, 1889.
- Nordenskiöld, Freiherr A. E. von. Die Unsegelung Asiens und Europas auf der Vega. Leipzig, 1882.
- The Voyage of the Vega round Asia and Europe (trans. A. Leslie). London, 1886.
- Nordquist, O. Tschuktschisk ordlista. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c., Vol. I. Stockholm, 1882, &c.
- Anteckningar och studier till Sibiriska Ishafskustens däggdjursfauna. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c. Vol. II. Stockholm 1882, &c.
- Personen, H. Über die türkischen Lehnwörter im Ostjakischen. Finno-ugrische Forschungen, II. Helsingfors, 1902.
- Über die ursprünglichen Seelevorstellungen bei den finnisch-ugrischen Völkern. ... Journal de la Société Finno-Ougrienne, XXVI. Helsingfors, 1909.
- Pallas, P. S. Reise durch verschiedene Provinzen des Russischen Reichs, I-III. Petersburg, 1771-6.
- Travels through Siberia and Tartary. London, 1788.
- Patakanoff, S. Die Irtysch-Ostjaken und ihre Volkspoesie. I. R. A. S. Petersburg, 1897, 1900.
- Dépouillement des données sur la nationalité et classification des peuples de l'Empire russe d'après leur langue. Petersburg (Cent. Stat. Com.), 1899.
- Aperçu statistique et ethnographique de la province de l'Amour. Petersburg, 1901.
- Essai d'une statistique et d'une géographie des peuples paleoasiatiques de la sibérie. Petersburg (Gen. Staat. Con.), 1903.
- Pauw, Th. de. Description ethnographique des peuples de la Russie. Petersburg, 1862.
- Perouse, J. F. Galant de la (Count). A Voyage round the World in 1785-8, edited by M. C. A. Milet-Mureau. Translated from the French. London, 1798.
- Petroff, J. Report on the Population, Industries, and Resources of Alaska. Report U. S. Census, 1880.
- Phizmaier, A. Die Sprache der Aleuten und Fuchsinseln (translated from Veniaminoff's work). Reprinted from the 'Sitzungsberichte der phil.-hist. Klasse der Kais. Akademie der Wissenschaften. Vienna, 1884.
- Pietrowski, R. My Escape from Siberia. London, 1863.

- Pilling, J. C. Bibliography of the Eskimo Language. Bureau of Ethnology. Washington, 1887.
- Pilaudzki, B. L'accouchement, la grossesse et l'avortement chez les indigènes de l'île Sakhaline. Bull. et Mém. de la Soc. d'Anthrop. de Paris, 1909.
- Pilsudzki, B. Schwangerschaft, Entbindung und Fehlgeburt bei den Bewohnern der Insel Sachalin-Giljaken und Aino. Anthropos, Bd. V. Heft 4. Vienna, 1910.
- Trad. wśród Gilaków i Ainow. Lud. Lemberg, 1913.
- Niedzwiedzie swięto u Aino. Sphinx. Warsaw.
- Pinart, A. L. Les Aléoutis, leurs origines et leurs légendes. Actes de la Soc. d'Ethnog. Paris, 1872-3.
- La Gaverne d'Aknaut, île d'Ounga. Paris, 1875.
- Preuss, T. Die Begräbniskarten der Amerikaner und Nordostasiaten. Königsberg, 1894 (Hartungsche Buchdruckerei).
- Price, M. P. Siberia. London, 1912.
- Radloff, Vasilij Vasiljevich. Das Schamanenthum und sein Kultus. Leipzig, 1885.
- Radloff, W. Aus Sibirien (Leipzig, 1884; 1. Ausg.). Bd. I u. II. 2. Ausg. Leipzig, 1884 (T. D. Weigel).
- Reclus, E. Primitive Folk; ou 'The Western Indoits, especially the Aleutians.' London, 1890.
- Rink, H. The Eskimo Tribes, their distribution and character, specially in regard to language. London, 1887.
- The Eskimo Tribes. Meddelser om Grönland, Vol. XI, 1887. pp. 4 ff. Supplement Medd. om Grönl., pp. 19 ff.
- Rose, G. Reise nach dem Ural ... (ausgeführt von A. von Humboldt, G. Ehrenberg und G. Rose). Berlin, 1837-42.
- Rose, Hermann. Meine Erlebnisse auf der preussischen Expedition nach Ostasien in 1860-2. Kiel, 1895.
- Sauer, Martin. An Account of a Geogr. Expedition to the Northern part of Russia in 1785-94. London, 1802.
- Scheube, B. Die Ainos. Yokohama, 1882.
- Schietner, A. Das dreizehnmonatliche Jahr und die Monatsnamen der sibirischen Völker. Petersburg, 1857.
- Schott, W. Wohin gehört das Wort Schamane? 2nd book of Altaijsche Studien, p. 138. Berlin, 1881.
- Altaïsche Studien. Berlin, 1860.
- Schrenck, A. G. Reis nach dem Nordosten des europäischen Russlands, durch die Tundren der Samojeden zum arktischen Uralgebirge, etc. Dorpat, 1848-54.
- Schrenck, Leopold von. Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-6. 4 Bde. Petersburg, 1858-1900.
- Die Völker des Amurlandes. Petersburg, 1891.
- Schwarz, Bernhard. Quer durch Sibirien. Bamberg, 1893.
- Seeböhm, H. The Birds of Siberia. London, 1901.
- Shimkevitch, N. M. Zur Pantopoden-Fauna des sibirischen Eismeeres. Mem. Imp. Acad. Sci. Saint Petersburg, 8th series, 1895. &c. Petersburg, 1907.
- Siebold, H. von. Ueber die Aino. Sieroszewski, W. L. 12 lat w kraju Jakutów (12 years in the land of the Yakut). Warsaw, 1900.
- Du chamanisme. Rev. de l'Hist. des Rel. Paris, 1902.
- Smith, H. I. The Archaeology of Lytton, B. C. J. N. P. E. Vol. III. — Archaeology of the Thompson River Region. J. N. P. E. Vol. VI.
- Cairns of British Columbia and Washington. J. N. P. E. Vol. II. — Archaeology of the Gulf of Georgia and Puget Sound. J. N. P. E. Vol. VI.
- Sommer, St. An Estate in Siberia. Florence, 1885.
- Staat. Das Allermeiste von Sibirien. Nürnberg, 1720.
- Stadling, J. Shamanismen i Norra Asien. Stockholm, 1912.
- Shamanism. Contemp. Rev., 1901.
- Stem v. J. Die Tschuktschen am Ufer des Eismeeres St. Petersburg 1774. — Reise von Kamtschatka nach Amerika mit dem Kom. Bering. Petersburg, 1793.
- Sternberg, L. The Orochi. Vladivostok, 1896.
- The Tribes of the Amur River. Yensu North Pacific Expedition, 1900,

- sc. Vol. IV. New York.
- The Cult of Inau. Boas anniversary volume.
- The Turano-Ganowanian System and the Nations of N. E. Asia. Memoirs of the Congress of Americanists, 1912.
- Stoddard, C. A. Across Russia. London, 1891.
- Stoll, Otto. Suggestion und Hypnotismus in der Völkerpsychologie. Leipzig, 1906.
- Swanton, J. R. Haida Texts. J. N. P. E. Vol. X.
- The Haida of Q. Charlotte Is. J. N. P. E. Vol. V.
- Szinyei, J. Finnisch-ugrische Sprachwissenschaft, 1910.
- Talko-Hynneewicz. Memoirs of the Congress of Scientists and Physicians. Cracow, 1911.
- Teit, J. The Thompson Indians of British Columbia. J. N. P. E. Vol. IV.
- The Lillooet Indians. J. N. P. E. Vol. V.
- The Shuswap. J. N. P. E. Vol. VII.
- Teumin, S. Topographisch-anthropometrische Untersuchungen über die Proportionsverhältnisse des weiblichen Körpers. Zürich, 1901.
- Thalbitzer, W. A Phonetical Study of the Eskimo Language based on Observations made on a Journey in North Greenland, 1900-1. Copenhagen, 1904.
- Trevor-Battye, A. Icebound on Kolguev.
- A Northern Highway of the Czar.
- Wallace, Sir. D. Mackenzie. Russia. London, 1905.
- Wasiljev, J. Übersicht über die heidnischen Gebräuche, Aberglauben, und Religion der Wotjaken. Mémoires de la société Finno-Ougrienne, XVIII. Helsingfors, 1902.
- Whitney, W. D. Max Müller and the Science of Language. New York. 1892.
- Wichmann, Yrjö. Die tschuwassischen Lehnwörter in den permischen Sprachen. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, XXI. Helsingfors. 1903.

第1章 北方圏の諸民族

第1節 ルーマニアの種族

北方圏に属する北部アジアの廣大な地域は全く異った四つの地勢を持つ。ルーマニアは南境に山脈がある北行するに従つて山嶺帶、曠原帶、森林帶、凍土帶に變化してゐる。山嶺帶はウラル、アルタイ、サハル、ヤドロヘイ、スター、モヘ、アーヴール、カムチャツカの諸山脈で曠野帶は北緯五十五度以南のベラル、ウラル、アラト平野を總括し北緯六十五度以北のベラル、ウラル山に伸びた地域及び北緯五十五度の北方北極洋岸に及ぶ地域は廣大な單調な沼澤平原である。森林は北方に行くに従ひ減じ北緯六十五度以北は地下數百尺まで凍り夏科リュウゲン(表面)を融解して沃地へ化する北極凍土帶(Fundra)となつてゐる。然しハヤイ河の東部は低く斷續せる高原地やおり東行すれば從ひ高度を増し遂に大高原帶北東端に合してゐる。又北米の北極地方は大平原で海岸鋸齒狀をなし北シベリヤの西側の平原凍土帶であ

— Tietoja votjaakien mytologiasta, Suomi, III. Helsinki, 1893.
 — Wotjakische Sprachproben, I-II. Journal de la Société Finno-Ougrienne, XI, XIX. Helsingfors, 1901.
 Wiedemann, F. Classifik. der Bevölkerung des Russ. Reiches nach den Sprachen. St. Petersburger Kalender für das Jahr 1860 (pp. 62-336).
 Windt, H. de. Siberia as it is. London, 1892.
 Wrangell, F. v. Von dem Verkehr der Völker der Nord-West-Küste von Amerika untereinander und mit Tschuktschen. Beiträge zur Kenntnis des Russischen Reiches und der angrenzenden Länder Asiens, Vols. LVII-LXV. Petersburg, 1839.

つて、ラブダル、メルヴィル半島、ブーシヤ半島、バッファインランド、
グリーンランド、アラスカのユーロン河以北の北極洋岸及びアリューシャン(アレウト)列島等のエスキモ居住地が此に屬してゐる。

氣候は共に厳しく北部は全く典型的な北極氣候を持つてゐる。此の全地域は農業、牧畜には適しないので住民の多くは狩獵、漁獲を營んでゐる。ロシア法ではシベリア土民を遊牧 *Bridyachi*、半遊牧 *Kochevor*、定住 *Osyedly* の三種に分つた。一は主に馴鹿を伴つて漂泊し、二は家畜、漁獲をなし季節的居住を行ひ、三は主に農耕を營むものである。此の全地域の古代住民に關しては何ら知るを得ないのであるが、輓近に於けるシベリア考古學、古人類學の發達は此の解決に對して新しい方向と曙光を與へつゝある。

シベリアの舊古石器時代に關してはカスチョーノ *Kastchenko* 教授が一八九六年にトムスク附近を發掘して舊石器時代の狩獵民が殺戮し食用とした若きマンモスの骨を發見した。其處には灰、木炭、石刀の破片、マンモスの焼かれた定骨片があつた。

一八八四年に發見されたもの一つの舊石器遺跡はクラスノヤルスク附近のアフォントヴァ *Afontova* 山麓にサヴェンコフ *Savenkov* 教授が發見したものである。此處で發見された遺物は現今ソーリングラードの學士院人體學土俗學博物館 *Muzeia Antropolgi i Etnografii Akademii Nauk* に陳列されてゐる。ロシア學士院は更に一九一四年此の發掘の續行を彼に依嘱したが中途にして彼は死亡してしまつたのである。ペトリ *Petri* 教授の鑒定によればサヴェンコフの蒐集品は舊石器と新石器との二文化を示してゐるのである。一九一九年からサヴェンコフの事業をソスノフスキ *Sosnovsky* とファン・メルハルト *Von Merhart* 等が繼承した。彼等はクラスノヤルス

クの南方ニセイ渓谷を發掘して舊石器時代末期の特徴を示してゐる小石器加工品を發見した。然し此の同じ水準に前期舊石器時代のものと後期舊石器時代のものが發見されてゐるのでメルハルトは現在のところニセイの舊石器文化はシベリアのものと同じく後期舊石器時代に屬してゐると結論してゐるのである。更にクラスノヤルスクからミヌシンスクに及ぶ三三〇哩のニセイ渓谷に於ては一〇個所の舊石器時代遺跡が報告されてゐる。

又オブ地方からも舊石器時代遺跡が發見されてゐるのでアドコピトフ *Kopytoff* は一九一一年に舊河床のフォミニンスコフ *Fomin'skoye* 村に於て舊石器代層位を發見してゐる。此の遺物は現今ニューヨークの自然史米國博物館 *American Museum of Natural History* に保存されてゐる。更にチエルスキ *Chersky* とチヨカノフスキ *Chekanovsky* は一八七一年にアンガラ Angara 溪谷にオヴチニコフ *Ovchinnikov* はイルクツク Irkutsk 附近に於て舊石器時代の遺物を發見してゐる。最近ペトリ *Petri* 教授はヴェルコーレンスク Verkholensk 山(イルクツク附近)を發掘し後期舊石器時代に屬する黃土帶に典型的遺跡を發見した。彼は之を多くの特異性を示してゐるがダレンニアンに類縁のものとしてゐるのである。

シベリアの舊石器人は發火法、石器、骨器の製作を知つてゐたことは其の遺物が示してゐるのであるが然し舊石器時代の人骨は未だ全然發見されてゐないのである。

一般にシベリアに於ける石器時代遺跡の一重性は舊石器時代から新石器時代に移行する或る繼續を示すもののやうである。

新石器時代の遺跡はウラル山から太平洋岸に及ぶ全シベリアの各地に散在してゐるので次の如き個所が報告されてゐる。

トボルスク Tobolsk 州 の カマロフカ村 Samarovskoye 村 (ヤヴァアロフ Uvaroff) 南緯六度のカマ支流ソスヴァ Sosva 河畔 (ルドン Rudenko) や
ブニン (ポリアコフ Poliakoff) 北緯約六五度のベチャチヤ Stchutchiya 河、カ
ブ河川角洲 (ハヴィミヤ Novitzky) カマアルスク Obdorsk 村 (北緯六七度)
(ヤヴァアロフ Uvaroff) ハリヤ河口のユウティンバコ Dudinskoye 村 (北
緯六九度)、カマスウタル Transurabau 湖岸、ウラル山脈東側、オブ中
流、トボルスク南部アンダム河 Andreyevsky 河畔 (ベロウツオフ
Slovtoff) カマ支流のトボル Tobol 河、イシム Ishim 河堤、オブ河の上
流 (カマム Kopytoff) ハリヤ河の上流ミヌスク Minusinsk (サヴァ
ンロド Savenkoff ケルニク Peredolsky ベルノーテ Teplovkhov) カム
チヤツカ (マカルノ Jochelson) ハリヤト列島 (マカルソフ Teplovkhov) カム
(ヘルソフ Yermoleyeff) ハンガラ河 (オウチヒ Ovchinnikoff ソブノ
ウツキ Sosnovsky) ベルクツク附近 (オウチヒ) ハルソフ Vitekovsky
キ Vitekovsky, ベルソフ Yeleneff 郡) ハル Lena 支流のキレンスク Kirensk
地方 (ロシヤ Kozmin) ハルタマ Olekma 河堤 (オウチヒ) バイカル
Baikal 湖のペスチヤカ Pestchana 灰 (ペストカ)、バイカル湖のオルコーン
Olkhon 島 (ハーロシカ Khoroshikh) 西端トランスバイカリヤ Transbaikalia
(タルヒ・ムラカシ ハウヤシ Talko-Huysewitz) ハル下流 (ハロヒリロ) H
Shirokogoreff) ハール窓 (マガリト Magaritoff カマウスキ Yankovsky)
等がある。

舊石器時代の人骨は上述した如く未だ全然發見されてゐないが新石器時
代の人骨は多少發見を記する。

ヴィトロウスキ Vitkovsky はアンガラ支流のキトイ Kitoi 河口に於て、
オヴチーロフはイルクツク附近のグラスコフ Glaskovo 村に於て新石器

時代墓地を發見した。又ソスノフスキ Sosnovsky はアンガラ河畔のラスピ
ティエ Rasputino 村にサヴァンコフ ペレドロフ Perekolsky セクラス
ノヤルスク Krasnoyarsk 附近に埋葬地を見出した。此等の人骨測定に依れば新石器時代の北部シベリアには數種の長頭型變種が存在してゐたことを示してゐるであつて、彼等は更に金屬時代に分化したものである。

南部トランスバイカリヤの先史長頭型のチュズ Chuds、南部シベリアの長頭のトウムリ (クルガン) 建設者、南ロシアの長頭型のクルガン建築者は南の系統に屬してゐるものらしい。ハロスチエ Gorostchenko の計測に依れば現住民のトルコ族、蒙古族體型に適應しならうと彼らの特殊な長頭型的體型の存在を確證してゐる。ヨルソフ Jochelson に依れば現今アイヌ、ハリヤセイアン族はアジアに於ける此の長頭型系統の殘存者と見做されなければならぬものである。而して後來のトルコ、蒙古種の侵入者が此の長頭型シベリア原住民に絶滅させて了ましたのである。尙、南部境地——ハシンスク附近のハリヤ河上流——から出た青銅時代の頭蓋は長頭型を示してゐるのである。

實際ウラルから太平洋岸までの北方アジアは十六世紀まで [不明の世界] であり其の學術探險は十八世紀以後に懸る最初に此地域の狀況を報告したものはコザツク、プロミシノリキ (毛皮商人) の人々であつた。

北極洋地方が人種學的に調査されたのはベーリング Bering のカムチャツカ遠征 (一七三三) ——一七四三) に初まるのであつて其の學術的研究は主に同行した歴史地理教授ミュラー G. Müller に負つてゐる。後ヴォツネンスキ Voznesenski は更に學士院の命に依つてチュクチ、コリヤーク、ア

ジア、アメリカ・ハスキモ、アレウト、アサパスカン、トリニギット、更にカナダ、カリフォルニア、インディアンの部族から土俗學的資料を蒐集しそ

れを學士院の人類學土俗學博物館に陳列した。又ジエヅップ北太平洋探險隊 Sesup North Pacific Expedition の權威ある調査報告が發表されてゐる。——これらの現存民族は文化的に或は體質的に其の固有なものを失ひつゝあるので最も科學的價値を持つものとして尊重されてゐる。

此團に屬してゐるシベリアには土着原住民の外にロシアの最初の征服者 移民の子孫からなる「古住ロシア人」があつて歐洲のロシア人「新移民」とかなり相違ある二次的體型文化を形成し又原住民と混血を起してゐる。

原住民はフリードリッヒミヒラー F. R. Müller が極地人種の呼んだもの を含むのであつてシュレンク Schrenck の「古アジアート」を意味する—— フイン、蒙古、トルコ、ヤモニド、シングース系統のものは此に反して 近住したもの故「新アジアート」と云ふ——ペトカノフ Patkanoff ツアプリカ Czaplicka は對比する兩者に古シベリア人、新シベリア人、ヘツドン Haddon は古北極人、新北極人の語を與へ、ヨヘルソン Jochelson はアメリカノイド、モンゴロイドの稱呼を與へてゐる。

古アジア人は太古のアジア住民であつて其の總計三萬一千に過ぎないが 他のアジア人に對して特種の位置に立つてゐるものである。十個の小民族 の總稱である。

本系に屬する種族はツアブリカ、ヨヘルソンに依れば

(1) チュクチ族

北東シベリアのチュコオツキ半島、アナデイル、コリマ河流域からインディギルカ河上流に及ぶ範域に住居し、バトカノフに依ればロシア統治權外にあるものである。人口は一一、七七一(男五、八一、女五九六)であつて ポガラスは一一〇〇〇と計算してゐる。彼等は遊牧馴鹿飼養民と定住沿岸 居留民とに分たれ總人口の約三〇〇〇人は漁獲民である。傳説に依れば

駒鹿 Rendeer チュクチ Chukchee の一部は以前アラツヒヤ Arazyati リマ河間のコリマツンドラを漂泊してゐたのであるが一八世紀以來ロシア人の侵入と共にコリマ河以東に壓迫されたものである。定住チュクチは主にアナデイル下流畔北冰洋沿岸に居住してゐる。

(2) コリヤーク族

チュクチ居住地の南部アナデイルカムチャツカ半島の中間部オホーツク、ギシギンスク、アナデイル Anadyr、ペトロパヴロウスク Petropavlovsk の四地方に住む。チュクチと同じく駒鹿飼養民と沿岸居住民則ち凍土帶遊牧民と沿岸漁民とに分たれる。ジエヅップ探險隊の調査に依れば人口七、五三〇(男三、八二九、女三、七〇一)である。駒鹿コリヤークは主にギンガ、ペトロパヴロウスク、カムチャツカの北部に居住してゐる。

沿岸コリヤークはオコーツク州にのみ住んでゐる。之等のコリヤークはロシア化され體質的にはロシア人、シングース、ヤクートの混血を示してゐる。

(3) カムチャダール族

カムチャダールはカムチャツカ半島カムチャツカ州ペトロパヴロウスク 郡の南部に居住してゐる。人口は三、五五五でカムチャダール語は現今殆んどロシア語化されてゐるが尙ほティギール河 Tigil River で使用されてゐる北部カムチャダール方言は多數のコリヤーク語彙を含み、南部方言は千島語と混交してゐる。それでクラシェニコフ Krushevnikoff は南部カムチャダールを千島人と呼んでゐるのである。

現今カムチャダールはロシア人の居留民と混血したので多くのものは以前のコリヤーク的相貌を失つてしまつてゐる。同様のことが南部地方の住民にも云ふことが出来るのであって體質的に千島土民(則ち北方アイ

ヌ)の影響を受けてゐる。

ヨヘルソン夫人が行つたカムチャダールの測定はロシア人の混交がカム

チャダールの體質特性に殆んど影響してゐなんど示してゐる。

次の表は計測數と指數を示す。(男一五八人、女一七〇人)

	男		女	
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差
身 長	1,597 mm	5.4	1,495 mm	4.6
頭 長	188 mm	6.8	183 mm	5.7
頭 幅	149 mm	5.7	144 mm	4.8
頭 形 指 數	78.9	2.9	78.5	2.7
頭 顎 幅	144 mm	5.7	137 mm	4.3
頭 顎 指 數	96.5	3.3	94.9	3.0

カムチャダールはキリスト教を信仰する以前には死屍を棄て犬に喰はし

める風習があつたので遺骨の發見が非常に困難であるがヨヘルソン Jocheson

はカヴァラン河口の寄に於て男女二體の先史代人骨を發見した。頭長は各々一七七粁と一八八粁、頭幅は一三六粁と一四二粁であつて指數は七六・九と七七・九である。

七六・九と七七・九に一一ブロカ法に従ひ一単位を加へると一七八・九と七九・九となつて數値は略、現在カムチャダールの平均頭形指數に等しい。

カムチャダールは現今尙ほ全くの漁撈民であつて馴鹿飼養を行はない。

チユクチ、コリヤーク、カムチャダールは相互に緊密に關係し同時にアメリカ原住民と甚だしき親縁性を示してゐる。體質上から云くば直狀毛で

ありこれはモンゴロイド、アメリカノイド、インディアンの特質である。

然し波狀毛も少數チユクチ、コリヤーク、カムチャダールに現はれてゐるのであつて、之は嘗て南米原住民に波狀毛要素が入つたことを暗示し得るのである。太平洋の兩沿岸のものは鼻は扁平狀でなく多くの場合秀であるがアメリカノイドはインディアンと同じく褐色の種々な色調を持つてゐる。モンゴロイドの斜眼裂はアメリカノイド、インディアンには殆んと現はれないと、眼瞼皮膚皺襞はあるがこれは白色人との混種に現はれると云はれてゐる。額幅は頭幅に比較すると廣い。頭形指數が示す如くアメリカノイド(特にカムチャダール)は廣い頭形の近住モンゴロイドに比較すると狭い頭形を持つてゐる。尙ほアメリカノイドと北部インディアンとの間には言語、傳説、漁獲法、狩獵法の同一の如き文化相似が存在してゐるのである。

(4) ギリヤーク族

ギリヤークは樺太の北半及び近接の沿海州ウドスキ郡アムール河口附近に散在してゐる。人口四、六四九(男)、五五六、女)、〇九三)。ギリヤークは異質民族に依つて包まれてゐる。樺太に於ては南方からアイヌ、東方からツングース Tungus のオロツコ群に依つて壓迫され大陸に於てはツングース滿洲部族のネギダルツイ・オロチ Negidaltzy Orochi、オルチ Olchi ラルデイ goldi、サマギール Samaghir、真正ツングースによつて圍繞されてゐる。

ギリヤークの體質的相貌は其の近住種族と或る程度の親縁性を示してゐるが其の言語に於ける構成、發音、語彙は全く近住部族と相違し、アメリカの

北太平洋沿岸系統と關係してゐる。スターンベルグ Sternberg に依れば明確なギリヤーク體型と云ふものはないのであつて、平均のギリヤークはツングースの變化したモンゴロイド特質に或はアイヌ特質の加はつたものだとしてゐる。顔面はかなり秀でた額骨を持つ多少卵形で鼻は中長であり眼裂は廣い。「ひげ」は男性に於ては多量である。

平均頭形指數(八六以上)はアイヌ(七七)よりも高いばかりでなく頭形状もツングース(八二)よりは短頭型である。モンゴロイド標示は女性よりも男性に著しく現はれてゐる。ショレンク Schrenck はギリヤークの原郷土は樺太であるとしてゐるがスターンベルグ Sternberg は樺太のギリヤークは新來者だとしてゐる。

(5) エスキモ族

アラスカからグリーンランドまでの全北極洋地域並にベーリング海のアジア沿岸に居住する人口一二五、〇〇〇、アジアのみでは一、三一〇八(男六三二、女六七六)である。シベリアのエスキモはコシマンドルスキ Komandorski のアレウトと共にアメリカノイドとして分類される。

ランゲル Wrangel とノルデンスヒョルド NordenSKIOLD に依ればエスキモ部族は嘗て全北冰洋沿岸シエラヌスキ岬からベーリング海峡まで占めてゐたがチユクチに驅逐されてしまつたものである。

(6) アレウト族

アラスカのアリューシアン列島、コンマンドルスキ諸島に住む。然し

コンマンドルスキのアレウトは後來者であつてベーリングが一七四一年に同島を發見した時には無人島であった。人口五七四、體質、言語、文化共にエスキモと親縁である。ヨヘルソンの考古學的調査に依れば發掘された七九のアレウト頭蓋の平均指數は八一・一で標準偏差は一・七で限域は七

八一八八であり、之はロシア領時代以前のものである。生體の一三八人の測定は平均指數八四、標準偏差三・三限域七六一九四である。プロカ法に依つて二単位を加へて頭形指數修正を行ふと八四・一になるので現住民と古住民とは同じである。ヒルドリツカに依ればエスキモ系統の一部族としてアサバスカン(平均頭形指數八四)と混血したものであると云ふ。

(7) ユカギール族

ユカギールはヤナ下流、コリマ下流、ヴェルコーヤンスク Verkhovansk 群に住む。

人口一、〇〇一(男五〇一、女五〇〇)。ツングースと混血してゐるのでアメリカノイドよりモンゴロイドに近い體性を示してゐる。生活様式はツングースから採用してゐるが、言語傳説はチユクチ、コリヤークに密接な關係のあることを示してゐる。

(8) チュヴァンツィ Chuvantzy 族

チヤアン湖の南、アナデイル河、コルキムスキ、アナデイルスキ群に住んでゐる。人口四五三(男二二六、女二一七)。

昔時はチユヴァンツィとユカギール Yukaghir とは單一種族を形成してゐたものである。彼等は馴鹿飼養民と犬飼養民とに分つことが出来る。

次の二種族エニセイ、オステイヤク則ちエニセイアンとアイヌは其の人種分類に異説があるが多數の學者は古アジアートに屬さしめてゐるので假に此處に列記することとした。

(9) エニセイ、オステイヤク族

ウグリアン Ugrian、オステイヤク Ostyak、サモエド・オステイヤク、エニセイ・オステイヤクの明かに異つてゐる三部族がオステイヤクと總稱されてゐるがオステイヤクの用語は真正オステイヤクのウグリアン・オス

ティイヤクに限る方が望ましい。

ヨヘルソンはエニセイ・オステイヤクは單にエニセイアン Yeniseian と呼ぶことを提唱し、クラプローム Klaproth もオステイヤクの用語を排斥してエニセイアンにコット Kott 減じたアッサム Assam と韓靼化されたアリン Atin を含めてゐる。エニセイアンはディーン Dīn と自稱してゐる。

近住のサモエド、ウグリアン、オステイヤク、ツングースよりも毛髮色性は黒色の度が淡い。青色眼のものもあるが之は起源からの特性であるが、ロシア人との混血の結果であるかはまだ決定されてゐない。カストレンに依ればエニセイアンの言語構成はモンゴロイド系統と異なると云ふ。現住地はエニセイ河及び其の支流河畔であつて人口は九八八(男五三五、女四五三)。

(10) アイヌ族

エニセイアンの起源より更に困難な問題はアイヌの起源である。現今樺太南部、北海道、千島に住してゐる。民族學的にシベリア原住民に含める學者が多いが、モンゴロイド、アメリカノイド民族の間に唯一のカウカソイド Caucasoid 部族の存在してゐることが其の學說を紛糾させてゐる。そしてアリヤン、セム、トダ、オーストラリヤ人、メラネシア人にさへ其の起源を求めようとしてゐるのである。

此の古アジアーに對する新アジアーは在來一般にウラルアルタイの語が興へられてゐる。之はフィンランドの探險家カストン M. A. Castren がウラル山とアルタイ山との間の地域に住む原住民に興へたものであつた。從つて語原的にはウラルアルタイの用語は地理的なものであつて印度ゲルマンの用語と類似してゐる。(インドのアリヤンとゲルマン民族がアリヤン國の極所を形成してゐると云ふ見解からインドアリヤンの語原は起つた)。ミュラー Müller はウラルアルタイの用語をトツラニヤン系の北

方分派に當て シュレンク Schrenk も同様の見解をとつてゐるのであつて フイン・サモエド、フェルコ、蒙古、ツングースの諸種族を包含してゐるが ベツシヨル Peschel はフイン群にのみ此の用語を限つてゐる。

ウラルアルタイの用語は主に言語學上の意味を有するものであつて フィン語、サモエド語、トルコ語、蒙古語、ツングース語に於ける一定の特質を包含するものである。言語形態學的には此等の言語は漆着語に屬するものである。然し乍らウラルアルタイの用語は異なる地域に成立したと考えられる人種を一地域の名稱に包含しようとするものであるが故に非難と反対とがある。

此の故にツアプリカ Czaplicka は新シベリア人をヨヘルソン Jochelson はモンゴロイドの用語をウラル・アルタイ人に換へて用ひてゐる。

新・アジアー則ち新シベリア人はウラル・アルタイ民族を意味するものであつて左の五種族を含む。

(1) フイン部族

フイン系民族のシベリアに居住するものは現今は少數であつて大部分はハンガリヤ、歐洲ロシア、スウェーデン、ノルウェーに住んでゐる。然し或るハンガリヤ人はシーベンブルゲン、ブコウイナ、モルダヴィア、ルーマニヤに住んでゐる。然し或るハンガリヤ人はシーベンブルゲン、ブコウイナ、モルダヴィア、ルーマニヤに住んでゐる。然し或るハンガリヤ人はシーベンブルゲン、アジアにはフイン族は全く居ないのである。マジャールの學者は體質學的基礎からフインとモンゴロイドを分離しようとしてゐる。そしてウグロ・フィン語 Ugro-Finnic をゲルマン語と關係せしめようと企圖してゐるが然し疑ひもなく一般の學說に従へば其の體質特性はモンゴロイドである。フインの原郷土はカストレンに依ればエニセイ州のアルタイ地方である。フ

イン系部族は其の方言に従つてウグリアン、バルテイク、フィン、ペルミアン、ブルガリア人の四派に分つことが出来る。

ウグリアン族

カストレンはウグリアン群中にオブ河の右岸に居住してゐるオステイヤクと、北ウラル山の東側に居住してゐるヴォグールとマジヤールを包含せしめてゐる。人口はマジヤール約九、五〇〇、〇〇〇、オステイヤク一七、一一一、ヴォグール七、四六七である。

フィノウグリアン民族 (シノニヤベ : Sinius)

	身長	頭形指數
サモニド ラツブ ヴォグール オステイヤク ハンガリアン シリエニヤン ヴォティヤク 遊牧チエレミス 山住チエレミス モルドヴィニア エストリアン フィン サヴォラクシア 北部カレリアン 南部カレリアン 北部オストロボトニア ニーランダ タガオスト	一五六・八 一五五・九 一五六・五 一五七・五 一五八・一 一五九・一 一六〇・一 一六一・〇 一六二・一 一六三・一 一六四・七 一六五・九 一六四・七 一七〇・〇 一七〇・九 一六九・六 一六九・六 一七〇・三 一七〇・一五 一七一・四 一七一・六	八〇・一七 八五・三三 七八・三三 八〇・水八 八三・五 一 八一・八六 八〇・九〇 八〇・三三 七八・〇〇 一 八一・三〇 八一・一五 八一・一五 八〇・五 八〇・九
Samoyedes Lapps Voguls Ostyaks Hungarians Sireyenians Votyaks Pastoral Cherenisses Hill cherenisses Mardvinians Esthonians Finns Savolaxians North Carelians South Carelians North Ostrobothnians Nylanders Tavasts		

(d) ヴォグール族、(マニシア又はスオミと呼ばれてゐる)はベレゾフからトボルスクまでのオブ中流とウラル山の間主にトボルスカヤ縣の西部、ペルムスカヤ縣のウラル山東地域に住してゐる。人口七、四七六。
(1) サモニド部族

カタンガ河口からウラル山までの北極洋地方及び歐洲チエスカ灘に及んでゐる。三分派に分たる。

主に西部シベリア・ヒニセイスカヤ縣の北部に住し (a) トボルスカヤ縣、

ペリヨゾフスキ一郡に於けるものはユラク族、(男一、五一九、女一、八五二)

(b) トムスカ縣ナルキムススキ一地方及びトムスキ群地部ではオステイヤ

ク・サモニドと呼ばれ(男一、八四三、女一、九六一) (c) ヒニセイスカヤ縣ア

ルハンスクより東方カタンガ河に至るツンドラ帶に住むものはヒニセイ。

サモニド及びタウギ Tawgi (男六三九、女六八七) と云はれてゐる。人口

南部オストロボトニア
トニアン
真正フィンとサタクンテイアン
東部カレリアン

一七一・九
一七二・四
一六九・七

八〇・〇〇
七九・四
八一・四

一七一・九
一七二・四
一六九・七

八〇・〇〇
七九・四
八一・四

トルコ人種の本部群のみがシベリア圈に屬してゐる。中央群(キルギス、カイザク、カラ・キルギス、ウズベック、サルト、ヴォルガのタタール

(韃靼人)及び西部群(トルコマン、クウカス、ペルシャのイラン人、オスマン＝トルコ)は東部歐洲、中央アジアに住む。

東部群即ちシベリア分派は次の種族を含む。

(a) ヤクート族、レナ河とアルダン河の下流、ヤクーツク群、アムール河、樺太までに住んでゐる。トルカンスク Turukhansk 群に住んでゐる明かにツングース起源であるが全くヤクート化されたドルガン族との人口總計は[一][二][六][七][九](男[一][一][四][〇][九]、女[一][三][三][三][〇])。

カチンタール(ミヌシク)はヤクートの一部分である。ヤクートは一體型に區別することが出来る。一は純粹の蒙古族で廣額と扁平鼻を有し一は南西シベリアのタタールに近似し狭い長額と秀た鼻を有してゐる。ヤクートの古代名はウリヤンカイ Uriankhai であつた

(b) ヤクートを除いたシベリアのトルコ部族はタタール(韃靼人)と一般に呼ばれてゐる。シベリアに住む他の韃靼人は主にトボルスクとトムスク政廳に屬してゐるのでありて人口一七六、一二四と計算されてゐる。住地に依つて左の名稱が附されてゐる。

(イ) トボルスクタタール([三][七][六][三][七])及びシベリア・ブハールツイ Bukhartery([一][一][六][五][九])(トボルスクヤ縣)

(ロ) バラバ Baraba タタール(トムスク縣カインスキイ郡)

(ハ) チュリマ Chulyma タタール([一][一][一][一][一]) (トムスク縣マリインスキイ郡)

(ニ) トムスク・クズネツク Tomsko-Kusnetzk タタール(八、一六四)(クズ

ネツキー郡、ベルナウリスキー郡)

(ホ) チエルネヴィヨ Cherneviye タタール(六、三)[四]([ゼイスキー郡)
(ヘ) テレウト Teleut 人、又はテレンギイト Telengit 人(九、一〇〇) (ゼ

イスキー郡、クズネツキー郡)

スキー郡)

(ト) クマンデインツィ Kumandintzy (四、〇九一) クズネツキー郡、ビイ

〇)(クズネツキー郡)

(リ) キジル Kizyl タタール(七、七五九)(アチンスキイ郡)

(ヌ) アバカン Abakan タタール(一、九七四)及びサガイ Sagai タタ

ル(一九、五七〇)(ミヌシシスキー郡)

(ル) カラガス Karagas (ジネ・ウヂンスキイ郡) これは韃靼化されたサモエドである。

以上全シベリアのトルコ種族(ヤクートとドルガンを除く)人口は一七六、一一四(男八九、一六五、女八六、九五九)である。

(四) 蒙古部族

(ア) 西部群はドンガン族とカルムツク族であつて——自らはエリュートと呼ぶ——この蒙古人のシベリアに住んでゐるものは極めて少數である。(一八九七年にはたつた一五人) 主に蒙古から接續地の後バイカル州に來たものである。主にトルケスタンに居住してゐる。

(イ) 東部群即ち本來の蒙古人、此の地方分派カルカー族のみが少數(一八九七年、四〇一)シベリアに住んでゐる。

(シ) ブリヤート族ブリヤートは全部東部シベリアの一州トランスバイカリヤとイルクツクに居住してゐる。人口一七七、六三七。

東部則ち真正蒙古族と西部蒙古族則ちカルムツクとブリヤートは三大蒙古分派を形成してゐる。ブリヤートは大部分遊牧民でありゴビ砂漠を包含する東部蒙古のカールカ Khalkas 部族に最も近縁のものである。戰鬪と移

動の結果西部蒙古族則ちカルムツクは現今ホアンホ Hoang-Ho 河畔からモンチ Monchi 河畔(ドン支流)までのシベリアとラツサ間の廣大な地域に散在してゐる。更に密集した群は歐洲ロシア(アストラハン Astrakhan カルムツク)、コウカス(テレツク Terk カルムツク)、ジンガリヤ Jungaria(トルグート Torgout)、北西蒙古(アルタイ山と天山間)、アラシヤ Alasha 以西(北チベットのココノール省 Koko-Nor)に見出される。

東部蒙古族は七十万、西部蒙古族は百萬、ブリヤートは一八八、五九九と數くられてゐる。學者に依つては第四の蒙古群としてタメルラム Tamerlane(トイムール Timur)がアフガニスタンに遺留したハザレ Hazare 又はハザラ Hazara を加へる。人口、四十五萬。

(五) ツングース族

ツングースの原郷土はまだ決定されではないが一般にアムール渓谷から東部全シベリアに擴がつたと云はれてゐる。パトカノフ Patkhanoff は西紀七世紀以來アムール河南方で武威を振つた。強力民族の壓迫のために滿洲から北方へ移動したものであると云ふ。一六四四年に清朝を樹立した滿洲族はツングースに類縁の民族である。

現今ツングースは滿洲から北極洋、オホーツク海からエニセイ河の東部流域までの全東部シベリアに分布してゐる。更にツングースの少群はタヅ Taz 河流域のサモエド族間及びカス Kass 河のヒニセイオステイヤク間に居住してゐる。人口は七六、五〇四(男三九、三]〇三、女三七、一〇一)であつて其の親縁種族の滿洲族は一二、五〇〇人と數へられ朝鮮人はツングースと支那人及び日本人の混血人種と見做されてゐる。

ショレンク教授は十部族を其の方言に従つて四群に分つてゐる。(1)タウル Daur とハロ Solon (2)満洲族(満洲族中の支那化されざる小分派)、コ

ルディ Goldi オロチ Orochi (3)オロチヨン Orochon マネグリ Manegri (4)ラル Binar キビ Kibi (4)オルチ Olchi (アムール河下流のマングン Mangun と樺太のオロキ Orok) ネギダルツイ Negidaltzy ヤマギール Samaghir ハトウイチ教授 Kotwich は滿洲、ツングース部族を方言的親縁性に従つて(1)滿洲族(シブ Sib を含む) (2)固有ツングース(ラムート Lamut を含む)、マナギール Managhir ハロハ Solon タウル Daur (3)ハルディ群(オルチ、アロキ Oroki オロク Crok (4)サマギール、ナグダ Nagda

(5)プロバーンツングース族は所謂ラムートとアムール、オロチヨンを含み、東經六〇度から太平洋まで、北極洋から支那國境までの東部シベリア全域に居住してゐる。即ちエニセイカヤ縣、イルクツカヤ縣、ヤクウツカヤ縣、沿海州、カムチャツカ州、トランスバイカル州、樺太等。人口六二、〇六八。

(b)他のツングース族、(イ)チャボギール族、下ツングースカとストヨー、ツングースカの間に住む。(ロ)ゴルディ族、下アムールウスリ江の下流域、人口五、〇一六。(ハ)ラムート族、オホーツク海沿岸。(ニ)満洲族、ゼエヤ河畔、シベリアには少數存し大部分は滿洲に住む。人口、三三三四〇。(ホ)モネグル族、アムール河中流、東緯二二六度、人口一六〇。(ヘ)オロチ族、ロクレ、アムールと太平洋岸の中に住む。人口、二、四〇七。(ト)オロチヨン族、オレクマ河に住す。(チ)オロツコ族、樺太の東岸、内地に住む。人口、七四九。(リ)ソロモン族、アムール中流の南東緯二〇度附近等がある全ツングース部族の人口總計は七六、五〇七である。

定住ツングースの大半數はトランスバイカリヤ州アクシヤ Aksha 郡の蒙古境域に沿つて生活してゐるコザック Cosack である。

第二節 東部シベリア地方

アメリカ・インディアンが北東シベリアからアメリカ大陸に入つたと云ふ事は多數の學者に依つて唱導されてゐる。アメリカには昔から種々の人種が存在してゐた——一部のものは非常に古代に屬してゐる。例へば長頭型古アメリンドの如く——と云ふ事は考古學者が示してゐるのである。從つて之等の人種も嘗つてはシベリアに居住してゐたに違ひない。そしてその蹟跡も現存してゐると推測されるが、その後のアジアの民族大移動に絶滅若しくは不明にされてしまつたらしい。且つシベリアの人種考古學は未だ充分研究されてゐないので其の復原が困難である。

「新人種」の早期北方群の一部は未だ長頭型であつて分化しない體型をしてゐた時に既に遠く漂泊してゐたと考へられるのであつて、我々は彼等を後に原北方人種がそれから派生したところの同一系統のものであると推測してゐる。彼等は長、中頭型種に依つて驅逐され、後者は次に早期短頭型種に依つて驅逐されたものであるらしい。

古代から黃色皮膚の短頭型種は北方移動を繼續してゐた。此の概括が正しいならばシベリア人種史はかなり複雑してゐるものである。

全シベリアを通じて廣く分布してゐるのは「古北極洋人種」に屬する異質群である。此は其の以前の體型は不明であるが現今尚ほ強度の長、中頭型

の血統を示してゐるものである。カムチャダール族、北部カムチャツカのカテガシ族、更に北方のコルヤツク族、コリマ、アナデイル地方のツングース族、チャウン溝からヤナ灣までに及んでゐるニカギール族、頭型指數八四・一、身長一・五六米、等が此れに屬してゐる。

稍、後に來たものは「新北極人」と呼ばれる低き短頭型系統であつてチュクチ族はアジアの極北東にまで進んだ。ツングース民族はエニセイ河から太平洋、北極洋から蒙古境域まで擴がつた。トルコ・ヤクート族は十二世紀にツングース領域に侵入して來た。彼等はインディギルカ河とヤナ河間、アツバー・レナ盆地及び東方アムール河、アムール海附近に居住してゐる。

東に於てはアムール河が北方ツングースと南方ツングースとの分界をなし、海岸ツングース即ちラムートはオホーツク海沿岸に分布してゐる。此等の東部ツングース族の中でオルチヤ即ちマングーン族はアムール河口に、オロツイ族は下アムールとアムール海間に、オロチヨン則ち馴鹿ツングースはレナ河支流のオレクマ河に、ゴルド族は下アムールとウスリ河に、オロツコ族は東樺太及び附近のシベリア本土に居住してゐる。

樺太北端、アムール三角洲の北部本土のギリヤーク族はアイヌと混血してゐるやうに思はれる。バイカル湖の東、西、トランスバイカリヤ、イルクツクに擴がつてゐるブリヤート族は非常な異質的要素を含んでゐる。

幅 指 ノ 数

カムチャヤダール	ユカギール	ツ ン グ ー ス						ヤクート	
		ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル	ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル		
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
63	65	59	86	46	69	10	6	23	9
27.0	40.0	10.0	17.0	24.0	13.0	-	-	-	-
53.9	46.1	44.0	36.0	45.6	58.1	-	-	-	-
19.1	13.9	41.0	47.0	30.4	27.5	-	-	-	-
-	-	5.0	-	1.4	-	-	-	-	-
70	72	75	75	72	73	74	74	74	75
84	83	87	85	84	87	83	84	85	83
78.5	77.4	80.4	80	78.7	79.3	78.5	79.4	80.8	80.3
±2.4	±2.0	±2.0	±2.1	±2.5	±2.0	±2.0	±3.0	±2.2	±2.1
									±2.5

最 大 長

カムチャヤダール	ユカギール	ツ ン グ ー ス						ヤクート	
		ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル	ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル		
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
173	168	173	171	182	172	187	184	181	174
200	193	205	197	205	200	203	195	207	196
188	182.9	191.4	185.2	191.4	186.5	192.5	188.9	191.6	184.1
±4.4	±4.4	±4.6	±4.0	±4.3	±3.5	-	-	-	-
									±4.7

最 大 幅

138	130	143	139	144	137	146	140	145	144	-	141
160	153	169	159	161	158	157	157	165	153	-	165
147.6	141.4	153.5	148.1	152.8	147.8	151.2	150.0	154.9	148.8	-	152.0
±4.7	±3.6	±4.3	±3.1	±3.4	±3.2	-	-	-	-	-	±3.6
63	66	70	39	51	72	10	6	22	9	-	61

ン・ブロドスキ)

カムチャヤダール	ユカギール	ツ ン グ ー ス						ヤクート	
		ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル	ギ シ ガ	コ リ マ	ア ナ デ イ ル		
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
63	65	70	39	52	72	9	-	22	8
44.4	53.9	85.7	82.1	76.9	84.7	77.8	-	77.3	62.5
39.7	32.3	14.3	15.3	15.4	13.9	-	-	13.6	25.0
9.5	13.8	-	2.6	5.8	1.4	1.1	-	9.1	12.5
6.4	-	-	-	1.9	-	1.1	-	-	-
1470	1400	1440	1380	1400	1380	1580	-	1440	1380
1740	1600	1650	1570	1720	1560	1710	-	1680	1580
1601	1496	1560	1470	1565	1465	1588	-	1574	1482
±3.9	±4	±4	±3.2	±4.5	±3	±5	-	±4.1	±5
105		90		100		-		92	

頭形長

計測員數	アジアのエスキモ		チユクチ		コリヤーク			
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
60	80	148	50	169	132	24	19	
長頭型(76.チツイ下)	8.3	13.8	5.4	4.0	6.5	12.2	-	-
中頭型(76.5—80.9)	45.0	45.0	32.4	30.0	47.3	41.6	-	-
短頭型(81.0—85.9)	38.4	38.7	46.6	48.0	42.7	44.7	-	-
過短頭型(86.0以上)	8.3	2.5	15.6	18.0	3.5	1.5	-	-
最小	74	74	75	74	75	75	74	74
最大	90	89	96	88	86	86	81	82
平均	80.8	79.7	82.0	81.8	80.3	80.0	78.1	78.0
平均偏差	±2.5	±2.3	±2.4	±2.4	±2.2	±2.2	±1.6	±2.0

頭形

最最平均偏	アジアのエスキモ		チユクチ		コリヤーク			
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
少	171	172	173	171	176	169	180	175
大	203	197	204	196	200	202	200	195
均	189.8	184.5	188.2	181.9	189.3	183.8	191.8	186.0
差	±4.7	±4.2	±5.5	±4.5	±4.0	±4.4	±4.6	5.2

頭形

最最平均偏	少		大		均		差	
	143	135	139	140	139	136	144	138
	165	156	168	159	166	160	155	150
	153.0	146.8	153.4	148.9	151.8	147.0	149.7	144.0
	±3.4	±3.5	±3.8	±3.0	±3.2	±3.6	±2.5	±2.1

計測員數	60	80	148	49	173	173	24	19
------	----	----	-----	----	-----	-----	----	----

身長(ヨヘルソ)

三	アジヤのエスキモ		チユクチ		コリヤーク			
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	61	80	148	49	173	133	24	19
少{♂1600耗以下(パーセント) ♀1500"}	41.0	43.7	43.3	40.9	58.4	60.9	37.5	15.8
低{♂1601—1670耗 ♀1501—1550耗}	32.8	32.6	30.4	30.6	27.4	32.3	37.5	52.6
高{♂1651—1700耗 ♀1551—1600耗}	21.3	20.0	15.0	20.4	12.2	6.0	20.8	31.6
大{♂1701耗以上 ♀1601耗以上}	4.9	3.7	11.3	8.1	-	0.8	4.2	-
最小(耗)	1520	1400	1500	1380	1490	1380	1530	1430
最大(耗)	1730	1620	1780	1630	1700	1610	1710	1600
平均	1623	1518	1622	1522	1596	1491	1620	1530
平均偏差	±4	±4	±4.9	±4.6	±3.8	±3.6	±3.7	±3.2
女性平均差(男子より小)	105		102		105		90	

頭形の長幅指數

北東アジアのウラルアルタイ等民族の平均身長

號 數	ウラルアルタイ及他 の北東アジア民族	員 數	平均頭形長 幅指數		性 差 別
			♂	♀	
1	アイヌ(小金井)	95	1177.3	78.04	+0.09
2	北海道のアイヌ(ドニケ)	11	-77.8	-	-
3	日本人(ドニケ)	78	-78.5	-	-
4	ワルジヤの支那人(イワノフスキ)	30	-78.41	-	-
5	オスチヤツク(イワノフスキ)	195	-79.23	-	-
6	北ツングース(マイノフ)	11	-81.39	-	-
7	チユクチ(オルスフェフ)	14	-81.79	-	-
8	カザン・タタール(イワノフスキ)	206	3782.08	81.84	0.24
9	朝鮮人(ドニケ)	11	-82.06	-	-
10	トランスバイカリヤのツングース(タルコ・ヒリンツエウイツ)	35	-82.23	-	-
11	満洲族(ボヤルコフ)	-	-82.32	-	-
12	ヤクート(ウイタチエウスキ)	46	1582.33	52.94	+0.61
13	バシキル(イワノフスキ)	536	-82.53	-	-
14	カルムツク(イワノフスキ)	285	-82.57	-	-
15	ヤクート(マイノフ)	207	6282.66	80.82	-1.84
16	南ツングース(マイノフ)	87	1082.69	82.26	-0.43
17	オロチヨン(イワノフスキ)	87	-82.81	-	-
18	ヤクート(ヘツケル)	139	-83.01	-	-
19	ソヨト(イワノフスキ)	72	2083.03	82.59	-0.46
20	サモエド(イワノフスキ)	88	-83.95	-	-
21	ラツブ(イワノフスキ)	24	-84.00	-	-
22	トルゴート(イワノフスキ)	103	-84.73	-	-
23	満洲族(ウジファルヴィ)	-	-84.91	-	-
24	ブリヤート(イワノフスキ)	816	-85.89	-	-
25	ギリヤーク(ドニケ)	20	-86.03	-	-
26	カラ・キルギス(イワノフスキ)	66	-86.17	-	-
27	キルギル(イワノフスキ)	374	-87.10	-	-
	エスキモと北太平洋のイ ンディアン				
1	グリーンランドのエスキモ(ドニケ)	614	-76.08	-	-
2	アラスカの〃(ボアス)	114	-79.02	-	-
3	ハイダス(ドニケ)	63	-82.07	-	-
4	ペラワーラ(ボアス)	32	-83.04	-	-
5	シユースワツブ(ボアス)	72	-84.09	-	-
6	サリシヤン(ハリソン湖) (ボアス)	35	-88.08	-	-

	員 數	平均長幅指數		性別 差
		♂	♀	
a) 小民族(1600耗以下)				
スカンディイナヴィヤのラツブ(ドニケ)	259	-1,529	-	-
エニセイオスチヤツク(ドニケ)	25	-1,540	-	-
オロチヨン(マルガリトフ)	37	81,545	1,443	102
北ツングース(マイノフ)	11	-1,548	-	-
ロシアのラツブ(イワノフスキ)	37	-1,559	-	-
サモエド(イワノフスキ)	84	461,550	1,143	120
アイヌ(小金井)	91	691,567	1,471	96
オブ・オスチヤツク	195	271,579	1,441	138
日本人(軍人)(ドニケ)	2,500	-1,585	-	-
カラガシ(サレツキ)	20	101,589	1,455	134
日本人(上流階級)	1,100	-1,590	-	-
b) 低身長(1601—1650耗)				
ヤクート(ウイタチエウスキ)	46	161,607	1,498	109
ヤクート(マイノフ)	207	621,624	1,512	112
ブリヤート(イワノフスキ)	825	1,631	-	-
トルゴート(イワノフスキ)	168	-1,631	-	-
南ツングース(マイノフ)	86	71,631	1,530	101
トランスバイカリヤのツングース(タルコ・ヒリンツエウイツ)	45	-1,638	-	-
カルムツク(イワノフスキ)	305	191,640	1,504	136
キルギス(イワノフスキ)	378	521,640	1,511	129
カザン・タタール(ヴアルシキン)	206	371,645	1,521	124
沿岸チユクチ(ドニケ)	37	-1,649	-	-
c) 高民族(1651—1700耗)				
支那人(イワノフスキ)	79	-1,653	-	-
バシキル(イワノフスキ)	611	-1,655	-	-
チユクチ(スルスフェフ)	14	-1,660	-	-
カラキルギス(イワノフスキ)	65	-1,673	-	-
シボース(満洲ツングース)(ドニケ)	38	-1,675	-	-
カムチャツカのコリヤーク	78.1	78.0	-	0.1
カムチャダール	78.5	77.4	-	1.1
コリマのツングース	78.5	79.4	+	0.9
ギシガの〃	78.7	79.3	+	0.6
ギシガのコリヤーク	80.3	80.0	-	0.3
ユカギール	80.4	80.0	-	0.4
アナデイルのツングース	80.8	80.3	+	0.5
アジアのエスキモ	80.8	79.7	-	1.1
チユクチ	82.0	81.8	-	0.2
ヤクート	83.1	83.3	+	0.2

形顔學的顔面指數

測定員數	アジアのエスキモー		チユクチ		コリヤーク		カムチャダール	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
北方圈の民族構成	60	78	126	50	171	133	—	○
	—	—	—	—	1.2	1.5	—	—
	55	78.1	69	80	82.3	87.2	—	—
	45	26.9	31	20	17.5	11.3	—	—
	76	80.0	77	76	78.0	71.0	—	—
	100	99.0	10.2	98	97.0	98.0	—	—
最最小平均		88.8	89.7	88.0	86.3	85.5	84.3	—

測定員數	ユカギール		ツングース				ヤクト	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
廣顔型(74.9以下)百分率	—	—	2.1	4.4	—	—	—	—
	71.4	91.7	87.2	86.8	—	—	—	—
	28.6	8.3	10.7	88.0	—	—	—	—
	77.0	75.0	70.0	73.0	—	—	—	—
	97.0	93.0	94.0	96.0	—	—	—	—
	86.0	84.0	84.4	83.0	—	—	—	—

頭形長高指數

a) (ヨヘルソン・プロドスキの計測せる女性)

員數	ヤクト		
	52	27	27
扁頭型(72以下)	82.7 %	77.8 %	85.2 %
正頭型(72.1—75.0)	13.5 %	14.8 %	14.8 %
高頭型(75.1以上)	3.8 %	7.4 %	—
最小指數 %	60	59.0	58.2
最大指數 %	79	76.5	75.0
平均	69	66.7	65.2

b) (他の民族)

	員數		♂	♀	性別差
	♂	♀			
アイヌ(小金井)	94	70	64.60	66.20	+ 1.60
南部ツングース(マイノフ)	80	—	65.22	—	-
カルムツク(イワノフスキ)	161	—	66.40	—	-
バシキール(イワノフスキ)	193	—	67.34	—	-
カザン・タタール(イワノフスキ)	204	32	68.06	68.19	+ 0.13
ヤクト(マイノフ)	100	50	69.10	66.47	- 2.63
北ツングース(マイノフ)	11	—	69.40	—	-
ブリヤート(イワノフスキ)	100	—	69.56	67.56	- 2.00
トルゴート(イワノフスキ)	113	—	69.87	—	-
ヤクト(ウイタチエウスキ)	44	15	70.38	72.14	+ 1.76
オスティヤク(イワノフスキ)	58	—	70.96	—	-
チユクチ(オルスフェフ)	14	—	71.89	—	-
カラキルギス(イワノフスキ)	40	10	72.04	75.34	+ 3.30
サモエド(イワノフスキ)	20	10	72.08	74.02	+ 1.94
キルギス(イワノフスキ)	129	—	73.40	—	-
タルジヤ・支那人(イワノフスキ)	30	—	77.13	—	-

の中流及びウラルの間に住んでゐる。兩者とも褐色毛が優勢で頭は低く顔は短く額骨はサモエド程秀てはゐない。

彼等は中鼻(オビ)のオステイヤクは鼻形指數七六・五、北方ヴォグールは鼻形指數八七・一)で涙阜襞は非常に稀である。

アツパー・エニセイ地方にはクラーヤルスクとミヌシンスクとの間には前者に類似せる而も石器は西歐洲と後期ムスティヤンやオーリナシヤンのものと類似してゐる獵民が其の當時形成し始めた黃土帶に住んでゐた。

エニセイの上流地方シャンスク(サヤン)山脈北部は現今ミヌシンスク地方に中心をもつた古代文化の地方である。此等の古きエニセイアンは農民であつて金、銀、青銅を使用してゐたが鐵を知らなかつた。鐵は後に南方よりの新來者の流入と共に移植されたものである。エニセイとオルコーンに於ける「ビサニツィ」Pisantzy(繪畫文字)「トムゼンThomson、ラドロフRadioff解讀)の製作者はエニセイアンと云はれてゐる。アヌチンAnuchinの體質測定に依ればエニセイアンは平均身長一・五八七纏、頭形指數八三・一、顔面指數七九・一である。

エニセイ渓谷の狀態は古きトウバ民族のおこることを得せしめた。後に此の同じ適地状態は蒙古の遊牧民を誘ひ其のためエニセイ族は亡ぼされてしまつた。

紀元前三世紀トルコ・ウイグルが南蒙古の支那國境から來り、紀元四世紀から八世紀まで全蒙古はエニセイ以北チユリム河までも其の版圖とした。

極洋人種である。サモエドの南に居るオステイヤク族はトボルスク地方とエニセイの西のシベリアに住む種族はフン語を用ひてゐる中頭型の古北北部からオブ河口、更に北トムスク地方とエニセイにまで及んでゐる。

ヴォグール(マニザ又はスオミ)はベレゾフからトボルスクまでのオブ川

第三節 西部シベリア地方

鼻 形 指 數

員 均 最 主	數 指 數 大 小 異	ヤ ク ー ト (女 性)	ツィングース・ユカギール (女 性)
總		30	43
平		64.6	66
最		78.0	81
主		55.0	53
		58—71	58—73
			2 (4.65%)
			24 (55.81%)
			17 (39.54%)
			—

	♂	♀	
ヨ イ カル ン・ オーラ ソア ド タ	ト(ゴロスチエンコ) ヌ(小金井) ツク(イワノフスキ) ク(ドニケ) ト(イワノフスキ) モ(ボアス) モ(ボアス) ン(ボアス)	76.20 — 73.90 70.57 60.46 — — —	69.50 66.70 — — — 63.00 62.87 62.87

ウイグル族に征服されたエニセイ人の一部は現今トウバ(ウリアンカイ)後蒙古人に奪はれた。

ウイグル族に征服されたエニセイ人の一部は現今トウバ(ウリアンカイ)

族として現はれてゐる該森林中に逃避してしまつた。

ロシア人は彼等をソヨト族と呼んでゐるが、然し彼等は中央シベリアのソヨト族と何等の共通點をもつてゐないのである。他のものは處々に行き現今はサモエト、歐洲のラツプ族となつたものである。

トウバ族は混血種族であつて殆んど純蒙古人の特徴を持つものから典型的歐洲人の特徴をもつてゐるものまでの諸階級の變異を含んでゐる。馴鹿

を飼養する部族が最も蒙古化してゐない。エニセイ・オステイヤク族の大部は褐色毛を持ち、他のエニセイ族と同じく頭型は扁頭型である。彼等

はロワー・ツシングースカ河とトウルカンスクまでのストニ・ツシングースカ河との間のロワー・エニセイ河畔に居住してゐる。

サモエド族は内國及びウラル山を越え、チエスカヤ湖から遙か東方エニ

セイ河とレナ河との間のカタンガ湖に及ぶ沿岸島嶼に分布してゐる。北方群はユラクと呼ばれてゐる。

サモエド族の平均鼻形指數は七七、涙阜襞はないが眼は普通蒙古式の狭細と斜度をもつてゐる。

此等の古北極洋人種の大多數の身長は低と中位との限界線中にある。

一般にユーラジヤの身長最低民族は成表に示されてゐる如く大陸の最北部を占め(ラツプ、サモエド、オステイヤク、ユカギール)てゐるが、アジアの北東端に於ては平均下であり(チュクチ、アジア・エスキモ)、其の南方は(コリヤーク、カムチャダール、或ツシングース部族)人低身長になつてゐる。ヤクートも又平均下身長であるが、彼等は北極地域に近住したものである。

身長の地理的分布を考察するとユーラジヤに於て極地部族の身長は西から東へ行くに従つて(ラツプ、サモエドに始まる)増加するが、米國北極圈

に於ては逆になつてゐる。東部エスキモが最低の身長である。アラスカ及びチュクチ半島のエスキモが最高である。それでラプランドからグリンランドに伸びてゐる餘北極及亞北極帶を見ると低身長の境帶が高身長の中央、ランス・ベーリング地帶を圍繞してゐるのを知るのである。

身長の分布

低身長(一六〇〇耗以下)

オロチ
サモエド
一五四五

ユカリル
一五五〇
一五五九

ラツプ
一五六九
一五六九

アイヌ
一五六七
一五六七

北方ツシングース
ラブラドル・エスキモ
一五七五
一五七八

日本人
一五七九
一五八〇

オスティヤク
ザオグール
一五八一
一五八二

シユヴァシ
アレウト
一五八三
一五八四

カラガシ
カムチャダール
一五八五
一五八六

コリヤーク
一五八七
一五八八

カムチャダール
一五九一
一五九二

平均下身長(一六〇一—一六四九耗)

東部エスキモ
一六〇六
一六一五

バロー岬エスキモ
一六一七
一六一七

ヤクート
一六一八
一六一九

ペルミヤク
一六一九
一六二〇

アジア・エスキモ

印 度 人

猶 太 人(ロシアの)

ツングヨス

チエレミス

チリヤン

ブリアート

トルグート

テレンギット

猶 太 人(ジョルジヤの)
ブラック・タタール(アルタイ)

キルギス

カルムツク

ウデイーン

クミク

タタール(カザン)

ジプシ一(歐洲)

ミングレリアン

メスチエルヤク

支 那 人

ボーランド人、

バシキル

大ロシア人

リトワニヤ人

アフガン

ドゥンガン

ジヨルスキ猶太人
クリミヤのタタール

トルコ人

白ロシア人

ガルチャヤ

小ロシア人

アイソール

フイ

アルミニヤ人

カラ・キルギス

カラチエウツイ

ペルシヤ人

カバールディン

ウズベック

レスギ

クル

アゼルバイジャン

オセツト

タジーク

サル

イメレティン

トルコマン

スヴァネト

ジプシ一(前方アジャ)

高 身 長(一七〇〇粋以上)

一六五〇

一六五三

一六五四

一六五七

一六五九

一六五九

一六五九

一六五九

一六五九

一六二三

一六一六

一六二九

一六二八

一六三一

一六三三

一六三六

一六三九

一六四〇

一六四三

一六四四

一六四五

一六四六

一六四七

一六四九

一六五〇

一六五三

一六五五

一六五七

一六五九

一六六一

一六六三

一六六六

一六六九

一六七一

一六七三

一六七五

一六七八

一六七九

一六八一

一六八四

一六八五

一六九一

一六九三

一六五九

一六六八

一六六九

一六七一

一六七三

一六七五

一六七八

一六七九

一六八一

一六八四

一六九一

一六九三

一六九五

一六九六

一七〇〇

一七〇一

一七〇三

一七〇五

一七一三

カレリアン
リヴォニア人

一七二〇
一七三六

頭形指數から見るとイラニアン諸國(ペルシャ人、エツイデ、クルト)と
言語學的にトルコ化されたイラニアン(タート、アゼルバイジヤン、アフ
ガン)は中頭型である。印度人及ジプシー(内部アジアの)も又中頭型であ
る。フィン系の民族も又多く中頭型である。(ヴオグール、オステイヤク、
エストニア人、リヴォニヤ人、フィンランドのフィン)。

トルコ人及び蒙古人は短頭型又は過短頭型と云はれてゐる。主なる蒙古
種族のカルムツク、トルグート、ブリヤートは短頭型であり、トルコ族、
カラ・キルギス、タミク、キルギスは過短頭型である。例外をなすものは
トルコ部族に屬する長頭型のトルコマンであるが、これはペルシャ人と
混血の結果であらうと云はれてゐる。

ドゥンガンも又長頭型(七六・〇五)である。或る學者は彼等を支那化し
たトルコ族と考へてゐるが、然し支那の回教徒であると信じてゐる人もゐ
る。全支那人の平均指數は七九・六一であるがクルジヤの支那人は七八・四
一、北部支那のものは七七・〇である。更にフィン系のラップは八四の短
頭型を持ちツイリヤンは八六・三六の過短頭型を持つてゐる。アメリカノ
イド・ギリヤークも又過短頭形指數を持つてゐるが、近住民のアイヌ、ツ
ングースは七九と八三一八〇である。アルメニヤ人の過短頭形指數は彼等
がアリヤン系のイラニヤン群に屬すると云ふ學說に反證を與へるものであ
る。

頭形指數

印 度 人
長 頭 型(七六・四以下)

七五・二

北方國の民族構成

ジブシ一(前方アジア)
ラブラドル・エスキモ

トルコマン

七五・二
七五・五三
七五・六三
七六・〇五

ドウンガン

東部エスキモ

七七・三
七七・三

エイヌ

中頭型(七五・六一八〇・九)

七七・三

アゼルバイジヤン

エスキモ

七七・五七
七七・五七

アゼルバイジヤン

デ

七七・八六
七七・九〇

ヴオグール

日本

七八・一五
七八・二九

クル

人

七八・四一
七八・六二

タト

ペルシャ人

七八・七二
七八・九〇

カムチヤダール

七九・二〇
七九・二〇

アラスカ・エスキモ

チエレミス

七九・三三
七九・三六

オスティヤク

七九・五二
七九・六四

エストニア人

七九・九
七九・九

ジット

八〇・〇
八〇・四

北部ツングース

七九・六四
七九・九

アルタイ・タタール

八〇・四
八〇・六七

リヴォニヤ人

七九・九
七九・九

チヴァンツイ

八〇・〇
八〇・四

コリヤーク

八〇・二四
八〇・四

アフガン

八〇・二四
八〇・四

ユカギール

八〇・六七

短頭型(八一・〇一八五・九)

ル	八一・一六	イメレテイン	八三・〇九
カレリアン	八一・一九	モルドヴァ	八三・二一
アジア・エスキモ	八一・二〇	タタール(カウカス)	八三・四九
メスチエルヤーク	八一・六四	カバールディン	八三・七三
リトワニア人	八一・八八	アレウト	八三・八〇
白ロシア人	八一・八七	カラチエウツイ	八三・八八
チユクチ	八一・九〇	サモエド	八三・九五
オセティヤク	八一・九四	ラツブ(ロシア)	八四・〇〇
アブカースツイ	八一・九五	アフガント	八四・二三
タタール(カザン)	八二・〇八	タルコ人	八四・二四
アラブ	八二・一〇	トルグート	八四・七〇
ボトランド人	八二・一三	カライト	八四・七三
イシングシ	八二・一四	タジーク	八四・八〇
小ロシア人	八二・三一	ジヨルジヤ人	八四・八五
チエチエン	八二・三七	ブリヤート	八五・三六
大ロシア人	八二・三九		八五・八七
ベルミヤク	八二・四〇		
シボ(満洲族)			
ミングレリアン			
ツングース			
バシキル			
ユダヤ人(ロシアの)			
カルムック			
ヤクト			
オロチ			
ジプシー(タウリデ)			

過短頭型(八六以上)

テレンギット	八六・一四	カラ・キルギス	八六・一七
ウズベック	八六・二六	ウズベック	八六・三〇
ギリヤーク	八六・三〇	アルメニア人	八六・三六
ツイリヤン	八六・四六	アルメニア人	八六・四六
タランチ	八六・四六	タランチ	八六・四六
ウディン	八六・八六	ウディン	八六・八六
カルムック(クルジャ)	八六・九八	カルムック	八七・〇四
クミク	八七・一〇	キルギス	八七・一〇

國	人	中	狹	顏	面	指	數
日本	アラブ人	アフガン人	タジーク人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七一・三五
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七二・四六
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七三・一九
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七三・三三
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七三・六八
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七四・三一
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七四・七〇
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七五・一六
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七五・三一
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七五・五〇
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七五・七七
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七六・二二
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七六・三一
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七六・四五
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七六・七三
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七六・六七
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七七・八〇
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七七・一五
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七七・二六
		アフガン人	カレリアン人	カレリアン人	ペルシャ人	メツレガソツイ	七七・四一

アイヌ	小ロシア人	七八・一二
アルミニア人	アルミニア人	七八・三一
インクシ	インクシ	七八・三七
イメルティン	イメルティン	七八・三八
タタール(カザン)	タタール(カザン)	七八・六四
ヴオティヤク	ヴオティヤク	七八・七〇
アイソール	アイソール	七八・七三
ル	ル	七八・七九
ヤクート	ヤクート	七八・二五
クミ	クミ	七八・四三
オスティヤク	オスティヤク	七八・四七
オセティン	オセティン	七八・六〇
ウデイ	ウデイ	七八・六五
ブリヤート	ブリヤート	七八・七二
カルムツク	カルムツク	七八・七九
ミングレリアン	ミングレリアン	七八・八七
テレンギト	テレンギト	八〇・〇八
キルギス(中部群)	キルギス(中部群)	八〇・三一
オセティン	オセティン	八〇・四二
ペルミヤク	ペルミヤク	八〇・八二
ツングース	ツングース	八一・〇六
レスギン	レスギン	八一・七七
ジブシ	ジブシ	八一・二六
トルグート	トルグート	八四・一三
		八五・一〇

比較表

ジプシー(前方アジア)

アイヌ

アゼルバイジヤン

ヴォグール

日本(歐洲)

ジプシー

クルド

支那人

ベルシャ人

アフガン

アフイン

アジアのエスキモ

ル

カレリアン

メスチエルヤク

リトワニア人

白ロシア人

チュクチ

ダオティヤク

オセティン

アブカースツイ

タタール(カザン)

アラブ

ボル

イング

小ロシア人

頭形指數

七七・一〇

七七・三〇

七七・五七

七七・九〇

七八・一五

七八・三六

七八・二九

七八・七二

七八・六六

七八・七二

七八・六七

七八・一〇

七八・二四

七八・六七

七八・七二

七八・六六

七八・一九

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一四

七八・一三

七八・一三

七八・一四

七八・一三

七八・一三

顔面指數

八四・二三

八二・五七

七五・八八

七五・七七

七一・三五

七九・二一

七五・三二

七四・三一

七三・七四

七三・七五

七三・一九

七三・七四

七三・六六

七三・一六

七三・〇九

七八・三八

七八・二五

七八・二一

七八・一〇

七八・一四

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一九

七八・一六

七八・一三

七八・一三

チエチエン	大ロシア人
ペルミヤク	ミングレリアン
ツシングラー	バシキル
ユダヤ人(ロシア)	カルムツク
カバルドイン	イメレテイン
タルクート(クリミヤ)	カバルディン
タタール(クリミヤ)	タジーリヤト
ブルグート	アルメニヤ人
タラント	ツイリヤン
ウズベック	アルメニヤ人
タラント	ツイリヤン
ウデイン	アルメニヤ人
ウデイン	アルメニヤ人
クミクン	アルメニヤ人
キルギス	アルメニヤ人
ラーヴ	アルメニヤ人
レスギーン	アルメニヤ人
アイソール	アルメニヤ人

一般に頭形と顔形との比率には一定の關係があるのであって、廣頭は廣

顔を伴ふことが普通であるが、グリーンランド・エスキモは此の例外をなし甚だしき長頭と甚だしき廣額を有してゐる。

アイヌ(顔面指數七八・〇七、頭形指數七七・〇三)、蒙古系のトルグート

(八五・二と八四・七三)、歐洲ジプシー(七九・一六と七八・三六)、前方アジアジプシー(八四・二三と七五・一〇)、フイン系オステイヤク(七九・六と七九・二三)は大なる顔面指數を持つてゐる。他の種族は一般に頭幅に比べると狹額を持つてゐる。兩指數の差違限域は一一二単位である。蒙古部族はトルコ部族よりも其の差異が少ない。それでブリヤートとカルムツクの頭形指數は顔面指數よりも夫々六と三単位大である。然しトルコ系キルギ

スとウズベックの頭形指數は顔面指數よりも夫々七と九単位だけ大である。最大なる差違はアジアのヤフェタイド Japhetides とアリヤン人の或る部族に起つてゐる。カウカス人のラーゼとトルケスタンのタジークの顔面指數は夫々一と一二単位だけ頭形指數よりも小である。

第四節 エスキモ居住地域

エスキモ族に關しては事實的な考察が充分なされてゐるのであるが、最も興味ある説はエスキモ族は直接歐洲の洪積世人類(ネアンデルタール人、又はクロ・マニヨン及びオベルカツセル人)に其の起源を遡ることを得、且つ直接に北アジアの蒙古人と結合して考へてゐるものである。移住してゐる廣大な地域の北邊は約緯度七一度まで上つてゐる。

言語及び他の文化は正しく單一と見做されるが多少地域的個別性を表はしてゐる。従つて

(一) アラスカ群は十二以上の部族からなりビハーン Byhan に依れば人口約一萬四千人である。彼等は比較的氣候の最も良い北方に住む一部は森

林地に居住し往々インディアン及びアジア人と接觸したので他のエスキモよりも文化内容が豊富で多様である。

(二) マツケンジー下流のエスキモ。

(三) 中央エスキモ、バシユールスト入江から東方ハドソン灣の北西岸に到るカナダ大陸に住む十八部族及び更に遠くの北岸の東半部、バフィン島、グリーンランドの西岸北緯七八度附近に住し人口千五百人である。

(四) ラブラドル・エスキモ、人口千五百。

(五) グリーンランド・エスキモ、人口、東岸には五百、西岸には一萬人住んでゐる。

(六) ベーリングアジア沿岸エスキモ(ユイト)の六群に分つことが出来る。

エスキモの語は「生肉喰人」 Esquimati を意味しアルゴンキン種族のアプナキ族が興へた名稱であつて自らはイヌイートと稱してゐる。

身長は平均一・六二米であるが南アラスカのものは一・六六米、ラブラドル、グリーンランドのものは一・五八米である。

頭形指數はアラスカのものは七九、グリーンランドのものは七六・八、北部のものは頭蓋指數が七〇一七二であつて高頭・長頭型に屬してゐる。皮膚は黃褐色、眼裂は直狀で紅彩は黒色、額骨隆起し鼻も相當高く額は圓形、唇は厚い。毛髮は黒色粗剛で出生兒には日本人と同じく脣部に青色の所謂蒙古斑點が現はれる。

アレウト族はアレウト列島に居住するエスキモに類する民族であつて、エスキモ方言を用ひてゐるが眞正のエスキモ族に反し短頭型である。コンマンドル島のものはロシア人、アイヌの影響を受けてゐる。

北太平洋沿岸のエスキモとインディアンの身長

	員 數		♂ 耗	♀ 耗	性別 差 耗
	♂	♀			
A) 小民族 (1600耗以下)					
ラブラドル・エスキモ	26	-	1575	1480	95
B) 低民族 (1601—1650耗)					
サリシヤン(ハリソン湖 英領カナダ)(ドニケ)	90	-	1613	-	-
フレーザー河口のサリシヤン	30	-	1618	-	-
グリーンランド・エスキモ(ドニケ)	614	-	1621	-	-
カキウトル・インディアン(ドニケ)	55	-	1639	-	-
C) 高民族 (1651—1700耗)					
アラスカ・エスキモ(ボゴラス)	34	-	1658	1551	107
ベラ・クーラ・インディアン(ドニケ)	26	-	1661	-	-
ツイムシヤン・インディアン(ドニケ)	37	-	1666	-	-
シユースワップ・インディアン(ボゴラス)	114	-	1673	1557	116
チヌツク・インディアン(ボゴラス)	22	-	1691	-	-

同質的な民族であるが、内部アラスカ群はインディアンのアサパスカン、アルゴンキンの影響を受け、ユーロン附近に住むものは北西海岸及びロシア民族の影響を受け、ベーリング海峡のものはシベリア民族の影響を受けてゐる。

アラスカのエスキモは中部及び南部群よりも身長が高く、平均身長男性は約一六八纏であつて東部エスキモよりも一〇纏高い。中部エスキモ(サザンプトン島)はヒルドリツカに従へば平均約一六二纏である。西部エスキモも女性の平均は一五八纏であつてヘドソン湾地方の男性の身長に近い(一五八纏ボアス)。アラスカの女性體型は東部に於けるものよりも細長であつて顔幅も非常に小さい。西部に於ける體型の此の變化は環境の相異に基づくか、インディアン又はアジア部族との混血に基づくかは決定されてゐない。

然し北部アラスカのエスキモはアサパスカン及びティオヌデス島を通じてシベリアと交易してゐたのである。

然し次表に示す如くエスキモも部族の人種的親縁性を示す頭形、頭高、鼻形、眼窓の平均指數は二群とも非常に近似してゐるのであつて、長頭型、巨眼窓上縁、狭鼻型が共通である。

指數から見ると西部エスキモは東部エスキモよりも中部エスキモに近い。

關係がある。

東部(ラプラドルとグリーンランド) 中部(サザンプトン島)
西部(アラスカ)エスキモの指數變異比較表

らず増加してゐる。

頭形指數は頭高指數、高幅指數が東から西に行くに従つて減ずるに係は

指 數	頭 蓋 數	地 方	平 均	偏 差			變 異
				最 大	最 小		
頭 形 (長幅)	20	東	71.5	75.4	65.8	9.6	
	14	中	74.55	78.2	68.6	9.6	
	21	西	74.748	79.66	70.35	9.3	
垂 直 (長高)	9	東	73.5	79.2	69.3	9.9	
	14	中	74.3	79.2	66.2	13.0	
	21	西	73.673	76.76	68.84	7.92	
眼 窓	8	東	88.65	94.7	78.6	16.1	
	3	中	90.87	105.4(?)	82.4	23.0	
	21	西	89.98	99.50	83.95	15.55	
鼻 形	7	東	45.55	50.0	40.3	9.7	
	13	中	43.05	48.4	38.7	9.7	
	21	西	41.072	48.0	33.93	15.07	
顔 面	6	東	54.36	62.3	49.3	13.0	
	13	中	52.65	54.9	46.1	8.8	
	21	西	53.09	59.29	44.05	15.24	
下 顎 骨	7	東	80.9	91.5	74.6	16.9	
	21	中	75.92	89.20	71.74	15.46	
		西					
上 顎 歯 槽	7	東	112.1	120.0	105.3	14.7	
	13	中	119.4	127.3	106.7	20.6	
	18	西	120.545	129.79	106.78	23.0	
地 平 周 徑	10	東	513.5	550.0	476	74	
	14	中	517.0	532.0	491	41	
	21	西	507.8	540.0	487	53	

エスキモ群の頭形、頭高、高幅指數の比較表

	員 數	性 別	測 定 者	頭 形	頭 高	高 幅
東 部 群——						
東グリーンランド	4	?	バーンシ	72.9	74.2	101.70
西グリーンランド	21	?	ペツセルス	72.6	73.7	101.05
ラ プ ラ ド ル	6	?	ダックウォース	72.08	73.05	101.34
中 部 群——						
ス ミ ス 海 峡	99	?	ペツセルス	71.37	76.91	107.96
サザンプトン島	9	男	ヒルドリツカ	74.2	74.1	99.8
サザンプトン島	5	女	ヒルドリツカ	74.9	74.5	99.4
マツケンジー——						
ヘルシエル島	9	?	ラツセル	74.6	73.5	98.76
ア ラ ス カ——						
バロービ岬	16	男	ホーキス	72.65	73.24	100.68
バロービ岬	5	女	ホーキス	76.06	74.45	98.01
ベーリング海峡	4	?	軍醫博物館	75.82	76.33	100.76
ア レ ウ ト	15	?	ペツセルス	86.49	74.02	86.05

バロー岬のエスキモは上顎面指數（コールマンの）男性五二・四八である

が女性は低い兩額骨幅に依つて高く五四・〇五を示してゐる。

兩別の平均は五三・〇九であるが、サザンプトン島は五一・六五である。ラブラドル、グリーンランドの顔面指數は五四・三六であつて、之は上顎面指數は各エスキモ群に於ける恒數的要素である。

鼻形指數はエスキモに於ては特に重要な徵表であつて蒙古體型と區別する。

中部及グリーンランドのエスキモは頭幅に比して非常に顔幅が廣いのが特徴である。一般の比率は一〇二である。

頭蓋容量はバロー岬（ホーキス）のエスキモは男性平均一四二・六立方厘米であるがサザンプトン島（ヒルドリツカ）のエスキモは一五六・三立方厘米である。

るに有用である。

エスキモ群の頭幅と顔幅との比率比較表

地 方	頭蓋數	性別	測 定 者	顔 幅	頭 幅	比 率 顔幅/頭幅
グリーンランド	5	男	デーヴィス	147	140	105
グリーンランド	5	女	デーヴィス	130	130	100
スミス海峡	85	?	ペツセルス	133	130	102
バフィン灣西岸	5	男	デーヴィス	137	135	102
バフィン灣西岸	2	女	デーヴィス	124	132	94
サザンプトン島	9	男	ヒルドリツカ	145	140	103.5
サザンプトン島	5	女	ヒルドリツカ	138	137	100.7
ヘルシエル島	9	?	ラツセル	139	137	101
バロー岬	15	男	ホーキス	141.2	137.3	102.5
バロー岬	5	女	ホーキス	132	136.2	96.8
ベーリング海峡	2	男	軍醫博物館	134	136.5	98.12
ベーリング海峡	2	女	軍醫博物館	130	131	99.24

生 體 計 測

地 方	頭形 員數	性別	測 定 者	顔 幅	頭 幅	比 率 顔幅/頭幅
ラブラドル	3	男	ウイルヒョウ	147	149	99
ラブラドル	2	女	ウイルヒョウ	134	137	98
マツケンジー (ククバグミート)	12	男	ストーン	147.8	144	102.1
マツケンジー (ククバグミート)	6	女	ストーン	139.7	141.5	99
内部アラスカ (ヌナタグミート)	12	男	ストーン	155.7	154.5	100.8
内部アラスカ (ヌナタグミート)	5	女	ストーン	144.6	142.6	101.6

エスキモは最も

狹鼻型の人種に属

するものであつて
ブロカは四二・三
三の鼻形指數を與
へてゐる。バロー

岬のエスキモ（男
性平均四〇・六九、
女性平均四一・六
二）はサザンプト
ン島のエスキモ（男
性四二・三、女性四
五・八）より少し低
い。ラブラドル及び
グリーンランドの
エスキモはダツク
ウォース・ベーン
に依れば平均四
五・五である。

エスキモはダツク
ウォース・ベーン
に依れば平均四
五・五である。

彙報

対策の一を爲すことは周知の如くであるが、昭和十七年八月二十一日の閣議は右結核対策に對する大綱の決定を爲すに到つた。その要綱並に之に關する首相及び厚生大臣の談話を掲ぐれば左の如くである。

結核対策要綱（昭和十七、八、二二） （閣議決定）

第一 趣旨

人口問題研究所創立以來調査部長として、また特に昭和十六年五月以降は第二代の企畫部長として盡瘁された中川友長博士は今般東京帝國大學教授として専任の爲め本研究所を去らることとなり、之に伴ふ異動については昭和十七年九月二十三日左の如く發令された。

人口問題研究所研究官 岡崎文規
企畫部長ヲ命ス

第二 要領

結核撲滅は國家喫緊の要務にして皇國民の隆替に關係する重大事なり。依て此の際結核撲滅に關する強固なる國家意思を確立し厚生、教育、産業等の行政各分野を擧げて結核の豫防撲滅を権軸とする各般の施策を強力且徹底的に實施するを要す

而して結核は諸般の發病要因あるの特質に鑑み、之が豫防撲滅に當りては醫療対策の外寧る國民生活の全分野に亘り多角的なる諸対策を全面的に實施するの要あるものとす

四 一般的措置

（イ）保健指導網の整備
全行政組織、大政翼賛會其の他社會各般の組織の一切を擧げて保健指導網と爲し全國に亘り活動なる健民運動を展開すること

（ロ）社会保険制度の擴充
結核患者の療養を確保し並に患者家族の生活保護に資する爲社会保険制度を國民の全部に擴充強化すること

（ハ）日本醫師會の總動員
日本醫師會を總動員して全醫師を醫療普及に奨励、種々有益なる報告並に感想を聽取した。

結核対策要綱の閣議決定

結核対策が特に我が國今日の人口政策上緊急要緊の

各省は其の所管分野に付厚生省と緊密なる聯絡を保持しつゝ責任を以て健民政策を實行するものとす

各外地に於ては夫々當該地域の實情に應じ適切な措置を講じ結核の撲滅に努むるものとす

東條内閣總理大臣談

大東亞戰爭の完遂即大東亞建設の必成を期せんが爲には文教の刷新と健民國策の確立とは急務中の急務である。

依て政府は此觀點に立ち銳意研究思索を重ね來つたが教育問題に就ては曩に師範教育の改革を決定し更に進んで學制の全般に亘る改革を斷行し他方健民政策に就ては結核撲滅を核心とする具體的方策を確立し萬難を排して之が遂行を期せんとする次第である。

小泉厚生大臣談話

國力の根基は何物を描いても「人」に在る。然るに近時結核の蔓延甚しく特に青壯年層を蝕むの特異性あることは寒心に堪へない所である。依て本日の閣議に於て結核對策要綱を決定し、結核の豫防撲滅に關する強固なる國家意思を確立したのである。茲に強固なる國家意思を斷乎として確立したる以上は、獨り厚生省のみならず各省の行政分野を擧げて結核の豫防撲滅を樞軸とする健民政策を責任を以て強力且徹底的に實行することとは固よりであり、尙進んで全國に亘り地域的及職域的各般の組織の一切を擧げて活潑なる健民運動を展開し國民各自も亦健民報國の至誠を健民生活の實踐に現はされんことを期待して已まない。

而して結核對策の實施は單に醫療對策のみを以て足りりとするものでなく、寧ろ國民生活の全分野に亘り各般の施策を全面的に實施せんとするものである。

斯くして健民の實を擧げ青壯年男子中弱體の故を以て兵役に服し得ず又は統後產業戰線に就き得ざる

者の總てを立派なる第一戰兵又は產業戰士として奉公し得るの心身保有者たらしめ他面には健全なる日本女子青年の育成を目途とし、數年後には皇國を世界に於ける結核最少の國たらしめ國運の隆昌に寄與せんと固く決意してゐる次第である。

中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短縮に關する閣議決定

修業年限の短縮は單に現下當面の國策的要請としてのみならず、更に廣く人口政策の上からも關心せらるるところ極めて大きいが、昭和十七年八月二十一日の閣議は中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短縮に關する件につきその大綱の決定を見、今日情報局より左の如く發表せられた。

中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短縮に關する件

方針

右決定に對する橋田文相談

今回教育を我國教學の本義に則り劃期的に刷新充實しこれと不離一聯の關係において中等學校、高等學校高等科及び大學豫科の修業年限を短縮して學徒の實務に從事するの期を早からしむるとともに、學術文化の高度の發展を圖ることに閣議の決定を見たのである、修業年限の短縮は從來から學制改革的一大眼目であつて機會ある毎に檢討され實行上にも幾多の工夫が凝らされて來たのであるが大東亞戰爭完遂大東亞建設の實行に伴ひ感、切實なるものあり、よつて教育の劃期的刷新充實を圖り、これと不離一聯の關係において中等學校および高等學校の修業年限短縮を實行せんとする。

(一) 教育の根本的刷新充實を圖り中等學校の修業年

限は四年と高等學校高等科(大學豫科を含む)の修業年限は二年とす。

(二) 右年限短縮は昭和十八年度入學者よりこれを適用す。

(三) 教育の根本的刷新充實を圖るため必要なる措置を講ずることとし教科の刷新、教授力の充實、訓育を徹底すべき施設の充實、教育諸施設の整備擴充、教育者の確保等に關する具體的方策については別途これを決定す。

(四) 學術文化の高度の進展を圖るため最高の學術研究制度の劃期的刷新等必要な措置を講ずることとし、その具體的方策については別途これを決定す。

外地は右に準じて修業年限の短縮を行ふ。

とともに大學院のこゝ高度の學術研究制度の整備充實し、一日も早く若き力を實際活動に顯現せしむるよりも大學院のこゝ高度の學術研究制度の整備充實による我國學術文化の高度の進展を圖るといふ趣旨より出たものである。

しかして年限短縮は五年又は三年の學科課程を四年又は二年に壓縮して、學徒の負擔を徒らに増すことではなく、四年で高等普通教育を完成し、二年で更に精深なる高等普通教育を完成することを本旨とするものである、そのためには教科を根本的に刷新するとともに教員の養成をはじめとし教授力の充實とその確保また教育諸施設の整備ならびに教育資材の確保を圖り、さらに高等學校等における訓育を徹底すべき施設を充實することが必要であることはいふまでもないところであつて、その具體的内容は追つて別途決定せられるはずである、

また高等學校の年限短縮に伴つて大學教育に付ても工夫改善が考慮されねばならない、なほ修業年限の短縮によつて我國學術文化の低下を來たすが如きことがあつてはならないのみならず更に我國學術文化の水準を高度に進展せしむるため研究員の確保を圖ると共に大學院の如き高度の學術研究制度の創期的整備擴張を行つて研究者を養成し又諸外國學術文獻の翻譯を行ふこと等が必要であるが此等の具體の方策も追つて別途決定せられることになつてゐる。

戰爭下において教育の刷新充實を圖らんとするが如き我國の教育尊重の特殊なる事情に向つて教育者も學徒も心からなる感激をもつて國家の要請に應へて奮勵努力しなければならないのである、教育者は深く時局の要請に鑑み學徒の訓化啓導に渾身の努力を致し、學徒は負荷の大任を完ふすべき責任の感、重大なるを思ひよく矜持を持つて精勵せんことを切に望む次第である。

國民優生法施行規則中改正の件公布

國民優生法施行規則中改正の件は昭和十七年九月九日付官報を以て左の如く公布せられた。

國民優生法施行規則中改正ノ件
(昭和十七年九月九日)

昭和十六年六月厚生省令第一十二號國民優生法施行規則 第十七條第二項中「日ノ前日」ヲ「日前七日」ニ改メ様式 中左ノ通改正ス
別記 様式第十號

第十號ヲ別記ノ如ク改ム
附則

國民優生法第十六條ニ關スル届出書									
職業	性別	年齢	氏名	現 在 所	住 所	病 名	発病時ノ症狀及其 ノ後ノ經過	推定發病年月日	年 月 日
（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）	（詳細記入ノコト） （検査年月日モ記入スルコト）
手術又ハ處置別	分娩回數	過去ニ於ケル妊娠	生殖ヲ不能ナラシムル手術	妊娠中絶	手術又ハ處置ヲ 必要トスル理由	自然流死	人工妊娠中絶ヲ行ヒタルトキハ其ノ回數	妊娠月數	出生兒數
備考	施行豫定日時	昭和 年 月 日 午前 時	産アリタ ルトキハ 其ノ回數	行ヒタル醫師氏名	其ノ場所 ノ年月	其ノ回數	難產其ノ他 異状アリタ ルトキハ其 ノ状況	妊娠月數	出生兒數
府 縣 知 事 監 事 氏 名 殿	北海道廳長官 醫監 醫師 療所 所在地 若ハ住所 名所 師	昭和 年 月 日 年月日 見	診療所所在地若ハ住所 名	診療所名	一	一	一	一	一
電 話 名 番	氏	年 月 日 年月日 見	聽取年月日 昭和 年 月 日	聽取年月日 昭和 年 月 日	午前 時	午前 時	午前 時	午前 時	午前 時

記載注意

一 不要文字ハ抹消スルコト

二 特ニ急施ヲ要スル爲ニ事前ノ届出ヲ爲サザリ

シトキハ急施ヲ必要トセル理由ヲ備考欄ニ、施

行セル日時ヲ施行豫定日時欄ニ記入スルコト

三 他ノ醫師ノ意見ヲ聽クコト能ハザリシトキハ

其ノ理由ヲ備考欄ニ記入スルコト

注意 本届出書ハ所轄警察署長ヲ經由スルコト

〔参照〕

昭和十六年六月十日 厚生省令第二十二號國民優生

施行規則抄錄

第十七條第一項及第二項

法第十六條第一項ノ規定ニ依リ届出ヲ要スル手術

又ハ處置ハ左ノ各號ノ一二該當スル手術又ハ處置

トス但シ惡性腫瘍又ハ兩側副睾丸結核ニ對スルモノヲ除ク

(左記略ス)

醫師前項ノ手術又ハ處置ヲ行ハントスルトキハ其

ノ手術又ハ處置ヲ行ハントスル日ノ前日迄ニ様式
第十號ニ依リ所轄警察署長ヲ經由シ届出ヅベシ

勤勞顯功章令並に同令施行規則の公布

勤勞顯功章令並に同令施行規則は昭和十七年九月十九日付官報を以て左の如く公布せられた。

(昭和十七年九月十八日)
勅令第六百五十二號

勤勞顯功章令

第一條 勤勞顯功章ハ工場、礦山其ノ他厚生大臣ノ指定スル事業ヲ行フ事業場ノ勤勞者ニシテ平素其ノ職

務ニ精勵シ勤勞報國ノ實ヲ擧ゲ他ノ模範タルモノニ之ヲ授與スルモノトス

前項ノ規定ニ依ルノ外勤勞顯功章ハ工場、礦山又ハ前項ノ事業場ノ勤勞者ニシテ自己ノ危難ヲ顧ミズ其

ノ職責ヲ盡シ其ノ行爲他ノ模範タルモノニモ之ヲ授與スルコトヲ得

第三條 勤勞顯功章ノ形狀及制式附圖ノ如シ

第二條 勤勞顯功章ハ厚生大臣之ヲ授與ス

第四條 勤勞顯功章ハ之ヲ右肋ニ佩ブルモノトス

第五條 本令ニ定ムルモノヲ除クノ外勤勞顯功章ノ授與、返納其ノ他勤勞顯功章ニ關シ必要ナル事項ハ厚生大臣之ヲ定ム

第六條 本令中厚生大臣トアルハ陸軍又ハ海軍ノ事業ニ使用セラル勤勞者ニ關スル場合ヲ除クノ外朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、關東州ニ在リテハ滿洲國駐劄特命全權大使、樺太及南洋群島ニ在リテハ拓務大臣トス

本令中厚生大臣トアルハ陸軍又ハ海軍ノ事業ニ使用セラル勤勞者ニ關スル場合ヲ除クノ外朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、關東州ニ在リテハ滿洲國駐劄特命全權大使、樺太及南洋群島ニ在リテハ拓務大臣トス

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則

セラル勤勞者ニ關スル場合ヲ除クノ外朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、關東州ニ在リテハ滿洲國駐劄特命全權大使、樺太及南洋群島ニ在リテハ拓務大臣トス

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

表

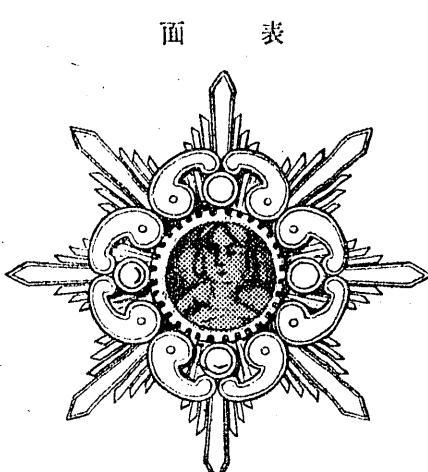
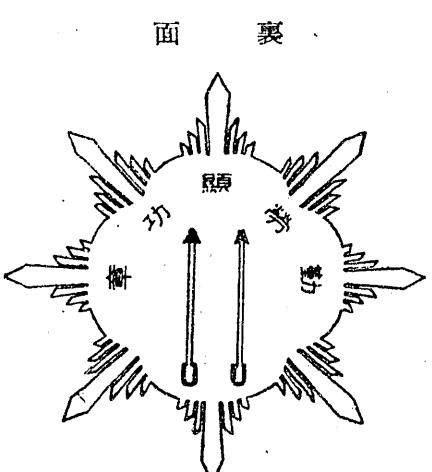


表 面



裏 面

表		制		式	
面	地質	銀	色	金	屬
裏面	大サ	浮	彫	ノ	通
側面	ノ部	玉	神像		
光	部	丸玉	真珠	丸玉	通
銀	部	曲玉	嵌入	真珠	通
色	中軸	銀色	上	曲玉	通
磨	側光	梨地	上	銀色	通
仕	銀	色	上	磨	通
上	色	梨	上	地	通
上	磨	地	上	仕	通
上	仕	上	上	上	通
上	上	上	上	上	通

勤勞顯功章令施行規則

(昭和十七年九月十九日
厚生省令第四十五號)

場、鑛山又ハ事業場ノ勤勞者ニシテ其ノ職務ニ精勵シ勤勞報國ノ實ヲ擧ゲタルモノニ地方長官又ハ鑛山監督局勤勞章ヲ授與シテ之ヲ爲スモノトス

第一條 勤勞顯功章令第一條第一項ノ規定ニ依リ勤勞顯功章ヲ授與セラルベキ者ハ本令ニ定ムル地方長官又ハ鑛山監督

ヨリ之ヲ銓衡スルモノトス但シ特別ノ事情アルトキハ地方表彰ヲ受ケザル者ニ付テモ之ヲ銓衡スルコト

アルベシ

第二條 勤勞顯功章ヲ授與セラルベキ者ニハ其ノ授與前死亡シタルトキト雖モ仍之ヲ授與ス

第三條 勤勞顯功章ヲ授與セラレタル者受章者タルノ面目ヲ毀損スルニ至リタルトキハ之ヲ返納セシムルコトアルベシ

第四條 勤勞顯功章ヲ授與セラレタル者之ヲ亡失又ハ毀損シタルトキハ厚生大臣ハ願出ニ依リ之ヲ再下付スルコトアルベシ

第五條 勤勞顯功章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ遺族之ヲ保存スルコトヲ得

第六條 勤勞顯功章ヲ授與シタルトキ又ハ第三條ノ規定ニ依リ之ヲ返納セシメタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ公示ス

第七條 勤勞顯功章ハ式典其ノ他ノ廉アル場合ニ之ヲ佩用スルモノトス

第八條 地方表彰ハ勤勞顯功章令第一條第一項ノ工

第九條 勤勞章ノ形狀及制式附圖ノ如シ

第十條 勤勞章ハ之ヲ右肋ニ佩ブルモノトス

第十一條 第一條乃至第五條及第七條ノ規定ハ勤勞章ニ之ヲ準用ス但シ第四條中厚生大臣トアルハ地方長官又ハ鑛山監督局長トス

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則

昭和十六年十二月九日厚生省令第六十四號勞務調整令施行規則中左ノ通改正ス

勞務調整令施行規則中改正ノ件

昭和十六年十二月九日厚生省令第六十四號勞務調整令施行規則中左ノ通改正ス

勞務調整令施行規則中改正ノ件

(昭和十七年九月九日
厚生省令第四十三號)

本令ハ昭和十七年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則

昭和十六年十二月九日厚生省令第六十四號勞務調整令施行規則中左ノ通改正ス

勞務調整令施行規則中改正ノ件

昭和十六年十二月九日厚生省令第六十四號勞務調整令施行規則中左ノ通改正ス

勞務調整令施行規則中改正ノ件

(注意)「本期雇入計畫數」欄中「認可ヲ受ケテ雇入

レントスル一般青壯年」中ニハ職業紹介規程第三

章ノ適用ヲ受クル學校等ノ卒業者(昭和十六年十二月以後卒業シタル者ニ限ル)ニシテ卒業後二年

ヲ經過セザルモノハ之ヲ含マシメザルコト



國民職業能力申告令中改正の件公布

國民職業能力申告令中改正の件は昭和十七年九月一日付官報を以て左の如く公布せられた。

國民職業能力申告令中改正の件

(昭和十七年九月一日
厚生省令第四十二號)

昭和十五年十月厚生省令第四十三號國民職業能力申告令

第二條第六號ノ要申告者ニ關スル申告ノ特例ニ關スル件中左ノ通改正ス

第一條中「昭和十五年十月十九日」ヲ「昭和十六年十月十六日」ニ改ム

第三條中「一般職業能力申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ、「申告控」ヲ「登錄濟證」ニ改ム

第四條中「一般職業能力申告要用紙」ヲ「青壯年國民登錄票用紙」ニ改ム
錄票用紙」ニ改ム

第五條中「申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ改ム

第七條中「一般職業能力申告票用紙」ヲ「青壯年國民登錄票用紙」ニ改ム
票用紙」ニ、「申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ改ム

第九條ヲ削リ第十條ヲ第九條トシ第十一條ヲ第十條トス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

昭和十五年九月十日厚生省令第四十三號抄錄

第一條第一項

國民職業能力申告令(以下令ト稱ス)第二條第六號

ニ依リ昭和十五年十月十九日厚生大臣ノ指定シタ

ル者(以下要申告者ト稱ス)ニ關スル令第四條第一

項ノ申告ハ毎年九月末日現在ヲ以テ十月十日迄ニ

居住地ノ市町村長ヲ經由シ當該市町村ヲ管轄スル

國民職業指導所長ニ之ヲ爲スベシ

第三條 第一條ノ申告ハ一般職業能力申告票(別表

様式)ニ依リ之ヲ爲シ當該申告控ハ要申告者之ヲ

保管スベシ

第四條 一般職業能力申告票用紙ハ居住地ノ市町村

長ヲ經由シ當該市町村ヲ管轄スル國民職業指導所

申告期限迄ニ一般職業能力申告票用紙ノ交付ヲ受

ケザル要申告者ハ居住地ノ市町村長ヲ經由シ又ハ

經由セズシテ當該市町村ヲ管轄スル國民職業指導

所長ニ其ノ交付ヲ請求スベシ

第五條 市町村長ハ申告期限後十日以内ニ要申告者ヨリ申告票ヲ取纏メ當該市町村ヲ管轄スル國民職

業指導所長ニ之ヲ提出スベシ

第七條 勞務動態調査規則第十條ノ勞務動態調査員ハ市町村長ノ指揮監督ヲ受ケ一般職業能力申告票

用紙ノ配付又ハ申告票ノ蒐集ニ從事ス

第九條 第一條ノ申告ヲ爲シタル要申告者ハ其ノ保

管ニ係ル申告控ヲ徵兵検査ノ日ニ徵兵官ヲ經由シ

テ前ニ申告ヲ爲シタル國民職業指導所長ニ返還ス

ベシ

食糧管理法ノ一部施行期日ノ件等公
布

(昭和十六年九月三十日勅令第六百五十一號)

食糧管理法第四十五條第一項第四號ノ規定ハ昭和十七年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

昭和十七年二月二十日公布法律第四十號食糧管理法抄錄

第四十五條第一項

左ニ掲タル法律ハ之ヲ廢止ス

四 米穀配給統制法

昭和十四年勅令第五百五十一號米

穀配給統制法一部施行ニ關スル件

及昭和十四年勅令第六百七十八號

米穀配給統制法一部施行ニ關スル

件廢止ノ件(昭和十六年九月三十日勅令第六百五十一號)

昭和十四年勅令第五百五十一號及昭和十四年勅令第六

百七十八號ハ之ヲ廢止ス

附一則

本令ハ昭和十七年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス

第三條中「一般職業能力申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ、「申告控」ヲ「登錄濟證」ニ改ム

第四條中「一般職業能力申告要用紙」ヲ「青壯年國民登錄票用紙」ニ改ム
錄票用紙」ニ改ム

第五條中「申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ改ム

第七條中「一般職業能力申告票用紙」ヲ「青壯年國民登錄票用紙」ニ改ム
票用紙」ニ、「申告票」ヲ「青壯年國民登錄票」ニ改ム

第九條ヲ削リ第十條ヲ第九條トシ第十一條ヲ第十條トス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

昭和十五年九月十日厚生省令第四十三號抄錄

第一條第一項

國民職業能力申告令(以下令ト稱ス)第二條第六號

ニ依リ昭和十五年十月十九日厚生大臣ノ指定シタ

ル者(以下要申告者ト稱ス)ニ關スル令第四條第一

項ノ申告ハ毎年九月末日現在ヲ以テ十月十日迄ニ

居住地ノ市町村長ヲ經由シ當該市町村ヲ管轄スル

國民職業指導所長ニ之ヲ爲スベシ

第三條 第一條ノ申告ハ一般職業能力申告票(別表

様式)ニ依リ之ヲ爲シ當該申告控ハ要申告者之ヲ

保管スベシ

第四條 一般職業能力申告票用紙ハ居住地ノ市町村

長ヲ經由シ當該市町村ヲ管轄スル國民職業指導所

申告期限迄ニ一般職業能力申告票用紙ノ交付ヲ受

ケザル要申告者ハ居住地ノ市町村長ヲ經由シ又ハ

經由セズシテ當該市町村ヲ管轄スル國民職業指導

所長ニ其ノ交付ヲ請求スベシ

第五條 市町村長ハ申告期限後十日以内ニ要申告者ヨリ申告票ヲ取纏メ當該市町村ヲ管轄スル國民職

業指導所長ニ之ヲ提出スベシ

第七條 勞務動態調査規則第十條ノ勞務動態調査員ハ市町村長ノ指揮監督ヲ受ケ一般職業能力申告票

用紙ノ配付又ハ申告票ノ蒐集ニ從事ス

第九條 第一條ノ申告ヲ爲シタル要申告者ハ其ノ保

管ニ係ル申告控ヲ徵兵検査ノ日ニ徵兵官ヲ經由シ

テ前ニ申告ヲ爲シタル國民職業指導所長ニ返還ス

ベシ

食糧管理法ノ一部施行期日ノ件

(昭和十六年九月三十日勅令第六百五十一號)

食糧管理法第四十五條第一項第四號ノ規定ハ昭和十七年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

昭和十七年二月二十一日公布法律第四十號食糧管理法抄錄

第四十五條第一項

左ニ掲タル法律ハ之ヲ廢止ス

四 米穀配給統制法

昭和十四年勅令第五百五十一號米穀配給統制法一部施行ニ關スル件

及昭和十四年勅令第六百七十八號米穀配給統制法一部施行ニ關スル

件廢止ノ件

(昭和十六年九月三十日勅令第六百五十一號)

昭和十四年勅令第五百五十一號及昭和十四年勅令第六百七十八號ハ之ヲ廢止ス

スニ當リテハ登錄票及登錄濟證ヲ對照シ其ノ記載事

項ニ脫漏又ハ誤謬ナキヲ確認シタル後檢印及割印ヲ

押捺シタル上登錄濟證ヲ切取り之ヲ要申告者ニ交付

スベシ

食糧管理法の一部施行期日の件等公布

(※番號)



青壯年國民登録票

昭和十七年九月三十日現在

男

※大分類業		※中分類業		※職業		印		太明治年月日生		印		檢印			
第一學年在學		昭和年月修了豫定		昭和年又八徴集		昭和年任官年		昭和年大正年		昭和年又八徴集		昭和年任官年			
區町村大字		區町村大字		町		市		縣府道		縣府道		三場住所			
番地		番地		町		市		郡		縣府道		一本籍			
人		人		人		人		人		人		一氏年月及			
(一)精神 狀況		(二)身體 狀況		(三)既教育 補二國		(四)未教育 補二國		(五)既教育 補二國		(六)未教育 補二國		(七)役 務		四兵役關係	
技		特		年		月		年		月		地		所在	
人		人		人		人		人		人		事業種別		使用者姓名	
(一)現二扶養 者ノ同居人		(二)職業上身 位		(三)經驗年數		(四)配偶者 有無		(五)職業內容		(六)職業名		(七)職業內容		(八)職業名	
數		級		數		柄		職業內容		職業名		職業內容		職業名	
別居人		人		別居人		人		世帶主世帶員		世帶主世帶員		世帶上位		(九)地帶上位	
計		人		人		人		人		人		人		戶主ト	
精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況		精神又 身體狀況	

別表様式一用紙ノ大サハ日本標準規格B5ト入

注意 一、其ノ旨報告スルコト尙其ノ報告ニハ此ノ登録ヲシテアル居住ノ場所及職業名ヲ必ず附記スルコト爲ス場合ハ此ノ登録ヲシテ國民職業指導所長ニ記載シテアル居住ノ場所及職業名ヲ必ず附記スルコト専用登録済證ハ右ノ異動報告ヲ爲ス場合又ハ國民職業指導所ヨリ其ノ提示ヲ求メラタ場合	
昭和年月日申告	
國民職業指導所	
青壯年國民登録済證	
一氏年月日及 一、生年月日	
二本籍	
三場住所	
四職業名	

人口登録住所 滝川県 滝川市

青壯年國民登録済證		昭和年月日及	一氏名	二本籍	三場住所	四職業名	昭和年月日申告	注意此ノ登録済證ハ國民職業指導所ヨリ其ノ提示ヲ求メラレタ場合ニ必要アルカラ一年間之ヲ保管
青壯年國民登録済證		大正治年月日生	市町村番地	市町村番地	市町村番地	市町村番地	市町村番地	

(※番號)

青壯年國民登録票		昭和十七年九月三十日現在	女					
		昭和年月日申告	國民職業指導所					
		三場住所	二本籍	一生年月日及	六家庭狀況	四學歷	※摘要要	
		縣府道	縣府道	(八)職業內容	(口)職業名	(イ)含ム就業先場所	(1)職員主下柄	(口)現地又ハ学校修業又ハ学校施設
		市郡	市郡	(九)事業種別	(十)使用者氏名ハ	(乙)現ル者ノ扶養同居人	(乙)世帯主世帶員(就業ノ種類又ハ身)	(イ)學校類又ハ学校施設
		町	町	(十一)事業上地位	(十二)分業上地位	(十三)現年數	(十四)世帶主世帶員(就業ノ種類又ハ身)	(口)現地又ハ學校修業又ハ學校施設
		區町村大字	區町村大字	(十五)年月	(十六)年月	(十七)年數	(十八)現年數	(口)現地又ハ學校修業又ハ學校施設
		町	町	(十九)月	(二十)月	(廿一)年	(廿二)現年數	(口)現地又ハ學校修業又ハ學校施設
		番地	番地	(廿三)日	(廿四)日	(廿五)年	(廿六)現年數	(口)現地又ハ學校修業又ハ學校施設
		方地	方地					(口)現地又ハ學校修業又ハ學校施設

用印

別表様式二用紙、大サハ日本標準規格B(トス)

價格等統制令施行規則中改正ノ件

(昭和十七年九月十一日
閣令第二十三號)

價格等統制令施行規則第十一條中「米穀配給統制法」ヲ削ル

附 則

本令ハ昭和十七年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

昭和十四年九月十日閣令第十三號價格等統制令施行規則抄錄

第十一條 統制令第六條第三項ノ規定ニ依リ法令ヲ定ムルコト左ノ如シ

(左記略ス)

農地開拓團編成助成規則中改正の件公布

農地開拓事業補助規則中改正の件は昭和十七年九月十一日付官報を以て左の如く公布せられた。

(昭和十七年九月十一日
農林省令第六十六號)

第一條 拓務大臣ノ承認シタル集團的ニ滿洲開拓民ヲ

満洲開拓團編成助成規則
(昭和十七年九月二十一日
農林省令第十二號)

第二條 補助金ノ額ハ左ノ標準ニ依ル

一 開拓民及其实業ノ渡満ニ要スル費用(渡満旅費及仕度金)ニ對スル補助金

二 開拓民ノ未招致家族ノ援護ニ要スル費用

三 開拓團ノ編成ニ當ル專任職員ニシテ拓務大臣ノ承認シタルモノノ設置ニ要スル費用

満洲開拓團編成助成規則の公布

満洲開拓團編成助成規則は昭和十七年九月二十一日付官報を以て左の如く公布せられた。

付 付官報を以て左の如く公布せられた。

満洲開拓團編成助成規則
(昭和十七年九月二十一日
農林省令第十二號)

第一條 拓務大臣ノ承認シタル集團的ニ滿洲開拓民ヲ

満洲開拓團編成助成規則
(昭和十七年九月二十一日
農林省令第十二號)

補助金ニ對シ之ヲ交付ス

一 開拓民及其实業ノ渡満ニ要スル費用(渡満旅費及仕度金)ニ對スル補助金

二 開拓民ノ未招致家族ノ援護ニ要スル費用

三 開拓團ノ編成ニ當ル專任職員ニシテ拓務大臣ノ承認シタルモノノ設置ニ要スル費用

開拓團編成推進員ノ設置其ノ他開拓團編成計畫ノ促進ニ要スル事業費

道府縣ガ開拓團編成主體ナルトキハ前項ノ補助金ハ道府縣ノ前項各號ニ掲グル費用ニ對シ之ヲ交付ス

第五條 道府縣補助金ノ交付ヲ受ケントスルトキハ申請書ニ左ノ書類ヲ添附シ拓務大臣ニ提出スベシ

一 道府縣及開拓團編成主體ノ事業計畫書

二 道府縣及開拓團編成主體ノ收支豫算書

三 道府縣ノ補助ニ關スル規程

前項ノ書類ノ外拓務大臣ハ必要ト認ムル書類ノ提出ヲ命ズルコトヲ得

第六條 補助金ノ交付ヲ受ケタル道府縣前條第一項各號ノ書類ニ重大ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ拓務大臣ノ承認ヲ受クベシ

第七條 拓務大臣必要アリト認ムルトキハ道府縣ニ對シ第五條第一項第一號ノ事業計畫ノ變更ヲ命ズル

上必要ナル事項ヲ命ズルコトヲ得

第八條 補助金ノ交付ヲ受ケタル道府縣ハ開拓團編成主體ヨリ毎月第三號様式ニ依リ開拓民渡満月報ヲ徵

シ之ヲ翌月十月迄ニ拓務大臣ニ報告スルノ外事業成績書及收支決算書ヲ翌年六月三十日迄ニ拓務大臣ニ提出スベシ

道府縣ガ開拓團編成主體ナルトキハ前項ニ準ジ開拓

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

附 則

昭和十六年九月十八日農林省令第八十九號農地開發

事業補助規則抄錄

民ノ渡済狀況ヲ拓務大臣ニ報告スベシ

第九條 補助金ノ交付ヲ受ケタル道府縣又ハ開拓團編

成主體左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ拓務大臣ハ補助金ノ全部若ハ一部ノ還付ヲ命ズルコトヲ得

一本則ニ違反シタルトキ

第一號様式

第一次開拓團編成計畫承認申請書

年月日

編成主體名印

今般別紙ノ通第 次 開拓團編成計畫樹立候條御承認相成度關係書類相添ヘ此段及申請候也

第一次開拓團編成計畫書

二、計畫樹立ノ趣旨

三、編成主體

府縣名	郡名	町村名	備考

五、計畫戶數

町村名	總戶數	農業戶數	計畫戶數	備考

八、團編成中心人物

住所	職業	氏名	年齡	備考

六、先遣隊、本隊及家族送出計畫

二、補助金交付ノ條件ニ違反シタルトキ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

三、事業施行ノ方法不適當ト認ムルトキ
四、開拓民ノ送出計畫ヲ變更シ若ハ中止シ又ハ送出

第五條第一項第一號ニ掲タル費用ニ對スル補助金ハ昭和十六年度以前ニ開拓民本隊ノ送出ヲ開始シタル開拓

團編成計畫ニ付テハ之ヲ適用セズ

計	種別	先遣隊		本隊		家族		備考
		年度	區分	年度	區分	年度	區分	

七、指導員候補者

種別	氏名	年齢	役職名	出身町村名	備考
團長					
農事指導員					
畜產指導員					
警備指導員					
經理指導員					
保健指導員					

考

年月日

拓務大臣宛

今般別紙ノ通 第 次大陸歸農 開拓團編成計畫樹立候條御承認相成度關

係書類相添ヘ此段及申請候也

九、計畫促進ノ具體的方策
十、殘留家族援護方法並ニ負債及財產ノ處分方法

一、添附書類

本申請書ニハ當該町村會、組合會等ノ議事錄寫、豫算案、町村情勢一覽其ノ他参考資料ヲ添附スルコト

二、記載上ノ注意事項

(一) 「分村分鄉名」ハ滿洲國開拓團法ニ依リ團名ノ正式決定ヲ見ル迄慣用セラルベキ名稱ヲ記入スルコト

(二) 「計畫戶數備考欄」ニ農山漁村ノ別ヲ記入スルコト

(三) 「指導員候補者備考欄」ニハ確定、見込ノ別ヲ記入スルト共ニ同種指導員ニシテ一人以上ノ候補者アルトキハ之ヲ記入スルコト

(四) 「團編成中心人物欄」ニハ團ノ編成及計畫實行ニ專心當り得ル人物ニシテ編成専任職員又ハ編成推進員ノ候補者タルモノニ付記入スルコトトシ「備考欄」ニハ現地視察ノ有無、拓務講習會受講ノ有無等ヲ記入スルコト

(五) 「計畫促進ノ具體的方策欄」ニハ村内ニ於ケル關係團體ノ活用方策、編成推進員制度其ノ他計畫促進ノ方策ヲ記入スルコト

(六) 「殘留家族援護方法並ニ負債及財產處分方法」ハ成ルベタ詳細ニ記入スルコト

(七) 集合開拓團ノ計畫書モ本様式ニ準ジテ作成スルコト但シ先遣隊、本隊及家族送出計畫ヲ先發隊後續隊及家族送出計畫ニ修正スルコト
計畫戶數二集合百戸等ノ場合ニシテ一集合五十戸宛ニ分チ二年度ニ跨リ之ヲ送出セントスルトキハ本様式ニ依ル年度區分ヲ利用シ記入スルコト
宗教的緣由ヲ有スル計畫其ノ他特殊ノ計畫ニ付テ本様式ニ準ジテ作成スルコト

第二號樣式

第一次 大陸歸農 開拓團編成計畫承認申請書

編成主體名

團長	種別	氏名	年齡	役職名	出身町村名	備考

八、指導員候補者

月割區分	昭和年月	計	先發隊			後續隊			家族			備考
			月	月	月	月	月	月	月	月	月	

五、計畫戶數
四、團員構成
三、編成主體
二、開拓團名
一、計畫樹立ノ趣旨

策、編成推進員制度其ノ他計畫促進ノ方策ヲ記入スルコト

(六) 「殘留家族援護方法並ニ負債及財產處分方法」ハ成ルベク詳細ニ記入シ國民更生金庫利用ノ有無、主務官廳及商工業組合ノ共助金下付ノ有無等ニ付記入スルコト

(七) 集合開拓團ノ計畫書モ本様式ニ依リ作成スルコト
宗教的緣由ヲ有スル計畫其ノ他ノ特殊ノ計畫ニ付亦同ジ

第三號樣式

第一 次 開拓團開拓民渡滿月報 (昭和 年 月分)

報告責任者名
經由道府縣名

渡 滿 月 日	區 分	職業	學 歷	身 份	報告責任者名		
					團員家戶主文ハ團員トノ續柄	氏 名	年 齡

計
團
員
名
家
族
名

(注意)

一、本月報ノ報告責任者ハ開拓團編成主體トス

二、開拓團編成主體ハ毎月本月報ヲ五部作成シ道府縣ニ提出スルコト
道府縣ハ内三部ヲ管下開拓團ノ分ヲ一括シ拓務省ニ提出スルコト

三、本月報ハ渡滿月日ヲ基準トシ當月分ニ付作成スルコト

四、職業欄中農業者ニ付テハ自小作及專業、兼業ノ區分ヲ(例ヘバ農業(小作、兼

業)ノ如シ)、大陸鹽農者ニ付テハ業主ト從業員等ノ區別(例ヘバ食料品販賣業

(四) 「團編成中心人物欄」ニハ團ノ編成及計畫實行ニ專心當リ得ル人物ニシテ
編成事任職員又ハ編成推進員ノ候補者タルモノニ付記入スルコト
「備考欄」ニハ現地觀察ノ有無、拓務講習會受講ノ有無等ヲ記入スルコト

(五) 「計畫促進ノ具體的方法欄」ニハ計畫區域内ニ於ケル關係團體ノ活用方
依リ記入スルコト

五、學歷ハ國民學校初等科卒業(國初卒)、農業學校中途退學(農中退)等ノ略語ニ

六、戸主又ハ團員トノ續柄欄ニハ團員ニ付テハ戸主ナリヤ否ヤ、戸主ナラザルト

キハ戸主トノ續柄ヲ、家族ニ付テハ團員トノ續柄(妻、長男、次女ノ如シ)ヲ記

入スルコト

七、訓練期間ノ欄ニハ始期及終期ニ付記入スルコト

厚生省人口局の健民特別指導地區設

定要綱の決定

厚生省人口局に於いては健民運動の着實なる發展に資するため健民特別指導地區を設定することとし、今度その決定要綱を各地方長官宛通牒するところあつたが、その内容を掲げれば左の如くである。

健民特別指導地區設置に關する件

依命通牒

(昭和十七年九月十二日)
各地方長官宛厚生次官通牒)

人口の急激にして且永續的な發展増殖と其の資質の飛躍的向上とを圖り以て健民の實を擧ぐる爲政府に於ては種々施策しつゝあるところなるも之が急速なる具現を期する爲豫て政府に於ては種々施策を実施するため健民特別指導地區を設定することとし、今度その決定要綱を各地方長官宛通牒するところあつたが、その内容を掲げれば左の如くである。

健民特別指導地區設置に關する件

五、地區の數

地區の數は各道府縣及六大都市毎に概ね一箇所とす

ること但し小規模の一團地の場合は之を合して一箇町村程度たらしむこと

六、地區の指定

人口の急激なる增加と其の資質の飛躍的向上とを圖り以て健民の實を擧ぐる爲豫て政府に於ては種々施策を実施するため健民特別指導地區を設定することとし、今度その決定要綱を各地方長官宛通牒するところあつたが、その内容を掲げれば左の如くである。

二、方法

一定地域を指定して健民特別指導地區とし之に對し

國、道府縣、關係團體等の指導助成其の他各種施策を

徹底集中し現在の施設を最大限度に活用すると共に特

に必要と認めらるゝ事項に關しては可及的之が實現を

圖ること

三、特別指導の對象たるべき地域の名稱 健民特別指導地區(以下單に地區と稱す)

1. 國民體力法に依る體力検査及壯丁検査の成績
2. 流早死産の狀況
3. 乳幼兒死亡の狀況
4. 結核蔓延の狀況
5. 國民體力法に依る體力検査及壯丁検査の成績
6. 體力鍛成の狀況
7. 環境衛生の狀況
8. 其の他

四、地區の規模

地區の大きさは概ね左の規準に依ること

尙之が實施綱目に付ては追て指示の豫定に付指定地及び指定申請は右指示を俟つて之を行はるべきも本年度に於ては不取收既定豫算の執行に當り本要綱に則り重點的に支出を行ふ方針なるを以て貴道府縣に於ける豫算執行に就いても本要綱の趣旨に則應し支出を行ふは勿論之が目的達成に遺憾なきやう豫め御配慮相成度

しきは保健區又は部落程度の小規模の一團地と爲すことを得ること

健民特別指導地區設定要綱

(ロ) 指定地圖に對しては政府は厚生省（厚生科學研究所及人口問題研究所を含む）を中心とし各省協力の下に指導助成を之に集中すること

八、健民特別指導委員會

健民特別指導の徹底を期する爲道府縣には地方長官を委員長とする道府縣健民特別指導委員會、厚生省には厚生次官を委員長とする厚生省健民特別指導委員會を設置すること

九、其の他

健民特別指導に關し必要な事項は別に之を定むること

昭和十七年度地方衛生技術官事務打合會の開催

昭和十七年度の地方衛生技術官事務打合會は九月厚生本省に於いて開催せられたが、右會合に於ける指示事項要目を掲ぐれば左の如くである。

指 示 事 項

一、健民対策の徹底に關する件
現下の時局に即應し眞に健民の實を擧ぐるは焦眉の急務にして豫て政府に於ては之が施策の推進を圖る爲國民體力鍊成、國民保健指導及國民醫療の各體制の整備充實に努めつゝあるのみならず他方結核撲滅を核心とする具體方策を確立し萬難を排して之が遂行を期しつゝあるを以て各位は宜しく政府の所信を諒得し健民対策の徹底に格段の努力を致されたし

一、結核の豫防撲滅に關する件
結核の撲滅は國家喫緊の要務にして皇國民の隆替に

關する重大事なるに鑑み政府は義に閣議に於て結核對策要綱を決定し結核の豫防撲滅に關する強固なる國家意思を確立して諸般の施策施設を整備徹底せしむることとせり各位は本閣議決定の趣旨を體し結核豫防事業の徹底に格段の努力を致されたし

一、乳幼兒體力向上指導に關する件
乳幼兒の體力向上指導は本年度より國民體力法第六條の二の規定に依り地方長官に於て市町村長をして行はしむることとなりたるを以て之が實施に當りては體力手帳を活用するの外適切なる各般の施策を講ぜられたし

一、體力検査後の措置に關する件
國民體力管理の目的達成は一に懸つて被管理者の自己の體力に關する自覺の振起並に體力検査後の措置の徹底に在り依て各位は今回の國民體力法改正の趣旨を體し時機を逸すことなく本法施行上必要なる指示及命令を發し或は筋骨薄弱者の修鍊とは貧困者の療養指導の完璧を期する等之が結果の措置に付萬遺憾なきを期せられたし

一、妊娠婦の保健指導其の他保護に關する件
妊娠婦の保健指導其の他保護の徹底を圖る爲本年七月妊娠手帳規程を公布したる處其の實效を擧ぐる爲には特に醫師會、助產婦會、母性保護會、母性補導委員、方面委員等との聯絡を緊密にし之が積極的活動を促進し診察及検査等保健指導の勵行に力むる

一、日本醫療團の業務執行に關する件
日本醫療團は去る六月設立を完了し目下其の業務の執行に關し銳意準備中にして近く之を完了したる上速に事業の全面的實施に着手せしむる豫定なるを以て其の具體的業務の執行に際しては圓滑且急速なる遂行を期するに格段の協力を致せられたし

一、醫師會及齒科醫師會令の施行に關する件
國民優生法の實施以來の狀況を見るに未だ本法制定の本旨十分に理解せられざるやの憾あるを以て各位

は本邦が人口の増強と國民素質の向上を期する人口政策上の重大使命を有するに鑑み一層之が思想の普及啓發に努め國民優生の達成に格段の力を致されたし

一、癩豫防の徹底に関する件

癩の豫防に關しては政府は昨年七月公立癩療養所を國營に移管しが整備充實を計りたるが各位は一層豫防思想の啓發と無癩運動の促進に努め以て本病豫防の徹底に努められたし

一、花柳病豫防に関する件

花柳病の徹底的豫防に關しては之が蔓延の現況と時局下其の豫防の緊要なることに思ひを致し一層の配意を拂はれたらし

一、消化器傳染病の豫防に関する件

赤痢、腸チフス等の消化器傳染病は近年稍減退の兆あるも依然我が國傳染病の過半數を占むるの現況に鑑み其の未然防止に重點を置き之が撲滅に一段の努力を致されたし

一、小兒傳染病の豫防に關する件

小兒傳染病中百日咳、麻疹等に因る死亡は傳染病死亡總數の約七割に該當し乳幼兒保健上憂慮すべきものあるを以て之が豫防に遺憾なきを期せられたし

一、寄生蟲病の豫防に關する件

寄生蟲は我が國農村衛生上重要な對象たるものならず時局下榮養物資の關係等よりするも之が防退は忽緒に附し難きものあるを以て本病の豫防撲滅に格段の力を致されたし

一、戰時下國民榮養指導に關する件

國民榮養の確保改善を圖るは刻下喫緊の要務なるを

以て各部は關係方面との緊密なる連携の下に夫々地方の實情に即したる榮養の指導に格段の力を致されたし

厚生省勞働局の重要事業場特別鍊成

實施要綱の決定

2 事業主の諮詢審議
3 勞務管理刷新方策の研究企畫
4 其の他

四、其の他

1 專門委員會 各種問題別に専門委員會を設け得ること

生産力擴充の國策的要請に伴ふ青少年工場勞務者の激増はその反面に一部の憂ふべき不良化現象を隨生するのを止め難いが、厚生省勞働局に於ては之が對策として重要事業場特別鍊成實施要綱を決定し、昭和十七年九月各地方長官宛通牒を發するに到つたが、その内容を擗れば左の如くで、その成果如何は人口問題

上も關心せらるゝ所極めて多い。

一、趣旨 勞務管理上要特別鍊成の從業者に對して矯導を加へ以て健全なる勤勞者たらしめんとす
2 會議は原則として毎月一回以上開催すること
3 勞務管理に關する各種委員會其の他之に類するものは右専門委員會として吸收又は其の統制傘下に入ること

重要事業場勞務管理委員會設置要綱

一、設置の趣旨 事業場の全幹部一體となりて勞務管理上の諸問題に付積極的なる研究を遂げ以て適切なる具體策の樹立及之が強力なる實行を期せんとする

二、組織
1 委員長 事業場の長
2 顧問 勞務監理官、軍監理官其の他委員長に於て適當なる者を委嘱すること
3 委員 各部課長、青年學校長、寄宿舎々監、工場監等

4 幹事長 主任勞務擔當者
5 幹事 若干名
6 鍊成期間 一ヶ月以上三ヶ月以内に於て受鍊成者の情狀に依り工場長逐次鍊成修了を決定す

五、鍊成就服 事業主は要特別鍊成者に對し鍊成に就服すべきことを指示す
六、鍊成計畫の認可 事業主は特別鍊成計畫を定め其の都度左の事項に付厚生大臣の認可を受べし
(一) 當該從業者に付特別鍊成を課すべき理由
(二) 鍊成日程、鍊成內容及之に要する經費
(三) 鍊成期間中に於ける受鍊成者の待遇
(四) 指導者(個人又は團體)及擔當教師名
(五) 鍊成修了者に對する修了後の措置

1 勞務管理上の事務打合

七、結果報告 特別鍊成を了し相當期間を経過して其の成果の判明したときは厚生大臣に受鍊成者の從業状況を報告すべし

特別鍊成實施上の注意

一、特別鍊成は労務管理上施すべき教養訓練の最後の手段として實施するのであるから、實施者は最も慎重なる態度を以て之に臨まなければならぬ。従業者をして皆誠心誠意職務に勉勵せしむるやう指導説教することは事業場に於ける労務管理の責任であつて、従業態度に如何はしき者あればとて、之を直ちに従業者の責に歸することは妥當を缺く場合が多い。事業主が當然施すべき労務管理上の手段を缺くことあらば、之が爲に従業者の從業態度に悪影響を及ぼす」とあるは寧ろ當然であつて、事業主は先づ自己の労務管理を反省し、改むべきは速かに之を改め、施すべきは滞りなく之を施さなければならぬ。本鍊成は少くとも本省に於て指示するところの労務管理上の手段は之を施行し盡して、而も猶ほ甚だしく従業態度に缺ぐるところある者に對して行ふ、特殊矯導であつて決して制裁を意味するものではない。從つて本鍊成を實施するに當つては、如上の趣旨を體して其の濫用を戒め、徒らに矯導不能の理由に基き従業者を解雇することに依つて、工場労務の健全維持に努めるが如き弊に陥らぬやう特に注意すべきである。

二、鍊成計畫の認可は重要事業場労務管理令施行規則第十三條第三項第四項に該當する認可である。此の認可は毎年定期に申請することを原則とするが、

特別鍊成の場合には最初から要特別鍊成者が存在するものと前提することが出來ないから要特別鍊成者、發生の場合に於ける臨機の措置として、其の都度認可を申請すべきである。但し同様鍊成を繰り返しに行ふ場合は單に其の實施を届出すれば足る。言ふまでもなく此の種認可の精神は、政府に於ても事業場の實情を慮り、其の施設の目的達成に對して積極的に協力せんとする趣旨に他ならない。事業主は其の施設の實施に先立ちて關係官とよく懇談を遂げ、力を戮せて其の成果を大ならしむることに努むべきである。

三、事業場に於ける職員は一般従業者の範たるべき地位にある。従つて其の日常に於ける服務態度は直ちに一般従業者の従業態度を規制するものであるから、先づ職員自らが全従業者に服務垂範の實を示すべきである。之が爲には平常自ら修め日々自ら努めなければならない。此の垂範なくして従業者のみに精勵を強ふるとも、そは多くの場合反つて弊害がある。本鍊成を實施するに當つては職員も亦鍊成に参加して生徒の推挽に付指導者に協力すべきである。

四、特別鍊成の指導に當る者は事業場の職員を以てするを原則とすれども、社内に適當なる指導者なき場合には社外の個人、團體、公機關、私機關等に委嘱してもよい。要は此種指導に於ける鍊達の士を之に當てるなどを要望するのである。而も之等の指導者は鍊成に對する確乎たる信念と、生徒をして眞人間にしておればならない。斯の如きは獨り指導の委嘱を

受けたる者の力に依つてのみ發揚されるのではなく、寧ろ之を委嘱する事業場に於ける幹部の熱意に依つて誘發されるのである。事業場に於ける幹部諸士は諸士も亦共に指導者たるの熱意を以て之に臨み、其の成否の責任を分擔するの覺悟がなければならぬ。

五、工場長のなす要特別鍊成者認定の標準は必ずしも重要事業場に共通するを要しない。事業場に於ては夫々自己の標準を作製して置くべきであらう。

一般に要特別鍊成者と認むべき者は、其の原因を訊ねれば、必ずや深くして且つ複雑なる過去の環境の所産である。それ故に、責任を負ふべきものは其の人に非ずして寧ろ其の環境にありと言ふも妨げない。特別鍊成を課するに當つては先づ各個に其の原因を探究し、出来るだけ其の禍源を芟除して、生徒をして不幸なる此種環境より蟬脱せしむることに努むべきである。

六、特別鍊成の内容に就ては要するに諸種の原因に基づく従業態度の不眞面目、團體生活訓練の不充分等を矯めて以て誠實健全なる職務奉公の善良勤勞者たらしむるやう矯導するにあるを以て、之が爲適當と認むる方法を選みて其の内容とするものならば、必ずしも其の形式を一にするの必要はない。去り乍ら、之が施設に當つて特に留意すべき事項を指摘すれば概ね左の諸點である。

イ、指導者と寢食起居を共にし、行事を通して精神に立歸らしめんとする摶烈なる熱意と、其の缺陷を矯正せんばざる烈々たる氣魄とを有するの人、士でなければならぬ。斯の如きは獨り指導の委嘱を

ロ、嚴格なる行事を實踐せしむると共に、温情味溢すこと

るゝ明朗愉快なる催事をも加味して、生徒をして、
鍊成を厭はしめざるやう寛嚴其の宜しきを得ること

ハ、國體の本義を解明し、正しき國家觀を確立せし

めて、國民精神を蘇らしむるやう努むること

ニ、通俗なる講話、勤行實踐等により、感恩報謝の

人生觀を確立せしめて、勤勞精神を旺盛ならしむ

るやう努むること

ホ、戰爭實話、ニュース映畫等により、時局認識を

高めて、重要產業に從事する自己の重責を自覺せしむるやう努むること

七、凡そ矯導の成功には先づ生徒の實體を審にするこ

とが必要である。指導者は鍊成當初に於て健康診

斷、精神鑑定、智能検査等を行ひ、生徒の實體を科

學的に把握することに努むべきである。又生徒の家庭、特に其の母と連絡協力して、生徒の幼時よりの

性格を知悉することも亦重要である。

八、特別鍊成の道場に就ては附近に修養道場あらば之

を用ひ、然らざる場合には近郷に存在する神社、佛寺等の聖域を借りて臨時に道場を設置する。又寄宿

舍の一部を之に當て、神殿、佛壇等を設けて適當に道場たらしめてよい。今日資材拂底の場合、徒らに設備の優を誇らんよりも、一意真劍に行ずるの態度こそ望ましいのである。

九、鍊成の期間は明らかに要綱に示すところであるが、之が運用に當つては必ずしも最低一ヶ月間を道場に籠詰せよとの謂ではなく、少なくとも一ヶ月以上を鍊成期間として指導下に置くべきことを指示するのである。其の間と雖或は作業に就かしめ、或は

道場に説きて、最低一ヶ月を経過の後、工場長が鍊成目的を達成したりと認定するに至つて初て修了せしめる。但し此の期間の最大限を三ヶ月として一應

勞務管理上の責任に限度を定めてあるが、事業主に於て其の期間の延長を希望する場合に於ては、所管

勞務管理官の指導を仰ぐべきである。

一〇、要特別鍊成者には感激性強く、義俠的な性格の者も少くないであらう。斯る性格者に鍊成を加ふるときは忽ち變じて常人も及ばざる優良者となる場合が多い。去り乍ら、之等の者の中には意志薄弱にして、一度惡環境に遭遇すれば容易に還元して更に一層悪化するの懼なしとしないのであって、鍊成修了後に於ける適切なる措置こそは本鍊成の成果を恒久的ならしむる爲に必須の重要な事である。

今茲に其の事後措置に付留意すべき事項を擧ぐれば概ね左の如くである。

イ、修了者の配置に當つては職場に於ける上長及同僚との性格的調和を圖つて配置すること

ロ、職場内殊に直接上長、同室關係者に對しては、

修了者を迎ふるに恰も病氣全快の友人を迎ふるが如き態度を取らしめ、苟くも嫌惡、侮蔑するが如き言辭を用ひしめざるやう嚴重に注意を與へ置くこと

ハ、修了者にして成績優秀なる者に對しては之を表彰すること、又昇進の遅れたる者に對しては速かに追ひ附かしむるやう考慮すること

ニ、修了者をして完全に其の過去を忘れ去らしむる爲に、修了後の相當期間は舊知、悪友等を近づけざるやう努むること

ホ、同窓會を作らしめ、相互激励をなさしむると共に、屢々指導者と會議するの機會を作ること

ヘ、感想文又は懺悔錄の如きものを提出せしめ、そ

むること

内閣統計局調査昭和十七年七月分全 國及都市別生計費指數の發表

内閣統計局の調査に係る昭和十七年七月分の全國及都市別生計費指數は昭和十七年八月二十九日付官報を以て左の如く發表せられた。

(一) 全國生計費指數

本表は月收百圓以下六十圓以上の労働者、給料生活者の生活に付昭和十二年七月を100として比較したる生計費指數なり

内 部 譯	生計費指數	本 月		前月ヲ百 トシタル 騰落割合	前年同月ヲ 百トシタル 騰落割合
		飲食料費	住居費		
被 裝 費	一五七二	(+)	一〇	(+)	一二
光 热 費	一四七五	(+)	〇・四	(+)	四三
其 他 の 諸 費	一〇〦〦	(+)	〇・〇	(+)	四五
被 裝 費	三七九	(+)	〇・四	(+)	七三
光 热 費	一四七五	(+)	〇・〇	(+)	四五
其 他 の 諸 費	一〇〦〦	(+)	〇・〇	(+)	七三
給 料 生 活 者	一一〇〇	(+)	〇・〇	(+)	七三
前月ヲ百 トシタル 騰落割合	百トシタル 騰落割合	前年同月ヲ 百トシタル 騰落割合	前年同月ヲ 百トシタル 騰落割合		

商工省の昭和十七年七月都市小賣物價概況の發表

商工省の調査に係る昭和十七年七月の三十都市小賣物價概況は昭和十七年八月十二日付官報を以て發表されたが、その一部を掲ぐれば左の如くである。

横須賀	一六五	一七三	(+)	六
静岡	一八五	一七九	(+)	全
濱松	一六〇	一七三	(+)	全
長野	一七九	一七九	(+)	六
和歌山	一七五	一七五	(+)	元
姫路	一四二	一四七	(+)	四三
岡山	一八三	一七〇	(+)	五九
松江	一八〇	一七一	(+)	四二
松山	一七三	一七四	(+)	二
小倉	一七八	一七五	(+)	究
崎長	一七〇	一七六	(+)	四一
鹿児島	一七七	一七〇	(+)	八三
全國	一七〇	一七八	(+)	五五

縮に關する閣議決定に則應し、翌政會政務調查會に於いては昭和十七年九月十五日「修業年限短縮に關する重要施策を決定、同日阿部總裁より書面を以て首相及文相に進達するところあつたが、之を掲ぐれば左の如くである。

修業年限短縮に關する施策

政府今回の修業年限短縮案は殆ど教育の全系統及び全施設に重大影響を及ぼす我が學制的根本的改編であつて周到なる用意と萬全の方策とが講ぜられなければならぬ、しかして教育刷新の指標としては特に(一)國體に淵源する學國精神の陶冶徹底と(二)科學技術教育の普及向上に重點を置き、以て大東亞の指導的國民たるの資質を培培するに萬遺漏なきを期せねばならぬ、これがためには政府において左の準備、用意をもつてこれが實施に當るの要ありと認むる。

一、年限短縮案實施に先立ちこれが

準備として行ふべき事項

(イ) 各學校における教科内容の改正調査 今回の修業年限短縮は單に中學校、高等學校高等科大學

豫科のみならず廣く農業、工業、商業、水產、商

船等各種の實業學校、高等女學校並に專門學校入

學無試驗檢定指定學校にも適用せられる、從つて

これら各學校の從來規定せられたる學科目及び教授時數等に關し大改正を加へ、或は各學科目相互間または上下學校相互間の教科内容の重複を避け

連絡統一を圖り、或は學科の改廢統合を行ひ殊

に講義と實驗實習との調節配配を圖る等各學校に於ける學科課程に關し急速調査をなし、しかもこ

學校修業年限短縮に關する翼政會の

施策進言

中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短

人口問題研究會主催の第十五回人口問題同

攻者會合は昭和十七年九月十二日厚生省大會議室に於いて「東亞共榮圈の人口」なる論題の下に開催せられた。當日の講師及び講演題名を掲ぐれば左の如くである。

○東亞共榮圈の人口

人口問題研究所研究官 館 稔

○華僑に就て

東亞研究所研究員 福田省三

中等學校、高等學校高等科及大學豫科の修業年限短

これが調査は各學校における全學年を一體として調査研究せらるべきものと認むる。

又學科目、教授時數等の改正と不離一體の關係において各學科教授の指針となり、その程度を規定する教則もまた各學科目に亘つてこれを調査し改正を必要とする。

(ロ) 教授要目の改正調査 前項の學科課程並に教則等の全體的改編の調査完了によりこれに基いて各學科目的教授要目の改編が行はれなければならぬ、而して教授要目は各學科內容の骨子を形成するものであるから、慎重調査研究を經てこれが決定をなすを要する。なほ教則、學科課程、教授要目の改編後、教師にこの趣旨精神を體得せしめ、殊に教授法の改善、工夫及び研究をなさしむるの要ありと認むる。

(ハ) 教科書の編纂 新教授要目の編成の後、これを發表して各學科目ににつき教科書が編纂せられなければならない、教科書の編纂並にその發行、配給の遲延は學校教育に混亂を生ぜしむるが故にこの點につき深き留意を要する。

(ニ) 上級學校收容力の増加計畫 修業年限短縮の結果として(一)中等學校については昭和二十二年三月、新舊兩制の生徒が同時に卒業するがため、高等學校高等科及び專門學校の上級學校の入學志望者は激増する(高等學校にありては設備において三分一の餘剩を生ずる)(二)高等學校高等科(大學豫科を含む)については昭和二十年同じく新舊兩制の卒業者を出すを以て大學に入學すべき者は凡そ倍加する、もしこれに對し適切なる施設を講

じなければ卒業者は年々停滞して年限短縮の實效を失ふこととなる。よつて豫めこれが對策、計畫を具體的に決定してこれを公表し、苟しくも世上に疑惧の念ながらしむることが肝要である。一方中等學校には年限短縮に伴ひ設備の餘剰を生ずることとなるが將來益、中堅的人物を必要とするが故にこの設備を利用して收容人員の増加を圖るべきである。凡そ收容力の増加は主として科學技術教育の方面において行ふを適當と認める。

(ホ) 年限短縮案實施に伴ふ資材の確保 前掲の學科課程の改正に伴ふ教授内容及び方法の改善、收容力の増加等に對しては必然的に資材を必要とする。政府もまた既に教科の刷新、訓育施設の充實、教育諸施設の整備擴充を聲明してゐる。即ち本案の實施に伴ひ必要とする資材は物資動員計畫においてこれを確保するの方針を確立し置くべきである。

(ヘ) 實業學校の改革調査 今回の改正案には中學校と同じく實業學校に關してもその修業年限を四年に短縮した。中學校は高等學校及び大學と一聯の關係においてその年限を短縮せられてゐるのであるが、實業學校の年限短縮は實業學校の本質に影響するものであつて他と同一視し難いものがある。即ち實業學校が產業界の要求に應じ技術能力を低下せずしてこれが修業年限を短縮せんとするには特に慎重なる準備調査が行はるゝ要がある。殊に從來國民學校高等科卒業生を入学せしめたる修業年限三年(今回は二年)の實業學校において然りである。なほ實業專門學校についても同様

十分なる研究を要する。

(ト) 女子教育に關する調査 今回の改正案には高等女學校の年限を四年に短縮した。女子教育は男子の中等教育に比し、未だ發達の途中にあり、かつ母性教育の重要性に鑑み、女子教育は專攻科、研究科等と共に全體的にこれを考察して制度を定むるの要があるから、年限短縮に關聯して女子教育の方針に關し根本的に調査研究を行ふべきである。

(チ) 調査機關の設置 政府が行政簡素化を行ひ更僚の減員を行つてゐるに際し、前記各項の準備調査の如き急速これを實行するを要し、しかも修業年限を短縮しながら教育の向上充實を圖るの計畫を樹立する爲には、周到にして遺漏なき調査研究を要するを以てこの際有爲の専門家を動員して文部の調査機關を構成し、以て前各項の調査立案に當らしむるの要がある。

(ハ) 訓育の徹底充實 修業年限を短縮して有爲の人材でなければならぬ、これが爲には國民學校より大學に到るまで教員の待遇につき特に定期的改善を斷行することが必要である。宜しくこれが具體方策を樹て速に実施すべきである。

(ホ) 待遇の改善 修業年限を短縮しながら教育の充實を期するにはその教育者は在來よりも一層優良の人材でなければならぬ、これが爲には國民學校より大學に到るまで教員の待遇につき特に定期的改善を斷行することが必要である。宜しくこれが具體方策を樹て速に実施すべきである。

(イ) 教員の養成と再教育 今日國民學校、中等學校等において教員の不足を告ぐること特に甚しくある。數員の養成と再教育

今回国民學校、中等學校等における教育内容及び教授方法の刷新 中等學校、高等學校の年限短縮に伴ひ、大學における教育内容及び教授方法に刷新を加へ或は大學及び高等學校間において教授内容の調整を圖り或は學科目及び講座の改廢、或は實驗施設の改善、教授資料の整備を行ひ、以て教員等の方法を講じ、速にその補充に努力すべきである。なほ今回の修業年限短縮に伴ふ學科課程、教則及び教授要目の改正に關し教員をして克くその趣旨を理解咀嚼して教育の效果を擧げしむるには相當長期の再教育を受けしむる必要ありと認むる。

授能率の増進を圖り、又演習制度の擴充等大學教育の刷新を行ふべきである。

(2) 訓育施設の充實徹底 大學における訓育の徹底を期しその施設を充實し或は寄宿寮を整備し學風作興の中心たらしむべきである。

(3) 大學院の刷新充實 學術文化の高度の進展を圖るためには最高研究機關として大學院の制度に根本的検討をする、即ち學生の量と質において一大擴充向上を圖りその研究施設を充實しまた指導教授の職制を設け専任教授を特設するのみならず、給費制度の設定その他により國家として積極的に學徒をしてその研究に専念するを得しむるの施設をなすの必要がある、なほ大學院の刷新充實と相關聯して各種の研究所につきその施設を整備擴張するの要があるものと認むる。

昭和十七年七月末現在關東州人口の 發表

昭和十七年七月末現在の關東州人口は關東廳より左の如く發表された。

昭和十七年七月末現在人口概要

國籍	男	女	計
內地人	二六〇九〇	一〇三九四	三六〇八四
朝鮮人	三七九〇	三三〇三	六九三
滿洲人	六六九七	五九〇九一	一二七九七
外國人	七七三	八七七	一六五〇
總計	八九五九九	三七〇三三	一二七九七

昭和十七年七月末現在の關東州人口は關東廳より左の如く發表された。

國籍	昭和十七年七月末	昭和十七年六月末	昭和十六年七月末
內地人	三九九八四	三九六六六	三一四八七
朝鮮人	六九三	六九六	五九一
滿洲人	一二七九七	一二五七九〇	一二三六六
外國人	一六五〇	一六三七	一七九
計	一五九六五四	一五三九九九	一四五五九〇

(男女別)總人口を男女に分つと男は八八九、五五九人で總數の五割七分を占め、女は六五七、〇三五人で四割三分に當る。即ち男の女に超過すること二三三、五二四人で女百に付男一三五・四人に當る。之を國籍別に觀ると滿洲人が、最高率で一四〇・一八、亞いで朝鮮人の一一七・四人、內地人の一一一・七人、外國人の八八・一人の順位であつて、外國人のみ女超過である。

而して男女を前月に比すると男は五八〇人(人口千に付〇・七人)、女は二、三六五人(人口千に付三人)、又前年同月に比すると男は五四(四二三人(人口千に付六五人)、女は三六、三二九人(人口千に付五八人)を孰も増加した。既往一年間の増加數、増加率は共に男が高

國籍	男	女	計	付男
內地人	二六〇九〇	一〇三九四	三六〇八四	二七九
朝鮮人	三七九〇	三三〇三	六九三	二七四
滿洲人	六六九七	五九〇九一	一二七九七	一四〇
外國人	七七三	八七七	一六五〇	八一
計	一、五九六、五九四		一〇〇〦	

(國籍別)總人口を國籍別に觀ると滿洲人最も多く、一、三一七、九九七人で總數の八割五分を占め、亞いで内地人二二九、九八四人(一割五分)、朝鮮人六、九六三人(零分)、外國人一、六五〇人(零分)の順位である。之を前月に比すると滿洲人は二、二〇七人(人口千に付二人)、内地人は三六八人(人口千に付二人)、朝鮮人は三五七人(人口千に付五一人)、外國人は二三人(人口千に付八人)を孰も増加した。又前年同月に比すると滿洲人は八一、三二六人(人口千に付六六人)、内地人は八、四九七人(人口千に付四〇人)、朝鮮人は九八二人(人口千に付一六四人)を孰も増加したが、外國人のみは一四一人(人口千に付七九人)を減少した。既往一年間の増加數、増加率は共に滿洲人が多い。

(地方別)總人口を地方別即ち大連市、旅順市、旅順民政署、金州民政署、普蘭店民政署及貔子窩民政署別に觀ると大連市は七四六、七四一人(總數の四割八分)、旅順市は四一、九三五人(三分)、旅順民政署は一七二、一九八人(一割一分)、金州民政署は一九〇、七三一人(一割二分)、普蘭店民政署は二一六、七八七人(一割四分)、貔子窩民政署は一七八、二〇二人(一割二分)であつて大連市で最も多く、旅順市が最も少い。之を前月に比すると大連市は一、六五九人(人口千に付二人)、旅

順市は一一六人(人口千に付三人)、旅順民政署は三四人(人口千に付二人)、金州民政署は七八五人(人口千に付四人)普蘭店民政署は七四八人(人口千に付三人)を孰も増加したが、貔子窩民政署のみは七一五人(人口千に付四人)を減少した。又前年同月に比すると大連市は五五、二五一人(人口千に付八〇人)、旅順市は一五五〇人(人口千に付六五人)、旅順民政署は八、五四人(人口千に付七一人)、普蘭店民政署は八、五二九人(人口千に付四一人)、貔子窩民政署は三、〇五〇人(人口千に付一七人)を孰も増加した。

地方別	日本人			百分 比	
	内地人	朝鮮人	滿洲人		
大連市	一五五、〇五	西三、六〇	一、六四	七六、七一	四、三
旅順市	一、五三	三、三	一、五八	一、七	一、九
政署	一、五八	六、一	一、四〇	三、一	一、六
金州民	西三、三	一、六五	一、六六	一、六〇	一、六
政署	一、五三	一、六五	一、六六	一、六〇	一、六
普蘭店	一、五三	一、六五	一、六六	一、六〇	一、六
貔子窩	一、六五	二、八	一、六六	一、六九	一、六
民政署	三、九四	六、六六	一、三一	九、九七	一、〇〇
總計	三、九四、六、六六	一、三一、九七	一、六六、〇〇	九、九七、一〇〇	一、〇〇

國籍	大連市人口			百分 比
	男	女	計	
內地人	一〇一、六〇	九〇、一〇	一、九一、七〇	一、〇
朝鮮人	一、六一	一、六一	一、六二	一、六
滿洲人	一、六六	一、六六	一、六六	一、六
外國人	一、六六	一、六六	一、六六	一、六
計	西三、六六	一、六六、〇〇	一、六六、〇〇	一、〇〇

(大連市)大連市の總人口は七四六、七四一人で前月に比し一、六五九人、前年同月に比し五五、二五一人を孰れも増加した。

總人口を男女に分つと男四六五、六四九人(總數の六割一分)、女一八一、〇九一人(三割八分)で女百に付男一六五・七人の高率である。之を前月に比すると男は

五二三人(人口千に付一人)、女一、一三六人(人口千に付四人)を、又前年同月に比すると男は三四、五八二人(人口千に付八〇人)、女は一〇、六七〇人(人口千に付九〇人)を孰も増した。

更に之を國籍別に觀ると滿洲人最も多く五四三、六九〇人で總數の七割三分を占め、亞いで内地人は一九五、四九五人で二割六分、朝鮮人は六、〇九二人で一分、外國人は一、四六四人で零分の順位である。之を前月に比すると滿洲人は一、〇五七人(人口千に付二五六人)、内地人は二三三人(人口千に付一人)、朝鮮人は三六七人(人口千に付六人)、外國人は一五人(人口千に付一〇人)を孰も増加した。又前年同月に比すると滿洲人は三九、四一〇人(人口千に付七九人)、内地人は六七五五人(人口千に付三六人)、朝鮮人は八八三人(人口千に付一六九人)を孰も増加したが、外國人のみは一一八人(人口千に付九二人)を減少した。

(旅順市)旅順市の總人口は四一、九三五人で前月に比し一二六人を、又前年同月に比し一、五五〇人を孰も増加した。

總人口を男女に分つと男四六五、六四九人(總數の六割九分)、女一七、一六七人(四割一分)で女百に付男一、四四三人高率である。之を前月に比すると男は五八人(人口千に付二人)、女は六八人(人口千に付四人)を增加した。又前年同月に比すると男は一、六〇四人(人口千に付六九人)、女は九四六人(人口千に付五八人)を孰も増加した。更に之を國籍別に觀ると滿洲人最も多く二七、一八八人で總數の六割四分を占め、亞いで内地人は一四、三七七人で三割五分、朝鮮人は三五三人で一分、外國人は一七人で零分の順位である。之を前月に比すると滿洲人は八二人(人口千に付三人)、内地人は三九八人(人口千に付三人)、朝鮮人は五人(人口千に付一四二人)を孰も増加したが、外國人のみは増減がない。又前年同月に比すると滿洲人は一、九四七人(人口千に付七七人)、内地人は五、五八四人(人口千に付四二人)、朝鮮人は一七人(人口千に付五〇人)、外國人は二人(人口千に付三三三人)を孰も増加した。

人口問題研究第3卷第8號正誤表

11頁 第8表 女 觀察數 5、6段目

1 0-2 50) (は 59) の誤り
3-5 180) (は 80)